

プロジェクト・クロー ネのプロデューサー

変なおっさん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もし、武内Pがプロジェクト・クローネのプロデューサーをやることになったら、前のは処分して、もう一つ考えてた方を書いてみます。

文量は、切りの良い所で締めていますので多かったですり少なかったです。

2016/7/17

現在、作品は停止しております。

構成と演出の見直し、キャラの出演割合を考えていますので御待ち下さい。

目次

第12話	第11話	第10話	第9話	第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
104	97	83	70	60	50	40	32	24	17	10	1

第25話	第24話	第23話	第22話	第21話	第20話	第19話	第18話	第17話	第16話	第15話	第14話	第13話
235	227	217	209	201	188	179	167	152	143	134	124	115

第38話 第37話 第36話 第35話 第34話 第33話 第32話 第31話 第30話 第29話 第28話 第27話 第26話

351 344 331 323 314 307 299 291 281 273 265 256 247

第47話 第46話 第45話 第44話 第43話 第42話 第41話 第40話 第39話

429 417 410 402 393 385 375 369 359

第1話

「それは、どういうことですか？」

「言った通りだが？」

「——ですがそれでは……それでは、シンデレラ・プロジェクトは……」

「別に辞めろと言っているわけではない。これから『プロジェクト・クローネ』と共にプロデュースすればいい」

美城常務に呼び出され、部屋に來た武内に会社から命令が下された。内容は、プロジェクト・クローネのプロデューサーをすると言う内容だ。

「優秀な者達を君の下につけよう。君は、今まで通り彼女達をプロデュースすればいい。細かな雑務などは他に任せれば時間もできるだろう」

「今、プロジェクトは、新たな道を踏み出そうとしています。今は、彼女達にとって大事な——」

「——君の意見など聞いていない。これは、既に決まったことだ。君も組織の人間ならばそれに従いたまえ」

「——ッ——」

「……それに君の言葉を借りるのなら……クローネのアイドル達もシンデレラなのではないのかな？ 私は、君を評価している。是非、君の力でクローネのアイドル達を舞踏会に相応しい物に変えてもらいたい」

◇◇◇◇◇

足取りが重い。

『君に担当してもらおう者は後で会わせよう』

どう彼女達に言えば。

『その前に彼女達に話をするといい』

この扉の向こうに彼女達はいる。

「——あつ！ プロデューサーさん！」

シンデレラ・プロジェクトのアイドル達が待機室として使用している扉を開けると、武内が来た事に気づいた島村卯月が手を振って出迎える。

「——見て下さい！ 未央ちゃんと一緒に買って来たんです！」

「すごいでしょう！ 此処に来るまでにあったお店で買って来たんだよ！」

待機室の中央にあるテーブルには山盛りのお菓子が置かれている。それを、本田未央

が両手を大きく広げてアピールしている。

「詰め放題をやつてたんです！ 頑張つてたくさん詰めてきちゃいました！」

「しまむーは、頑張り過ぎて最初に貰った袋を破いたけどねー」

「未央ちゃん！ それは言わないでくださいよー」

お菓子の山は、どうやらこの二人によつてもたらされた物らしい。

「こんなに食べきれないよね。それにアイドルは、いろいろと気を付けないといけないし」

口では厳しい事を言つてはいるが、渋谷凜は二人を微笑ましく見ている。

「そんなことを言つちやう、しぶりんには、あげないよーだ」

「いいよ、卯月から貰うから」

「えっ？ 私ですか？」

「アメが欲しいかな？」

凜は、卯月の傍に近寄る。

「——ええと……どれがいいですかね？」

「卯月の好きなのでいいよ」

「——じゃあ、これですね！ 味はわかりませんが、包装が可愛いですから！」

卯月は選んだ物を凜に渡し、それを凜は包装を解いて口に運ぶ。

「……悪くないかな」

「しまむーの優しさにつけこむとは……ええい！ こうしてやる！」

未央は、凜をくすぐるために追いかける。それから凜は逃げるが楽しそうだ。

「——プロデューサー。プロデューサーはどっちがいいと思う？ やっぱり、こつちのロツクな方がいいよね？」

「——なに言ってるにや！ Pちゃんは、こつちの猫ちゃんを選ぶに決まってるにや！ この可愛さがわからないりーなちゃんはおかしいにや！」

多田李衣菜と前川みくが絵が描かれた物を見せて来る。紙に描かれた内容は、ライブで使う衣装だろうか？

「違うね！ プロデューサーならこつちを選ぶね！」

「そんなわけないにや！ こつちにや！」

二人は、武内の事を忘れ、にらみ合う。今にもケンカが始まりそうな空気を醸し出しているが普段と変わらなかつたりする。少ししたら落ち着いていつも通りになるだろう。

「Pくん！ Pくん！ これなんてどう？ ——セクシーでしょう？」

今度は、城ヶ崎莉嘉がこちらへと来る。何かの影響を受けたのか、グラビアなどで見るポーズをとっている。

「この前、お姉ちゃんがしてたポーズだよ？ どう？ 莉嘉の魅力にメロメロになった？」

まるで誘うように身体を揺らしているが、まだ子供である莉嘉がやると微笑ましい光景に思える。ちなみに彼女の姉は、城ヶ崎美嘉と言い同じ346プロダクションでアイドルをしている。

「莉嘉ちゃん、可愛いよねー」

「莉嘉ちゃんは、すっごくカワイイにー」

莉嘉の後から赤城みりあと諸星きらりの二人が来る。この三人は、ユニットを組んでからシンデレラ・プロジェクト内でもよく一緒に行動を共にしている。

「カワイイじゃないよ！ セクシーなの！」

莉嘉が二人に抗議するが報われることはないだろう。

「……今いる方だけでも聞いてもらえますか？」

まだ他にもシンデレラ・プロジェクトにはメンバーが居る。しかし、この後にプロジェクト・クローネのアイドルに会うことになっている。その前にどうしても話しておきたい。

「——もしかして、大事な話？」

凜が武内の言葉を聞いて、何かを感じたのか真剣な顔つきになる。それに伴い他のア

アイドル達も武内の方を見る。

「……実は、先ほど美城常務の方から話がありました。——内容は、プロジェクト・クローネのプロデューサーをするようにと言われました」

「——ちよつと、待つてよ!?! それってどういうこと?」

「……辞めちゃうんですか? プロデューサーさん……」

「ダメだよ! ……それだけは絶対に……」

反応は様々だが、一様に自分がプロデューサーを辞める事に反対してくれる。不謹慎かもしれないが、嬉しいと思う。

「……そうではありません。あくまでも兼任となります。こちらとプロジェクト・クローネのプロデューサーの両方をするようになります」

辞めないと知ったからかアイドル達の表情に安心の色が見える。

「……詳しく聞かせて」

凜が一步前に入る。

「美城常務から言われたのは、プロジェクト・クローネの一部をプロデューサーとして担当するように。その際に私に部下を付け、送迎などの雑務を他の方に担当してもらうと言う内容です。それ以上に關しては、今の所は聞かされていません」

「……内容にもよるけど、時間は減るけど今とあまり変わらない? ……どうなの?」

凜をはじめ、アイドル達はこちらの意見を聞きただけだ。

「プロデューズに関しては、これまで通り私が担当します。ですが、今までと違い皆さんと関わる時間は減ると思います。……これまで、関わりが上手く取れない事による問題もありました。正直なところを申し上げますと、不安があります。……また、皆さんの事をよく理解せずに動いてしまう事に……」

シンデレラ・プロジェクトの前にも似たようなプロジェクトを任された事がある。その時の経験からアイドルと距離を取るようになってしまった。そのせいで、彼女達を苦しませることに繋がってしまった。

「——どうにもならないの?」

「……これは、会社としての命令になります。もし逆らえば、シンデレラ・プロジェクトのプロデューサーですらいられなくなる可能性もあります」

「……そんなの……ずるいよ……」

未央の口から言葉が零れる。

「そんなのどうしようもないじゃん! プロデューサーに……辞めてほしくない……」

「私も嫌です! プロデューサーさんとの時間が少なくなるのは嫌ですけど……それで一緒に頑張っていきたいです」

他からも似たような言葉が出る。これだけ自分を思ってくれているのは嬉しい。し

かし、だからと言って何もできない。

「皆の意見はわかったでしょ？ 皆、プロデューサーには辞めてほしくない。……だったら、プロデューサーがやる事は一つでしょ？」

「……そうですね。私は、プロジェクト・クローネのプロデューサーをやります。——ですが、シンデレラ・プロジェクトのプロデューサーでもあります。……何かあれば、言つて下さい。私は、皆さんのプロデューサーなのですから」

そう、前と違い今は共に歩む事が出来る。自分を信じてくれるアイドル達と共に。

◇◇◇◇◇

「……どういうつもりかな？」

「不思議な事を聞かれるのですね」

今西部長は、美城常務の下を訪れていた。

「なぜ、彼を君の下へと招くのかな？」

「——決まっています。優秀な人材を適切な場所に配置するのが私の仕事です。彼は、私の前でその力を見せた。ならば、私はそれに答えるだけ。より、346に相応しいアイドルを育てる為に彼の力を使う……それだけの話です」

「……確かにそうかもしれないが——」

「彼が優秀な人材だと教えてくれたのは、誰なのかをお忘れなく。私とは違う形で、どうやって彼女達を磨き上げ、輝かせるか見せてもらおうとしましょう」

第2話

美城常務に言われ、プロジェクト・クローネのアイドルと346プロダクション内にあるカフェで会う事になっている。直接ではないが、シンデレラ・プロジェクトの渋谷凪から話を聞いているアイドル達だ。

「初めまして、武内と言います」

「私は、神谷奈緒です」

「アタシは、北条加蓮だよー」

簡単な自己紹介をしておく。二人は、凪と共にトライアドプリムスと呼ばれるユニットを組んでいる。こちらと同じで、凪から話を聞いているからかそこまで緊張はしていないように思える。

「なんだか大変な事になったね。さつき、凪とlineしてたらいろいろと言ってたよ？」

「こういうのって……どう言えばいいかわからないけど、大人って大変なんだな」

どうやら心配してくれているようだ。こうして話すのは初めてだが、凪が言っていたように良い子達のようなようだ。

「担当するアイドルやユニットを掛け持ちすること自体は珍しい事ではありません。……今回は、少し疑問の余地はありますが……」

「そうだよね。凜から聞いてるけど、常務といろいろあるみたいだもんね」

「でも、なんでなんだろうな？ ……言いくいけど、常務とあんまり仲が良いようには見えないんだけど？」

「それに関しては、今までの事を評価してのものだと聞いています。実際のところはわかりませんが、私がお二人の担当をさせて頂く事には変わりありません。これからは、よろしくお願いします」

「こつちこそよろしく……今更だけど、アタシ普通に話してるけど……まずかったりするっ。」

加蓮は、こちらの様子を見ている。どことなくこちらを試しているようにも思える。

「別にかまいません。渋谷さんからは、お二人は真面目な性格だと聞いています。場所や相手を見て、敬語などは問題なく行えると。ですので、私と居る時ぐらいは普段と変わらずに自然体で居てもらってかまいません」

「……ふーん、凜から聞いてたけど話が分かる人なんだね」

「どうやら加蓮は、こちらのことを試していたようだ。」

「私は、止めたんだけど……どうしてもって……」

「——だってさ、これから一緒にやるんだよ？　もし気が合わなかったら嫌じゃない」
「でも、相手を試すようなのは……」

奈緒の言葉に加蓮も言葉に力が無くなって来る。

「……アタシだって嫌だけど、急に担当が代わったんだよ？　疑うのは仕方ないじゃない」

「どうやら急な担当の変更で不安があつたようだ。話を友人から聞いているとはいえ初代面には変わりない。」

「北条さんの気持ちもわかります。急に担当が代われれば不安にもなると思います。……これからは、もし何かあれば言つて下さい。私は……あまりそう言つた事には気づきにくい所がありますので、言つて頂けると助かります」

二人は、考えるようにしてこちらの様子を見ている。

「……うん。そうする。アタシは、北条加蓮。改めてよろしくね、プロデューサー」

「……ごめん、試すようなことしちゃつて。私も改めてよろしくお願ひします」

「こちらこそよろしくお願ひします」

三人は、改めて挨拶を行う。

「それで、具体的には何か変わるの？」

「……そうですね」

美城常務の方から彼女達に関する資料を渡されている。内容は、個人のプロデュースとトライアドプリムスに関する物だ。

「基本的な方針は、常務の物をそのままで行います。私は、その補助を行う形になると思えます」

「補助？」

「それって、どんな感じになるんだ？」

「……内容を見た限りだと——」

美城常務の考えるアイドルは、過去に居たスターのような絶対的なアイドルだ。唯一つの輝き。歴史ある346に相応しいアイドルを創りだすことが目的と言える。ただ——それならばなぜ自分が呼ばれたのかわからない。

「——基本的には、私に任せるとなっています」

渡された資料には、美城常務の手掛けた物もある。しかし、それ以上の物はない。あくまでも自分にプロデュースをさせるのが目的だ。だから、渡された資料からわかるのはこれまでのものではない。これからに関しては、方針以外は白紙だ。

「……プロデューサーが決めるの？」

「……そうなりますね」

「……なんだろう。当たり前前の事なんだけど、なんだか違和感があるような気がするの

は、私だけか？」

奈緒の意見に二人も同意する。武内と美城常務は考え方が違う。それこそ真逆か別物と言ってもいい。

「常務とプロデューサーって、仲良くないよね？」

はつきりと言われるが、良いとは言えないだろう。

「私には、常務の考えまではわかりません。しかし、お二人のプロデュース。そして、トライアドプリムスのプロデュースを任せました。私にできる事は、皆さんの要望を聞きながらプロデュースをしていく事だけです」

「私達の要望？」

「いきなり言われても困るな」

「すぐに決める必要はありません。今はまだ、常務の方で決めた物があります。それを共にこなしていく上で決めて行けばいいと思います」

「なんだか難しそうな話だね。今までは、常務の方で全部決めてたからあんまり考えなかったけど、これからは自分で考えないとダメってことだよね？」

「難しいけど……悪くはないのか？」

二人は、今後の事について考えているのだろう。今までの事を含めて考えているようだが、上手く考えがまとまらないようだ。

「わからないことがあれば、その時は言つて下さい。お二人の考えを形にするお手伝いをするのが私の仕事ですから」

他に方法がない。美城常務が自分に何をさせたいのかがわからない以上は、できる事に目を向けて行かなければならない。

「——難しいことは今度にしよう！ お腹も空いたし、何か食べに行こうよ！」

「別に此処でよくないか？ ……わかった、どうせまたハンバーガーとかだろう？」

「いいじゃん、おいしいよ？」

「この前、食べたばかりだろう？」

「食べたいものは食べたいの！ ねえ、プロデューサーも食べたいよね？ ハンバー

ガー」

「——私は、別にどちらでもかまいませんが……その……私も一緒にですか？」

「当然でしょ？ 親睦会も兼ねてなんだから。プロデューサーの事も知りたいし、シンデレラ・プロジェクトの事も教えてほしいしね。後は、そっちでの凜の事も教えてほしいな」

「渋谷さんですか？」

「そうそう。だって、そっちってだいぶ好きにできるって聞いたよ？ ……凜がそっち

の話をしている時……すっごく楽しそうなんだよね」

「……確かにそうだな。私も聞かせてほしいな」

普段、凜とどのような話をしているのだろうか？　ただ、凜がシンデレラ・プロジェクトの事を良く思っていてくれていてくれるようで安心する。

「……そうですか。では、御一緒させて頂きます」

「やったね！　じゃあ、早く行こうよ！」

「なあ、凜はどうする？」

「今回はいいよ！　だって、凜が居たら聞けない事もあるかもしれないじゃん」

「——そうだな。たまには、私がいじる側に回るのもわるくないか」

「たぶん、奈緒には——無理な気が……」

「——なんだと！」

加蓮は、奈緒から逃げるように走り出す。そんな彼女を奈緒が追いかけている。これからは、凜を加えてこの三人とやって行く事になる。それが上手く行けば、他にも担当するアイドルが増えるかもしれない。

第3話

「——プロデューサー！」

オフィスの扉が勢いよく開き、渋谷凖が部屋へと入って来る。

「——どうかしましたか？」

凖の勢いを受けて、思わず席から立ち上がる。ちなみにオフィスは、シンデレラ・プロジェクトのアイドル達の待機場所の隣にある。プロジェクト・クローネのプロデューサーになった際に元の場所へと戻る事になった。

「——どうかしたじゃ——ッ——」

理由はわからないが、凖に睨まれる。急いでいたからか頬が紅潮している。

「申し訳ありません。何があつたのか話して頂けませんか？ 正直な所、心当たりがありません」

また何かしてしまったのか？ 最近の出来事を思い出す。

「プロデューサー」

「はい」

「……加蓮と奈緒と……話をしたよね？」

「……はい。それがどうかしましたか?」

聞き返すが、凜から言葉が返ってこない。代わりに凜の顔が赤く染まる。
(北条さんと神谷さんと話した事……)

初めて彼女達と話したのは昨日の事だ。加蓮の提案で、ハンバーガーショップで食事をした。話した内容は、シンデレラ・プロジェクトの事や凜に関する事。

「……なにか、渋谷さんに対して失礼な事を言ってしまったか?」

自分の記憶にはない。しかし、人によつては違う事もある。

「そ、それは……」

なぜか凜の反応が悪い。先ほどの勢いも今は見る影もない。

「話して頂けませんか?」

聞いておかなければいけない。今後、彼女達と関わっていくために。

「……やっぱり、なんでもない」

凜は、そう言うとその場から立ち去ろうとする。

「——待つてください!」

思わず凜を追いかけ、その手を掴む。

「私は、もう後悔したくはありません! ですから、教えてください! なにが渋谷さんを此処に來させたのか?」

「——ちよ、ちよつと……」

「——すみません！」

掴んでいた手を離す。

「……今思えば、大した事じゃないから……別に……」

「渋谷さん……」

「……そんな目で見ないでよ……本当に大したことじゃないから……」

凧がしおらしくなる。

「……ねえ、プロデューサー。昨日の話の内容は憶えてる？」

「正確かどうかまではわかりませんが、シンデレラ・プロジェクトと渋谷さんのお話をさせて頂きました。そこで、渋谷さんに対して何か失礼な事を言ってしまったか？」

「……違う……言つてない……」

凧の口から小さな言葉が零れる。

「加蓮と奈緒に……いじられた……その、いろいろと」

「いじられた？」

「プロデューサーが……褒めてたって……感謝してるって……それで……」

静かに凧の言葉を待つが、それ以上は出てこない。

「……一っただけ聞かせて下さい。渋谷さんにとって、これから私と共にやる上で問題に

なる事ですか？」

なにがあつたかはわからない。この様子だと、おそろくだが話してはくれないだろう。

「……問題にはならないよ……嬉しかったし。でも——もうダメ！ これ以上は、無理ッ！」

凜は、勢いよく部屋から飛び出していく。

「……何かしてしまったのでしようか？」

一人残され、自分が話した事を思い出す。

◇◇◇◇◇

「——おっ！ おかえり、しぶりん」

「……ただいま」

隣にある待機場所に戻つて来た凜は、空いている未央の隣に座る。

「急にどうしたの？ なんだか、すごい勢いだつたけど？」

「……なんでもない」

凜は、未央から顔を背ける。その顔は、赤い。

「——凜ちゃん！ 私が相談に乗りますよ！」

様子を見ていた卯月が凜の所に来る。

「これでもお姉さんですから頼ってください！」

「……そういえば、そうだったね」

「そういえばって、なんなんですか！」

「いやーしまむーは、可愛いから年上だってこと忘れちゃうからね」

「だよね」

一応、凜や未央よりも卯月の方が年上だ。

「もう、二人ともー！」

「怒っても可愛いよ、しまむーは。それで、どうしたの？」

「……別に大したことじゃないよ」

「でも、プロデューサーに関係する事だよね？」

「そうですね。『プロデューサー』って言ってましたから」

先ほど、この部屋でスマホをいじっていた凜が、いきなりプロデューサーの名前を叫んで出て行った。

「……もしかして、この前の話？」

未央の言葉に卯月だけではなく、他のメンバー達の視線も集まる。

「……凜ちゃん、話してくれませんか？」

内容によっては、これからの事にも繋がる。

「……だから、本当に大した——」

部屋にいるアイドル達からの視線を感じる。

「しぶりん。私もそうだけど、みんな気にしてるんだよ？ これからどうなるのかなって。だから話してくれない？」

未央の声はとても優しい。

「凜ちゃん」

反対側からは、卯月が。

「——からかわれたの……」

「……からかわれた？」

「プロデューサーが私を褒めてたってからかわれただけ！ ……だから、この前のは関係ない……」

声と共に凜の姿が小さくなる。ついでに顔は真っ赤だ。

「なんだそんなこと？ しぶりんがプロデューサーに褒められて照れただけ？」

「——わ、悪い！ ……恥ずかしかつたんだから」

主に加蓮からだ、昨日の武内との会話の内容で凜をからかっていた。

「いやー恥ずかしいのはわかるけど、あんなに勢いよくプロデューサーの所に行かなくても……」

「でも、安心しました。何かあると思いましたが」

卯月だけではない。他のメンバーもホッとしている。

「——それで、しぶりん。どんな内容だったの？」

「——えっ？」

「——私、気になります！」

凜は、未央と卯月に詰め寄られる。

「どんな感じに褒められたの？」

「教えてください、凜ちゃん」

それから、他のメンバーも加わり一部始終を話すことになった。その後、プロデューサーの誤解も解けたが、しばらくの間、凜と武内が顔を合わせる事はなかった。

第4話

「——君の目から見てどう思う?」

「……そうですね」

美城常務と共にトライアドプリムスのレッスンを見ている。経験を多く積んでいる凛を中央とし、左右を加蓮、奈緒で配置している。レッスンとは言え、三人のパフォーマンスは人の目を、心を惹きつけるものだ。完璧なまでに考えられ作られた空間に相応しい者達だと言える。

「統一性のある歌声、それにパフォーマンスも合うものがあると思います。調和があるといえますか、互いの色でより深い色を表しています」

「……なるほど」

美城常務は、特に武内の言葉に顔色を変ええる事もない。

「ちなみに聞くが——何を足せばより深く染まり、輝くと思う?」

「技術的なものであるならば、彼女達の経歴を考えれば足りなくて当然とも言えます。しかし、彼女達ならすぐにそれを埋め、高き道を進めると思えます。ただ、それ以外だと——」

正直な話、彼女達のレベルは高い所にある。渋谷凜に関しては、元々高いポテンシャルを持っていたことは知っている。なにせ、彼女がアイドルとして歩き出そうとした時から知っているのだから。今の彼女は、シンデレラ・プロジェクトとプロジェクト・クローネの二つの光を受け、より輝きを増している。

加蓮に関しては、動きに大ききはないものの丁寧な動作の一つ一つがある。指先まで意識された動きは、優雅さを持ちつつも、時には鋭さを併せ持つほどに澄んでいる。おそらくだが、ダンスの中にある一つの才能なのかもしれない。

奈緒は、他の二人に比べるとレベルは低いかもされない。しかし、彼女の見せる姿は他の二人とは違う魅力がある。美しさの中に愛らしさのある彼女の動き、表情は、ある意味ではこの中でも目立つ物だろう。この三人のユニットとして最大限の価値を彼女は担っている。

「彼女達の魅力は、必ずしも完成された場所にあるとは限らないのではないのでしょうか？」

「——それは、どういう意味だ？」

「僅かな時間ですが、彼女達と共に過ごして感じました。その理由は、すぐにわかるのではないのでしょうか？」

「——なに？」

何か言いたげな目で見られるが、口で説明するよりも実際に見た方がいいだろう。

◇◇◇◇◇

レッスンが終わり、彼女達は休憩に入る。

「——どうぞで」

「——ありがとう」

武内は、最も疲労があると思われる加蓮から先に飲み物と汗を拭くためのタオルを渡していく。

「ごめんね、凜」

加蓮は、勝ち誇ったように武内からそれらを受けとる。

「……別に謝る必要なんて……」

「そう？　じゃあ、お言葉に甘えちやおうかなー。今じゃ、アタシの『プロデューサー』でもあるしね」

加蓮は、「ありがとう、プロデューサー」とわざわざもう一度お礼を言う。

「……お前は、子供か？　——ありがとう、プロデューサー」

加蓮の次には、奈緒に持って行く。奈緒も加蓮ほどではないが最後の方にふらつきが

みられた。

「……ねえ、なんで私が最後なの？」

最後に凜の所に来たが、見るからに機嫌が悪そうだ。

「北条さんは、この中でも体力が一番少ないです。身体の負担を考えると一番初めにケアが必要と考えました。神谷さんは、最後の方にふらつきがありましたので。渋谷さんは、最後まで安定して綺麗な動きをしていました」

「——そう……綺麗な……」

凜は、受け取ったタオルで顔を覆い隠すように拭く。

「——照れてるね」

「——ああ、照れてるな」

加蓮と奈緒が獲物を見つけた肉食動物のように凜に近づく。

「可愛いなー凜はー！」

「普段のクールな感じがまったくくないな！」

「——ッ——プロデューサーのバカッ！」

凜は、加蓮と奈緒にちよつかいを出されながらも楽しそうだ。今の彼女達は、先ほどまでとは違い、年相応の少女の顔をしている。自然な本当の笑顔がそこにある。

「——でも、あれだな。私が、ふらついたのとかわかるんだな」

「そうだね。私は、気づかなかったな」

「……そう言えばそうだね？ アタシもわからなかった」

「皆さんは、集中されていましたからね。それに終盤の方でしたから」

「……そうか？ ほんの一瞬だった気がするけど？」

「プロデューサーは、そう言ったところはわかるんだよ。それ以外は、ダメだけど」

褒められたが、最後の方には痛い棘がある。

「やつぱり、プロなんだね。今までも人は付いてたけど、そういう所は言われなかったもんね」

「今までの方は、スタッフの方でしたからね」

「そうなのか？」

「プロデューサーの数にも限りがありますので、そう簡単には異動ができませんよ」

「——そうだ。だから、彼を付けた」

それまで様子を見ていた美城常務がこちらまで歩いて来る。

「今までは、私が担当をしていた。しかし、より高みに行くために彼を迎え入れた。スツッフだけでは限界があるからな」

言葉だけなら嬉しい。実力が認められているとも取れるからだ。しかし、これまでの事を考えると素直には受け取れない。

「——期待に応えてほしいものだな」

視線が向けられる。その視線は、今までも何度も見てきた物だ。

「——応えて見せます。しかし、それは彼女達の事を考えた上でやらせて頂きます」

「……今は、君が彼女達の担当だ。君の好きなようにしたまえ。但し、結果を出してもらわなければ困る。それだけは、忘れるな」

それだけを言い残し、部屋から出て行く。

「……本当に仲が悪いね」

「……だな。間近で見ると、怖いもんだな」

「あれでも、まだマシだと思うけど」

凜の言葉に二人は驚くが、想像も出来なくはないので納得もしている。

「——ねえ、プロデューサー」

「なんででしょうか？」

「プロデューサーの目から見て、誰が一番上手に見えた？」

加蓮の言葉に少し考える。

「なあ、そういうのやめとこう。……どうせ、凜が一番だし」

止めはするが、内容自体には興味がありそうだ。

「——そう？　確かに全体的なものなら凜には勝てないと思うけど、アタシはダンスな

ら自信あるよ? 体力はないけど、その分動きには注意してるから」

加蓮の言葉には力がある。冗談や遊びで言っているわけではない。

「確かに北条さんの動きは素晴らしいものでした。指先まで意識して伸びており、動きに優雅さと一つ一つの動きの終わりがありません。よほど、練習されたんですね」

「——ああ、うん……ありがとう」

褒められたからか、言葉がタトタドしいものになる。

「……なあ、私も聞いてみて……いいか?」

奈緒も自分の評価が気になるのだろう。

「神谷さんは、二人とは違うものを持っています」

「——違うもの?」

「神谷さんの動きや表情には、可愛らしさがあります。それが動きの中で時々姿を現しては、人の目を惹きつけます」

「——可愛い!? 私が!?」

「今の奈緒も可愛いよ?」

「うん、可愛い」

「——えっ!?! そ、そんなこと……ないってば……」

次の得物が決まったようだ。特に凜は、先ほどの仕返しとばかりに奈緒に近づいてい

る。

「ああ、もう可愛いなー！」

「奈緒は、可愛い！ すっごく可愛いー！」

「や、やめろってー！」

哀れな獲物は、いつものように餌食となる。この三人は、確かにステージの上での姿も良いと思う。しかし、こうして年相応の少女としている彼女達もまた魅力的である。

第5話

「プロデューサー！ 見て見て！ 莉嘉ちゃんと一緒に描いたんだよー！」

「どう、Pくん？ 今度の凸レーションのLIVEの衣装はこれで決まりでしょ☆」

「……検討させて頂きます」

赤城みりあと城ヶ崎莉嘉の二人から描きたての絵を貰う。

「ごめんねー、Pちゃんもお仕事でいそがしいのにい」

「かまいませんよ。私も皆さんと過ごさせて楽しいですから」

「ほんとにいい？ きらり達は、迷惑じゃない？」

諸星きらりは、見た目のキャラと違い真面目でとても良い子だ。気を使っているのだろう。今回も同じ凸レーションのメンバーである二人の保護者役として来ている。

「今日は、誰も来ませんから。それに、普段の皆さんの様子を知る事もプロデュースをする上で必要な事です。時間があまり取れない以上、このような状況でも私にとっては必要です。むしろ、皆さんには御迷惑をお掛けしています」

「そんなことないにいー。こうしてきらりん達の事を考えてくれるPちゃんには、かんしゃかんしゃしてるんだよお？」

「私もプロデューサーと一緒に楽しいよ！」

「うんうん。でも、ちゃんとアタシにも合わせてもくれないとー浮気しちゃうからね☆
気を付けなきゃダメだよ、Pくん」

こんな感じで、彼女達アイドルがオフィスに顔を出すようになったのは、つい昨日の
事だ。

◇◇◇◇◇

「——こんなところでしょうか？」

新しく担当となった北条加蓮と神谷奈緒の資料に目を通し、今後の企画書を考えてい
る。美城常務に提出することになるので今まで以上に気を使って製作している。

「——プロデューサーさん……今、大丈夫ですか？」

扉を叩く音が聞こえ、島村卯月が申し訳なきそうに部屋へと入って来る。

「どうかされましたか？」

「——あつ、いえ……その……」

卯月は、なにか様子を窺うようにこちらへと近づいて来る。何か聞きたいことでもあ
るのだろう。

「遠慮などせずにお話してください」

「……本当にいいですか？」

「かまいませんよ」

意を決したのか、一度呼吸をしてから口を開く。

「——凜ちゃんの様子を教えてください！……す、すみません、大きな声を出してしまつて」

勢い余つて自分でも想像していなかった大声が出たからか、卯月は慌てている。

「——落ち着いて下さい。慌てなくても大丈夫ですから」

「……はい。島村卯月……落ち着きます……ふうー」

とりあえず落ち着いた？ 落ち着いたのだろうか？

「それで、どうなされましたか？ 渋谷さんの様子を知りたいとの事ですが？」

「じ、実はですね。今日もレッスンがあつたんです。……凜ちゃんが、とつても輝いて見えて……なんだか遠くに行くような気がして」

卯月の表情が暗いものとなる。普段が明るい彼女だからよけいにそう見える。

「……なるほど。島村さんの不安はわかります。今、渋谷さんは、ニュージエネレーションとトライアドプリムスの両方でレッスンを受けています。そのため、島村さんが知らないうちに成長しているのだと思います」

単純に考えても、凜のレッスンは卯月の倍だ。それも、トライアドプリムスの方は、美城常務が力を入れていている事もありトレーナーの質も良い。見えない所で同じユニツトのメンバーが成長していれば不安にもなるだろう。

「それは、わかってます。前よりも大変そうで、最近是一緒に居る時間も減っていますから。……でも、なんだか今のままだと置いて行かれそうで……」

最も近くににいるからだろう。不安が強いのは。

「——わかりました。少しレッスン内容を見直してみましよう。それに、個別で島村さんがレッスンを行えるように動いてみます」

「——本当ですか!？」

驚きから、満面の笑みが変わる。彼女は、こちらの方が似合う。

「皆さんの要望を叶えるのがプロデューサーの仕事ですから。それよりも言いに来てくれてありがとうございます。島村さんが言ってくれなければわかりませんでした」

また気づけなかった。今回は、卯月の方から来てくれたが、やはりまだ距離があるのかもしれない。

「——感謝なんてしないでください……感謝したいのは、私の方なんですから。でも、プロデューサーさんに言えてよかったです!」

「今度も何かあったら言って下さい。私は、いつでも皆さんの事を待っていますから」

「……本当ですか？」

「はい。此処に人が居なければ、いつでも来てくださってかまいませんよ。私としては、少しでも皆さんと関わりが持てますので、その方がいいですから」

「お邪魔じゃ……ないですか？」

「邪魔なわけがありません。いつでもいらしてください」

そんな感じの会話が昨日あった。それが形を変えて、『人が居なかつたら遊びに来てもいい』に変わった。特に問題はないのだが、この部屋も賑やかになった。

◇◇◇◇◇

凸レーシヨンの三人が隣の待機場所に戻り、今度はニュージエネレーシヨンの本田未央と島村卯月が交代する形で来た。大勢で来ない所を見ると、こちらに気を使って誰が来るかを決めているのだろう。ちなみに渋谷凛は、用事があるために今日は来ない。

「——どうやったたら、しぶりんに勝てるのか？」

「別に勝つ必要はない気が……」

「甘い！ 甘いよ、しまむー！ 相手は、あのしぶりんだよ？ 勝つ気でいかないと！」

先ほどから彼女達は、打倒渋谷凛で話をしている。もちろん暴力的なものではなく、

アイドルとしてだ。どうやら、未央の方も危機感を感じていたようだ。

「それで、しまむーは何かある？」

「プロデューサーさんが、レッスンを増やしてくれたくらいで……他には……」

ちなみに話を聞いた未央の分も追加でレッスンを取る事になった。

「レッスンは、プロに頼むとして……他にはなにかないのかな？」

「……私には、なにも浮かびません。——そうだ！ プロデューサーさんに聞きましよう！」

「ナイスアイディア、しまむー！ プロデューサー先生！ 何かお知恵を下さい」

「お、お願いします」

演技っぽい未央と、それに合わせるように卯月も頭を下げる。

（困りましたね）

妙案など浮かばない。そんな簡単にどうにかできるのなら苦労はしないだろう。何とも言えず、代わりに困った時の癖である首をさする仕草が出る。

「——失礼します」

「いいのか、入って……」

部屋を叩く音が聞こえると、北条加蓮と神谷奈緒が部屋に入ってきて来る。

「大丈夫だって。卯月ちゃん、未央ちゃん」

加蓮は、奈緒を放っておいて中にいた知り合いに声を掛ける。

「やや、これはトライアドプリムスのお二人で」

「こんにちは、加蓮ちゃん、奈緒ちゃん」

4人は、凜を通して既に友好関係を築いている。

「今、大丈夫か？」

「別に問題ないよ。——ひらめいた！ この二人にも協力してもらおうよ！」

「協力？ 何か面白い事？」

未央の話を聞いて、加蓮が興味を抱く。

「二人に聞きたいんだけど、しぶりんはどう？」

「凜がどうかしたの？」

「いやーお恥ずかしながら、しぶりんに嫉妬してまして。それで、打倒渋谷凜を掲げて

レッスンをなんか考えているわけですよ」

「打倒とか……なんだか物騒な話だな」

「凜ちゃんが凄いから、私達も頑張ろうと考えてます！」

「……なるほどね。いいじゃん！ アタシも協力するよ！」

「おいおい、いいのか加蓮」

「奈緒だって、凜が私達よりも凄いのは知ってるよね？ 勝ちたいとは思わないの？」

加蓮の言葉は、この前と同じで力がある。今の言葉は、彼女の本音だろう。強い意志を感じる。

「……それは、思うけど……」

「だったら、一緒に考える。丁度、その話をしに来たところだしね」

「丁度、ですか？」

「アタシ達も凛に嫉妬してるの。あんな凄いのを身近で見せられてるんだもん、仕方ないよ」

「見ててカッコいいと思う……」

「そんな訳だから、協力させてね」

「——これは、強力な援軍を得ましたな。しまむー、風は私達に吹いてるよ！」

「そ、そうなんですか？ ……よくわかりませんが、島村卯月頑張ります！」

「よし、その意気だ！」

新たにトライアドプリムスの加蓮と奈緒を加えて打倒凛が話し合われる。だが、最終的に何も浮かばずに凛を中心とした話題で終わりを告げる。

しかし、身近に居る彼女達が嫉妬するほどとなると凛に対する評価を変えた方がいいかもしれない。もしかすると、自分が考えている以上に彼女は実力があるのかもしれない。

第6話

「ねえ……プロデューサー」

渋谷凖は、後部座席から武内の事を呼ぶ。ただ、視線は外の方を向いており、声も眩く程度のものだ。

「……どうかしましたか？」

「……なんでもない」

この会話は、これで何度目だろう。名前を呼ばれては、こんな感じのやり取りをしている。

そもそも今日は、いつもと違い特別だ。外回りの営業をしている時に凖から連絡があった。内容は、学校に迎えに来てほしいと言うものだった。凖の学校から346プロダクションまではそう遠くはない。そのため、仕事か何かしらの事情がない場合は一人で来ている。

「……プロデューサー」

「……なんでしようか？」

「……私って、嫌われてたりするのかな？」

想像もしていなかった言葉に動揺してしまう。バックミラー越しに凜の様子を見て見るが、相も変わらずに外を見ている。

「……そんな事はないと思います。どうかされましたか？」

凜は、こちらに視線だけ送る。特に悪い事をしているわけではないが、心臓が跳ねた気がした。

「……最近、未央と卯月の様子に変なの。……それだけじゃない。加蓮と奈緒も」

凜の視線は、こちらを見ている。もし顔までこちらを向いたら、動揺を隠せる気がしない。

「……何か知ってる？」

思わず唾を飲み込む。

「……いえ、特には」

「——本当に？」

とても女子高生が出す威圧感じゃない。凄まじい目力だ。

「……そう」

凜は、再び外へと視線を向ける。

「最近ね。あの4人、私に内緒で会ってるんだよね。……確かに今は時間がないよ？」

でも、なんだか寂しい。あの4人の事だから嫌な事じゃないのはわかってるけど……不

安にはなるよ」

彼女もまだ子供。仲の良い友人との距離に悩んでいるのだろう。そして、その話をするために今日は、こうして迎えを頼んだのだろう。

「……渋谷さんが心配されるような事ではありませんよ。……私から言うのもどうかとは思いますが、彼女達はレッスンをしているだけですから」

「——レッスン？」

「渋谷さんは、ニュージエネレーションとトライアドプリムスの両方でレッスンを受けています。単純に考えても倍近くの量を受けています。……彼女達は、不安なんだと思います。仲間である渋谷さんが、遠くに行ってしまう事が」

本当なら隠しておきたい。しかし、凜もまた担当のアイドルだ。

「……そっか。なんだか、悩んでたのがバカらしいね。あの4人が、そんな事をするわけがないのに」

凜の表情が和らぐ。

「……でも、なんで教えてくれないのかな？ 一緒にじゃダメなの？」

「それは、彼女達がアイドルだからだと思います」

「……アイドルだから？」

「はい。最も身近で渋谷さんを見ているのは、彼女達です。どうしても意識してしまう

のだと思います」

「……嫉妬とかかな？ そっか、そう思われているのか……」

再び、表情が曇る。

「確かに嫉妬はあります。しかし、皆さんは渋谷さんの事を大切に思っていますよ？

最近では、私のオフィスに集まる事もありますが、渋谷さんのお話をよくしています」

「……私の話？」

「はい。どちらも渋谷さんとの事を楽しくお話されています。何処に行ったのか？ 何

をして遊んだのか？ 彼女達の表情は、本当に良い笑顔をしています」

「……そっか……ふーん」

凜は、こちらに見えないように顔を背ける。僅かに見える顔には、赤い色が見える。

「——ねえ、プロデューサー」

「なんででしょうか？」

「私には、味方はいないの？」

「味方ですか？」

「だって、あつちは4人じゃん。それに比べて、こっちは1人だし。不公平だとは思わな

い？」

凜の言い分はわかる。しかし——

「確かにそうですが——」

こればかりは仕方がない。

「……プロデューサー……プロデューサーが私の味方になってよ？」

「私が、ですか？」

「うん。プロデューサーなら互角じゃないかな？」

理屈はわからないが、凜としてはありなのだろう。少しだけとはいえ、機嫌が良さそうだ。

「……私は、立場的には皆さんの味方です。……誰か一人の味方には……」

「ふーん。じゃあ、プロデューサーは、私を一人にするの？」

痛い所を突かれる。

「……少しだけでしたら……」

「——そっか。ふーん、悪くないかな」

それからは、短いはずの時間が長く感じる。346プロダクションに着くまで、凜と今後について話をした。しかし、スケジュールがビッシリと詰まっている凜に余裕などはなく、ほとんどがお喋りの時間になった。

凜には言えないが、実は彼女達の味方を既にやっている。主に北条加蓮と本田未央に頼まれたからだが、島村卯月と神谷奈緒の願いもあり負けた。

「——本田さんは、もう少し周りを意識してみてください！ダンスは、あくまでも他の方と共に踊るものです！」

「——はいっ！」

「——島村さんは、足元ではなく前を見て下さい！ 気になるのはわかりませんが、貴方が見なければいけないものは足元にはありません！」

「——頑張ります！」

「——北条さんは、もう少し動きを大きくするように意識してみてください！ ステージは、とても広い事を忘れてはいけません！」

「——はいっ！」

「——神谷さんは……頑張ってください！」

「——なんで、私だけそれなんだよ！」

レッスンに関しては、本職であるトレーナーのようにはできない。的確な指摘などは彼らに勝てるものではない。しかし、客観的に見る事ならできる。トレーナーと話し合い、それぞれの苦手な所、必要な所は聞いてある。あとは、そこを注意して見ればいい。

場所は、空いているレッスン場。トレーナーによるレッスンが終わり、空いていた場所を使わせてもらっている。トレーナーの数に限りがあるため常に指導を受ける事はできない。自分は、その代わりだ。

「——それでは、休憩にしましょう」

武内の言葉で彼女達は、休むように座り込む。今、彼女達が行っているのは、互いの曲のダンスを覚える事だ。彼女達が目指す目標である渋谷凧に対抗するため、同じ条件を選んだのだ。

「——疲れたー」

「——だねー」

未央と加蓮は、だらしなく横になる。レッスンが終わり、その後もこうしてやっているのだ。疲れるに決まっている。

「……でも、凧ちゃんはいつもこうなんですよね」

「……だな。そりゃ、すごいわけだ」

改めて、凧の凄さを自覚する。彼女は、既にこれと同様の事をやっている。

「——ねえ、プロデューサー。少しは、凧に近づけたのかな？」

「——私も気になります！」

この中でも凧に対して特に何かしらを感じている二人から聞かれる。

「まだ、遠くだと思います。北条さんは、動きを大きくしようとして動きにブレが見られます。持ち味である繊細で優雅な動きを途中から保てなくなっています。島村さんは、足元に対して苦手意識があります。ステップに関しては、練習で自信を付けていく必要があると思います」

二人は、武内が言った言葉を自分の中でかみ砕く。少しでも糧に出来るように。

「プロデューサー！ 未央ちゃんは、どうなのかな？」

「本田さんは、単純なところだけで見れば、渋谷さんと変わらないと思います。ダンスに關しては、それほど差はないでしょう。ただ、渋谷さんは全体を見る事が出来ます。ユニットである以上、他との調和が必要となります」

「……そっか。どうしても自分だけになるんだよねー」

それぞれ自覚のある部分だろう。彼女達は、自分の苦手としている部分に目を向けて前に踏み出そうとしている。

「……なあ、プロデューサー。……私は？」

「神谷さんですか？」

「ダンスの時もなんだか、私だけ扱いが酷くないか？」

奈緒の表情が落ち込んでいるように見える。彼女は、感情が表に出やすい。

「……神谷さんは、目立つ欠点がないんです。トレーナーさんとも話しましたが、私では

難しいとの事です」

「……それっていいのか？　なんだか不安なだけど？」

「神谷さんは、着実に成長しています。これだけの運動をしても動きが最後まで保てていますから。前にあったような事がないのが証拠です」

奈緒は、レッスンの最後の方でふらつく事があった。それが今では見られなくなっている。

「……確かにそうだな。——もしかして、凜に一番近いのは私なのか？」

先ほどの落ち込みが嘘のように華やかになる。

「……そうかもしれないですね」

「——やった！　どうだ、加蓮！」

嬉しいからか同じトライアドプリムスの加蓮に自慢気に言つてのける。

「……プロデューサー……次をお願い」

どうやら加蓮のやる気に火がついたようだ。

「——だったら未央ちゃんも、もうちよつと頑張ろうかなー」

「——私も頑張ります！」

未央と卯月も再び立ち上がる。

「——まだやるのか!?　——ちくしょう！　だったら、私だって！」

既に限界が近いのだろう。意地で、奈緒も準備に入る。

「——では、始めます。但し、危険と判断した場合は止めますので」
アイドル達の返事を受け、改めて曲を流す。

彼女達は、アイドルとして何度でも立ち上がる。

目標を目指し、超える為に。

第7話

今日は、この前と同様に美城常務と共にトライアドプリムスのレッスンを見ている。前回よりも向上した彼女達のパフォーマンスは、共に道を歩んだ者としては感慨深いものである。

「よし！ 今日、ここまでにする！」

ベテラントレーナーの終わりを告げる声で、今日の分のレッスンは終わる。

「疲れたー」

北条加蓮は、力を出し切ったからか終わると同時に座り込む。

「今日は、一段と……大変だったな……」

神谷奈緒も同じように床に座り込む。加蓮ほどではないが肩を揺らし、身体が酸素を求めて動いている。

「そうだね」

二人と比べて、凜はあまり疲れてはいない。先に足を踏み出した者とそうでない者の差が明確に表れる光景だ。

「……そのわりには余裕に見えるけど？」

「……だな。よく平気でいられるな」

凜は肩を揺らしてはいる。呼吸も激しいものだ。しかし、二人と違い今も立っている。

「……それは、そうだよ。二人よりも先に頑張ったんだから」

本当に努力を惜しまなかった者が言える言葉。凜には、それを言う資格がある。それは、凜が歩んだ道を進むと決め、歩き出した二人ならよくわかる。

ちなみに凜は、既に彼女達がしている事を知っており、その上で協力を自分から申し出た。「大変かもしれないけど……一人よりはいいから」そんな彼女の言葉を受けた彼女達が、その後凜をどうしたかは言う必要はないだろう。

「——お疲れ様です」

武内は、美城常務と共に三人の下へと足を進める。いつものように飲み物とタオルを配り終わると、邪魔にならないように端へと寄る。

「お疲れ様、と言っておこう。すでに気づいていると思うが、本日行われたレッスンは特別に用意したものだ——」

美城常務は、そこで言葉を止め、一度武内の方を見てから口を開く。

「——どうかな？ 彼の教えは？」

美城常務には全て報告してある。トライアドプリムスの二人がニュージエネレー

シヨンの本田未央と島村卯月と共にレッスンをしていると。ただ、報告はしたが反対などはされなかった。「君の担当に口を出す気はない。好きにするといい」と言われただけだ。

「……アタシは、良かったと思う。ううん、違うね。ありがとうつて言いたい。ここまで凜に近づけたんだもん」

「……私は、感謝はしてる。でも、他と比べると扱いが気になるな。今度からは……もう少しちゃんと見てほしい……そうじゃないと……ズルいだろう？」

こうして自分に対する評価をアイドルの口から聞けるのは素直に嬉しいと思える。共に歩んで来られて、良かったと思える瞬間だろう。

「——私も、お二人と共に道を歩く事が出来て嬉しいと思います」

「——そう？ ……なんだか嬉しいね」

「……でも、なんだか恥ずかしいな」

加蓮、奈緒と同様に武内も照れる。

「……私はず？」

凜と目が合う。

「——渋谷さんは、今までもこれからも変わりません。同じ道を進んでいます」

「……ふーん」

何とも言えない視線が向けられる。居た堪れない気持ちになる。

「……君の評判は、まずまずと言ったところだな。内容を見せてもらったが、悪くないで
きだ。むしろ、短期間でこれだけの物に仕上げられれば上等とも言える」

褒められている？ 勘違いでなければさうだろう。

「——だが、まだ足りない。これからよろしく頼むぞ？」

「——承知しました。彼女達の事は、私が責任を持ってプロデュースしていきます」

武内は、頭を下げる。

「……期待している。これから報告は細かく上げるように」

美城常務は、それだけを言い残し部屋から出て行く。



「うーん、このケーキ美味しい！ さすが、かな子ちゃんだねー！」

「本当に美味しいよなー」

加蓮と奈緒は、シンデレラ・プロジェクトのメンバーである三村かな子が作ったケーキを食べている。かな子が差し入れしてくれた物だ。

「かな子は、いつも持って来てくれるよ」

凜もかな子のケーキを食べている。ただ、二人よりはリアクションが薄い。普段から食べ慣れているからだろう。

「いいなーアタシもこつちの子になろうかな？　美味しい物も食べられるし、のんびりできるし、居心地も悪くないもんね」

加蓮は、ソファアで寛ぐ。来客用のソファアのはずではあるが、最近アイドル達の物になっている。

「確かにそうかもしれないけど、クローネも悪くないぞ？」

「そんなの知ってるよー、普段はあつちなんだからさ。でも、此処は別でしょ？　どっちもあるもん」

武内のオフィスは、シンデレラ・プロジェクトの場所でもあり、プロジェクト・クローネの場所でもある。

「……それもそうか」

奈緒もすつかり慣れたからか、特に気にもせずにケーキを口に運ぶ。

「……随分と寛ぐようになったね、二人とも」

「そうかもねー、なんだかずつと居たみたいな感じだよねー」

「だなー、なんなんだろうなー」

「……ああ、あれじゃない？　ほら、何かあってもプロデューサーがいるし」

「……かもしれないな。すぐに頼れるもんない」

レッスンの疲労を考えても、二人のだらけっぷりは酷い。

「……プロデューサーも何か言つてよ」

凜は、デスクで仕事をしている武内に協力を求める。

「……今日は、お二人共疲れたのだと思います。ゆっくりと休まれた方がいいと思いません」

「――さすが、アタシのプロデューサーだね」

「――プロデューサーから許しも出たし、のんびりしよう」

「――プロデューサー！ あんまり甘やかしちゃダメだよ！ これでもアイドルなんだよ！ 少しは、気を付けないと！」

「……そうですね」

凜の剣幕に圧され、同意せざる負えない。

「――えー負けないでよ、プロデューサー。アタシの為にも凜に勝つて」

「凜が頑張り屋なのはわかってるけど、今日だけは休もう。正直、へとへとなんだよ」

実際に今日のレッスンで、二人は限界近くまで体力を使ったはずだ。

「……渋谷さん。今日は、二人を休ませてあげては？」

「……そんなんだから、二人が図に乗るんだよ？ プロデューサーは、なんだか二人には

甘いよー！」

彼女達の味方をしていたのが知られてからあたりが厳しい。

「——凜？　なんだか、小姑みたいだよ？」

「——かーれーんー」

疲れて動けない加蓮に凜が襲い掛かる。加蓮から助けの声が出るが、別に本気でやっているわけではないので放って置こう。どうせ、いつも通り奈緒もこの後巻き込まれるのだから。

今、目の前で起きている光景も別に初めてではない。まだ短い時間だけしか同じ空間で過ごしていないが、彼女達にとっては日常の一コマだ。こうして、同じ時間を共にしてわかった。

(二人も随分と慣れましたね)

プロジェクト・クローネのプロデューサーとなり、トライアドプリムスの担当になったからの短い付き合いだが馴染んでもらえると嬉しいものだ。

「——お疲れー」

「——お疲れ様ですー！」

レッススが終わったと連絡を受けていたからか、本田未央と島村卯月の二人は、遠慮もなく扉を開けて入って来る。

「二人の分も、かな子ちゃんが用意してくれたよー」

二人の来訪で凧の動きが止まったからか、先ほどまで動けなかったはずの加蓮が二人を出迎える準備を始める。

「——加蓮……もういいや。私も手伝う」

凧も加蓮と共に準備を行う。

「いやー話は聞いたよ？ 頑張ったね！」

「今日のは、大変だったんですよね？」

「そうなんだよ。おかげでこのありさまだよ」

二人の問いに未だにだらしがない感じで奈緒は答える。

「でも、たぶん次からはこんな感じになるんじゃないかな？ ねえ、プロデューサー？」

「……そうですね。今日の結果を踏まえた上で改めてレッスン内容を検討します。内容は、今日ほどではないにしろ質、量ともに増えると思います」

「……マジか？ ふへへもう、無理だつてー」

奈緒は、更にソファーへと身体を預ける。

「ねえ、プロデューサー。今日のレッスン内容とか教えてもらえない？ 私達も気にな

るんだ」

「お願いします！ プロデューサーさん！」

「……変更はありましたが、こちらに計画書があります」

二人にレッスンの計画書を見せる。その中には、本で行われたレッスンの予定内容が含まれており、簡略ではあるがレッスン内容が書かれている。

「……なるほど。全然、わからない！」

「はい！ 全然わかりません！」

基本的に専門用語と走り書きのようなもので、わからなくても当然だろう。

「基礎の向上と動作確認の為に使われるプログラムを下に今回のレッスンは考えられています。今後の為のデータ収集と現状の確認が目的でしたから」

「……わかりやすくお願いします」

「お願いします」

自分も専門ではないので少し難しい。簡単に流れで今回行われたことを説明した。できる限り、動きを説明しながら。

「——プロデューサーさん。その内容は、私達はできないんですか？」

「——そうだね。やってみたい」

二人も加蓮と奈緒と共にレッスンをしていた。自分がどれだけ成長したか知りたいのだろう。

「準備はしてあります。ただ、渋谷さんも共に行うことになりますので、少し間が空くと

「思います」

「ありがとうございます！ プロデューサーさん！」

「話が早くて助かるよー！」

「二人とも、準備できたよ」

「おっ！ じゃあ、かな子ちゃん特製ケーキで英気を養うとしましょうか！」

「元気を付けなきゃですね！」

トライアドプリムスの3人にニュージェネレーションの2人が加わる。いや、ニュージェネレーションの3人にトライアドプリムスの2人が加わったとも見える光景だ。

(この5人でやるのも面白そうですね)

企画が通るかはわからない。ただ、今ならすぐにでも書き上げられるだろう。目の前で、楽しそうに過ごしている彼女達的笑顔を見ながらなら。

第8話

——息が苦しい

「どうした！ 動きが悪いぞ！」

——めまいもする

「——おい、聞いているのか？」

——どうして私は……

「——大丈夫か？ おい、さぎ——」

◇◇◇◇◇

私は、つまらない人間だ。

会話が上手くできない私は、いつも一人で居た。

だから、祖父はそんな私に一冊の本を渡してくれた。

その本の中では、少女が魔法使いの魔法によって灰の世界から這い出て、素敵な王子様と結ばれる夢物語が描かれていた。

私は、その少女に自分を重ねるのが好きだった。

いつか自分も魔法で、今の灰のような世界から抜け出し、素敵な王子様と結ばれるような夢の世界の住人になれたらと。

◇◇◇◇◇

「——大丈夫か？　鷺沢！」

また、いつもと同じように名前を呼ばれる。

「……はい……大丈夫です……」

変わりたかった。

「……そうか。今度からは、早めに言ってくれ。最近のお前は、私の目からもわからない程に最後まで立っているからな」

魔法使いが現れない私は、自分で変わる事を選んだ。

「……すみません」

でも、上手くはいかない。

「今日はもう休め。端に寄っている」

トレーナーの肩を借り、レッスン場の端の方まで移動する。

「——さて、続きをやるぞ！」

私は、またこうして一人でこの景色を見る。灰色の景色を。

◇◇◇◇◇

「——最近、二人とも調子が良いわね」

「まーね！ アタシには、プロデューサーがいるからね！」

「別に加蓮だけのプロデューサーじゃないだろう？」

「別にアタシは、『自分のだけ』なんて言っていないけど？」

「奈緒。もしかして貴女……」

「——ちっ、違うぞ!? 特に何とも思っていないからな！ 本当に！ ただ……頼りになるとは……思うけど……」

神谷奈緒は、いつも通り速水奏と北条加蓮の二人にからかわれている。これもプロジェクト・クローネの日常の一コマだ。

「——でも、興味はあるわ。確か、秋フェスで一緒だった人よね？ 背が高くて、真面目な感じの？」

「そうだよー。プロデューサーは、背が高くて真面目だよ。でも、話はわかるよ」

「そうだな。口うるさくないし、必要な事は教えてくれるもんな」

「……プロジェクト・クローネのプロデューサーになったとは聞いていたけど、今はトライアドプリムスだけなのよね？ 私も少しだけでもいいから見てもらいたいわ。二人を見てみると、腕は良さそうなもの」

「それは間違いないと思うけど、結構大変だよ？ レッスンとかは、普通に厳しいから」

「……加蓮は、まだいいだろう？ 私なんて、アドバイスも少ないんだからな」

「そうなの？」

「奈緒は、良くも悪くもなんにもないからねー」

「——なんだとー！ かーれーんー！ その言葉は許さないからなー」

「——きゃあー！ 奈緒に襲われるー！」

レッススが終わったばかりなのにもかかわらず、二人は追いかけてつこを始める。少し前までは、見られなかった光景だ。最近、レッスンも段階を上げてハードなものへと変わってきている。それでも二人には余裕があるように見える。

「——大丈夫、文香？」

奏は、部屋の隅で休んでいた鷺沢文香に声を掛ける。

「……」心配をお掛けします」

「気にしなくていいわ。同じユニットの仲間でしょう？」

奏は、文香の隣へと座る。

「……ねえ、文香？ ……最近、無理をしていない？ ……もしかして、秋フェスでの事を気にしているの？」

少し前の話。プロジェクト・クローネは、秋に行われたアイドルフェスティバルに参加した。その時に文香は、体調を崩してしまった。

「……あの時は、すみませんでした」

「……気にしないで、って言うのには無理があるわね。あの時は、無事に済んだけど……不安なのね？」

当時の文香は、橘ありすとユニットを組んでいた。あのままなら彼女に迷惑を掛けていただろう。まだ、幼い少女に。それに関わっている多くの人達にも。

「……はい。また、同じような事がある気がして」

そう思うと、怖くなる。震える身体を抑えるように抱き寄せる。

「……ねえ、文香。私から提案があるのだけど、聞いてみる気はない？」

「……提案ですか？」

「今日も一緒にレッスンしたからわかるでしょう？ 加蓮も奈緒も短い期間で成果を出しているわ。文香、一度相談をしてみたらどうかしら？ 彼は、プロジェクト・クローネのプロデューサーなのだから」

「……でも、確か今は、トライアドプリムスだけのはずでは？」

「確かにそうね。でも、大丈夫だと思うわ。私は、あの時に彼に会っているの。彼なら、困っている女の子を見捨てるようなことはしないはずよ？　それは、文香もわかるでしょう？」

後から聞いた話。私が、体調を崩している時にシンデレラ・プロジェクトのプロデューサーが動いてくれたと後から聞いた。今、そのプロデューサーがクローネに居る。

「……そうですね」

今は、他に選択肢もない。それに、まだあの時のお礼も言えていない。

「詳しい事は、加蓮達から聞いておくから今は休んでね。無理はしないで」

◇◇◇◇◇

プロジェクト・クローネのメンバーであり、シンデレラ・プロジェクトのメンバーでもある渋谷凜の協力もあり、話す機会がもたらされた。武内と話すのならその方がいいと、加蓮に言われたからだ。

「――ご相談ですか？」

「……はい」

こうして話すのは初めてだ。緊張する。

「……あの……その前に一つだけいいですか？」

「なんででしょうか？」

「……前に行われた秋のフェスティバルで、助けて頂いたと聞いています。まだ、そのお礼を言えていなかったのですね」

文香は姿勢を正し、頭を下げる。

「あの時は、助けて頂きありがとうございます」

「——いえ、同じステージを創る仲間でしたからお気になさらずに。鷺沢さんのステージを見せて頂きました。とても綺麗な歌声をお持ちなのですね」

いきなり褒められたからか、恥ずかしくて顔が熱くなる。

「——ありがとうございます」

どこかに隠れたい。今すぐにも逃げ出してしまいたい。でも、この機会から逃げ出してしまえば、もう変わる事はできない気がする。

「簡単な物ですが、プロジェクト・クロウネの資料を頂きましたので、中身を拝見させて頂きました。その中の鷺沢さんのボーカルに対する評価は、とても高いものでした」

「……ありがとうございます」

知っている。こんな私が、プロジェクト・クローネに参加する事になったきっかけだから。でも、それ以外は――

「……悩みと言うのは、それ以外の部分ですか？」

「――えっ……」

心を見透かされるように私の不安を言葉にされた。

「渋谷さんの方から鷺沢さんの相談に乗ってほしいと言われました。内容までは教えては頂けませんでしたが、真面目な鷺沢さんならと思いい少し調べてみました。……最近、レッスンの方で無理をされているとトレーナーの方から聞きました。――まだ気になりますか？」

この人は、わかっているのだろう。なら、素直に心の内を言おう。

「……はい。今も不安です。トレーナーさんは、以前よりも良くなったとは言ってくれます。でも、周りと比べると……。私は、昔から誰かが何かをしているのを見ていただけの人間でした。私にはできない事をやっている人達をただ見るだけの。……そんな自分を変えたくてこの道を選びました。――でも、今も変わらずに見えているだけなんです」

遠くから見るだけの灰色の景色。それが私の知る世界だ。

「……なるほど」

武内は、文香の話の聞き考え込む。

「体力面などに関して、食事やレッスンは、食事も辛くないと思います。……鷺沢さん。今もまだ、変わりたいと思いませんか？ たとえ、その道が辛く厳しいものであったとしても」
「……もしその先に、本当に変わる自分が居るのでしたら……頑張りたいです。いいえ、頑張ります」

「……わかりました。少しだけ時間を頂けませんか？ こちらで考えをまとめますので」

「……ありますか？ 私が変われる道が？ こんな私にも？」

不安がある。これまでも頑張ってきた。それでもダメだった。だから言葉が欲しい。

「——あります」

目の前に居る人は、はつきりとそう言う。私が欲しい言葉を。

「前を向いて歩こうとする意志があるのでしたら道は必ずあります。鷺沢さん、共にその道を行きましましょう。私が、貴女をその道の先まで連れて行きます」

「——本当ですか？ あなたに……プロデューサーと一緒になら行けるのでしょうか？」

「はい。これから共に頑張らしましょう」

今は、この人の言葉を信じてみようと思う。私の事を見ても、欲しい言葉をくれるこ

の人に。

第9話

「——なるほど。君の考えはわかった」

美城常務は、武内が提出した企画書を読み終える。

「——いいだろう。鷺沢の件は、君の好きなようにするといい」

「——ありがとうございます」

本心を言うなら、断られると思った。なぜなら、鷺沢文香は自分の担当ではないからだ。

「……一つだけ、聞きたい。君は、彼女が本当に輝けると思っっているのか？ 君は、前に私に言った。雲に隠れたとしても星はそこにあり、輝いていると。しかし、彼女は違う。今まさに消えようとしている。星は、太陽のような恒星による光だ。一度消えかければ、再び輝きを増すことはない。仮にあるとすれば、消える一瞬だけだろう。命の灯が消えるように最も輝くのは」

「確かに、アイドルとしての光は消えかけているのかもしれませんが。今の彼女の行動が、消えゆくときの光なのかもしれません。しかし、本物の星と違い、アイドルと言う名の星は、己の意思で再び輝く事ができません。彼女は、決して諦めてはいないと私には見え

ます。それは、消えゆく者が見せる光ではないと」

「——輝かせられるのか？ 彼女を？」

「——はい。私は、鷺沢さんを必ず輝かせて見せます」

「……彼女は、私が346に相応しいと思ひ選んだ人材だ。しかし、今や見る影もない。……見せてもらおう。君の魔法とやらを」

◇◇◇◇◇

鷺沢文香を変えるために何が必要かを考えた。

「鷺沢さん。貴女に必要なのは、精神的な強さと自信だと思ひます。体力的なものとは私の方でも見ますが基本的には、トレーナーさんの方でやって頂いている方法で問題はないと思ひます」

「……精神的な強さと自信……ですか」

確かに、今の私にはないものかもしれない。

「そこで、共にレッスンをしていく人を用意しました。——シンデレラ・プロジェクトの新田美波さんです」

「——はい。よろしくお願ひしますね、鷺沢さん」

「よろしくお願いします」

文香を輝かせるには、自分一人では不可能に近い。精神的な強さとは、そう簡単にどうこう出来るものではない。精神的な強さもある意味では才能であり、今までの積み重ねによるものだ。文香は、お世辞にも精神的な強さの才能はないだろう。彼女の事を考えるのならば、積み重ねた物もそう多くはない。だからこそ、同じ境遇を乗り越えた者の力が必要だ。

「これからしばらくの間、新田さんと共にボーカルレッスンをして頂きます。最終的にお二人で、ステージに立つて頂こうと思います」

「……ステージですか？」

ステージに立つ。その言葉を聞くと、あの時の事を思い出してしまう。

「……大丈夫、鷺沢さん？」

美波が、そつと文香の背中に触れる。

「……大丈夫です。ご心配をお掛けしました」

「……そんなに畏まらないで。これから一緒にステージを目指す仲間なんだから」

「……仲間ですか？」

「ええ、私と鷺沢さんは仲間です。一緒に頑張りましょう！」

美波は、まっすぐに文香の目を見ている。その目には、自信が溢れているように見え

る。

(羨ましい……)

彼女のような目が欲しい。自信に満ち、まっすぐに相手を見られる目が。

「……私も頑張りたいと思います」

この人と一緒に居れば、私も同じような目を持つことができるようになるのだろうか？

「——レッスン内容に関しては、特別なものではありません。曲に関しては、『ラブライカ』の『Memories』を使用します」

ラブライカとは、新田美波とアナスタシアのユニット名である。二人は、シンデレラ・プロジェクトでユニットを組み、Memoriesをデビュー曲として披露した。ちなみにアナスタシアは、プロジェクト・クローネにも参加している。

「……確か、アナスタシアさんの？」

「そうです。私とアーニヤちゃんの曲です！」

そう言葉にする美波の表情は、とても嬉しそうだ。アナスタシアと組むラブライカを大切に思っているのだろう。

「——では、先ずは簡単にお互いの歌声を聴くことにします。これに関しては、それぞれの持ち歌を使います。先ずは、新田さんからお願ひします」

「はいー」

場所はレッスン場。特別な機材などはなく、ノートパソコンにスピーカーを繋げただけの物だ。

「—それでは、始めます」

武内が曲を流し始める。

すると、美波は呼吸を整え、歌声を響かせる。

(これは……)

思わず見惚れてしまう。場所は、殺風景なレッスン場。衣装もレッスン用のジャージ。音楽も簡単な物ですませている。でも、見惚れてしまう。

(綺麗……)

美波は、歌声で着飾る。ノビノビと歌う彼女は、自分の思う世界を歌声で形にしている。彼女は、Memoriesと言う曲にどれだけの感情を籠めているのだろう。どれだけこの曲と向き合い描いたのだろう。彼女が歌う度に、その想いと共に、華やかな景色が見える。

「—ありがとうございます」

「—ふうー。どうでした、プロデューサーさん？」

「よく練習されているのがわかります。最近、あまり見られなくなりましたが、安心

できます」

「そう言って頂けると頑張ったかがありました。でも、ちゃんと見て下さいね？」

「わかっていきます。それでは——どうかされましたか？」

「——えっ……」

「鷺沢さん」

武内がポケットから手布を取り出し、文香へと差し出す。

「これをお使い下さい」

言われて気づいた。

「………涙？」

いつの間にか、涙を流していた。

「………今日は、やめておきますか？」

優しい声で言われる。

「………いえ、大丈夫です」

なんで泣いてしまったのだろう。

「………そうですか。では、これをお使い下さい」

「………ありがとうございます」

文香は、武内から手布を受け取ると涙を拭く。

「……洗ってからお返しした方が？」

「いえ、かまいません。それよりも、始めるとしましょう」

「——はい」

文香は、武内に手布を渡すと立ち上がり、自分の番を待つ。

「——では、始めます」

曲は、同じプロジェクト・クローネのメンバーである橘ありすとユニットを組んでい
る時の曲だ。何度も練習した曲。

「——ア——ツ——」

(……なんで?)

何度も練習した曲なのに声が上手く出ない。それだけじゃない。身体が震える。

「——鷺沢さん！」

動揺で倒れそうになる身体を抱きとめられる。

「……今日は、やめておきましょう」

初めて行われたレッスンは、これで終わる。

◇◇◇◇◇

美波は、他にもやる事があるので先に帰らせることにした。レッスン場には、武内と文香だけが残る。

「……なぜ、声が出なかつたのでしょうか……なんで……」

隣で座り込む文香は、小さく呟く。

「……可能性であるならば一つだけあります」

今の文香のような子を見るのは初めてではない。むしろ、珍しい事ではない。特に文香のように感受性の強い子なら。

「おそらく、自信を無くしてしまつたのだと思います。新田さんの歌声を聴いて。新田さんは、シンデレラ・プロジェクトの中でも特にボーカルのレベルが高い方です。彼女の歌声には、力があります。そして……彼女は、多くの冒険を経験して成長しました」

「……冒険ですか？」

「……鷺沢さんには、新田さんはどう見えましたか？」

「……とても……輝いていて、羨ましいと思いました。私も……ああ、なれたらと」

彼女は、自分とは違う。自信に満ちて、堂々と想いを籠めて歌を歌っていた。

「……新田さんも、鷺沢さんと同じような経験をしています。彼女も、初めてのステージの時に体調を崩しています」

「——えっ……」

私と同じ？ あの人が？

「彼女は、シンデレラ・プロジェクトのリーダーとして頑張っていました。それで、無理をさせ過ぎたのでしょう。私の不注意で、本番当日に体調を崩してしまいました。彼女は、責任感の強い方です。その時の彼女の気持ちは、とても辛く、酷いものだったでしょう」

「……それを乗り越えたのですか？」

「……はい。ですが、その道のりは決して楽なものではありませんでした。そんな彼女を支えてくれたのは、共に道を歩んでいた仲間達です。同じプロジェクトの仲間達が彼女を支え、救ってくれました。……鷺沢さんにも心あたりはありませんか？」

「……あります」

落ち込んでいる時の私をクローネの人達は励ましてくれた。今も、こうして私の為に動いてくれた。

「失敗をしない者はいません。迷惑を掛けない人もいません。鷺沢さん。——私もそうですが、鷺沢さんを迷惑に思っている人はいません。クローネの皆さんは、鷺沢さんの事を大切に思っていると思います。それは、鷺沢さんが一番わかっているのではありませんか？」

「……でも……迷惑を掛けてしまうかもしれません」

「そんな時もあるでしょう。でも、それはお互いにあるものです。他の方に何かあればその時は、鷺沢さんが力を貸してあげて下さい。貴女は、一人ではない。私も、プロジェクト・クローネの皆が傍に付いています。それでも、まだ不安はありますか？」

言っている言葉はわかる。でも、怖い。

「……私は、一人でした。本当に、そんな私にも傍に居てくれる人はいますか？　どんなことがあつたとしても……」

「……私は、鷺沢文香のプロデューサーです。前に言ったと思いますが、貴方が前を向いて進む限り傍に居て支えます。この言葉には、嘘はありません」

彼と目が合う。この人は、私を見て言葉を言つてくれる。等身大の鷺沢文香を知った上で。

「……傍に居てくれますか？」

「——はい」

「……他の人達も居てくれるでしょうか？　こんな私と」

「——居てくれます。彼女達がそんな人ではない事はわかっているはずですよ」

プロジェクト・クローネの人達の顔が浮かぶ。私を心配してくれる人達の優しい顔が。こんな私でも受け入れてくれる人達と一緒に居たい。そう思うと、不思議と不安が納まる気がする。今ならできるだろうか？

「……まだ時間はありますか？」

「……ええ、時間はあります」

「お願いします。もう一度、私を歩かせてください」

「——もちろんです」

文香は、立ち上がる。

そんな彼女を仲間達が支えてくれる。

不安はまだある。

でも、皆と共に居たい。

もう、遠くから見ているのは嫌だ。

「……お願いします」

文香は、前を向いて歌を歌う。

まだ弱々しいものかもしれないが、それでも精一杯に。

想いを籠めて。

◇◇◇◇◇

「今日は、すみませんでした」

「——いえ、私にできる事があるのならなんでも協力します。プロデューサーさんの頼みならなんでも」

用事が済んだ美波とオフィスで話をしている。

「それで、鷺沢さんは？」

「まだ不安はあるみたいですが。そう簡単には、消える事はないでしょう。ただ、前向きとはできたかもしれません」

「……そうですか。安心しました」

美波は、ホッと一息つく。彼女も心配だったのだろう。

「これからは、新田さんの協力も必要になります。今後ともよろしくお願いします」

「私で力になれるなら喜んで。それに、プロデューサーさんが見てくれるんですよ？」

「はい。今度のステージまでですが、私の方で担当させて頂きます」

「ふふっ、久しぶりにプロデューサーさんに教えてもらえるんですね、楽しみです」

「申し訳ありません。時間を作れなくて」

「……そうですね。でも、今はこうして話せる時間があります。相談に乗ってもらえるのは助かります」

彼女に言われると重い言葉だ。一時期は、彼女にシンデレラ・プロジェクトの事を任せていた。

「新田さんには、御迷惑をお掛けします。シンデレラ・プロジェクトのリーダーをして頂いていますから。本当に助かっています」

「……そう言ってもらえると嬉しいです。でも——少しだけわがままを言ってもいいですか？」

「なんででしょうか？ 私にできる事なら」

「今回の件の間だけでいいので、他に用事が無かったら帰りだけでいいので送っては頂けませんか？」

「……そんなことでよければ。レッスンで時間も遅くなると思いますから」

「……そうですね。今はそれでいいです。頼りにしていますからね、プロデューサーさん」

どこか不満気な言葉に疑問が浮かぶが、それが何かまではわからない。

「はい。新田さんの期待に応えられるように」

ただ、今は美波と言う強力な味方を得る事が出来る。今は、一人ではなく共に何かをできる者が傍に居る。それだけで、どんな事でも乗り越えられる気持ちになる。

第10話

この前の事を踏まえて、少しやり方を変えることにした。これは、新田美波からの提案なのだが先ずは信頼関係を築きたいとの事だ。確かに有効的な方法ではある。しかし、簡単な方法ではない。上辺だけの関係なら問題はないだろう。だが、今回必要なのはそれではなく深い物になる。本来であるならもう少し様子を見てからの方がいいが、美波の言葉を信じようと思う。彼女は、シンデレラ・プロジェクトをまとめるリーダーに相応しいだけの人格者だ。

「——これなんて、私のオススメなんですよ」

「……なるほど。こういうのもあるのですね」

レッスン自体は、基礎力を上げるものを行っている。これなら精神面はあまり関係ないからだ。今は、同じ時間を過ごししながら距離を縮めていきたい。

「プロデューサーさんは、何を持ってきましたか？」

「私ですか——」

美波に言われ、持ってきた本を二人の前に出す。ちなみに今やっているのは、お互いの読んでいる本を持ち寄り、互いに相手を理解するというものだ。本が好きな鷺沢文香

には、合うものだと思う。ここ最近では、レッスンは終わると休憩を兼ねて、オフィスで読書会を行っている。

「——主に仕事関係の物ばかりですね。仕事の役に立ちそうな物か？ 資料になりそうな物ぐらいでしょうか？」

「……ほとんどがビジネス物ですね。でも、女性雑誌などもあるんですね」

「やっぱり、流行などを調べているんですか？」

「そうですね。仕事柄、女性の流行は知っておかなければいけません。……あとは、こういうのでしょうか——」

本当なら出したくはない。だが、文香と向き合う以上は仕方がない。恥ずかしいが覚悟を決める。

「……女性との関わり方。若い娘との接し方に対する注意点」

「……プロデューサーさん……私は、いつでも相談に乗りますからね。何でも言つて下さい——」

美波が優しい言葉をくれる。嬉しいよりも恥ずかしい。

「……いろいろとありましたから」

この程度の恥なら甘んじて受ける覚悟はある。大事なのは、彼女達なのだからな。

「……読んでみてもいいですか？」

文香は、あまり感情を表には出さない。しかし、こうして関わるようになったからか彼女は人一倍好奇心の強い人間だとわかった。自分や美波が持ってきた本に対して興味を持つている。

「かまいません。私もいいですか？」

「どうぞ。……気に入ってもらえるといいのですが」

文香が持つて来る本は、古い本が多い。これは、彼女の祖父が古本屋を経営している影響なんだそうだ。小さい頃に祖父から渡された本に興味を持ち、それからは飽きることなく読み耽っている。

「私は、この前のお話の続きが聞きたいです。文香さんは、とても本に詳しくて面白いですから」

「……私は、別に……」

文香は、手に持つ本で顔を隠す。美波に褒められて恥ずかしいのだろう。感情を上手く出せないだけでないわけではない。

「私も聞きたいですね。鷲沢さんの話は、私も好きですから」

文香の本に対する知識と感想は、仕事として成立するだけのものがあると思う。聞いていて考えてみるが、今後の仕事へと繋がるだろう。

「……恥ずかしいですけど……頑張ってみます」

文香なりに前を向こうとしている。人前で、本を通してとは言え自分の想いを口にするのだ。これも立派なレッスンと言えるだろう。

◇◇◇◇◇

(おかしい……)

ここ最近、文香に会っていない。

橘ありすは、プロジェクト・クローネの待機場所で思案を巡らせている。最近、なかなか顔を出せなかった。そのため、ユニットを組んでいる文香と会う機会がなかった。でも、こうして顔を出しても会う事がない。いや、最近は仕事を一緒にする事もない。(何かの事件に巻き込まれた?)

文香は、しっかりしていない。本を読んでいると周囲に対して無防備になる。プロジェクト・クローネの問題児である塩見周子と宮本フレデリカの二人に巻き込まれ、自分に対して何かしらをするように。もちろん、文香は一切関わりがないので、悪いのは二人だけだ。

「どっか、したのー?」

その問題児の一人である塩見周子がソファーに寝転がりながら聞いて来る。

「なんでもありません。少し、考え事をしていただけです」

「もうつれないな。シユーコも拗ねちゃうよー?」

「勝手に拗ねててください」

「まともに相手をするとう相手の思うつぼだ。認めたくないが、今の自分では彼女達には勝てない。」

「おーいつ! ……ありすちゃんが冷たい」

「——橘です! 下の名前で呼ばないでください」

「思わず反応してしまった。ありすと云う名前に嫌な記憶があるからか、下の名前で呼ばれると咄嗟に言葉を返してしまう。周子のニヤニヤ顔に腹が立つ。」

「やめなさい、周子。あまり、からかうものではないわ」

「部屋に居るもう一人のクローネのメンバーである速水奏が周子を叱る。」

「おこられたーん。ごめんね、ありすちゃん」

「橘です……もういいです……」

「関わると負ける。」

「でも、確かに何か考えていた顔をしていたわね? 橘さん、悩みでもあるの?」

「奏は、優しくありすに訊ねる。ありすとしては、奏は好意的な相手だ。」

「最近、文香さんと会っていない気がして」

「……そういえば、そうね。最近、二人が一緒に居るところを見ていないわね」

「文香さんの事ですからサボリなどではないと思います。だから、心配で……」

文香は、メールやlineなどはあまりやらない。仕事などの連絡で使うぐらいだ。だから、連絡もなかなか取れないし、どう話せばいいかわからない。相手は、年上の女性なのだ。子供である自分では、どのような話をすればいいかわからない。

「文香なら今日も来ているわよ」

「——そうなんですか?!」でも、此処には来ていませんよ?」

プロジェクト・クローネの一員である以上、此処で待機する決まりになっている。

「……そういえば知らないのね。文香は、今は此処を利用してないわ。文香は、シンデレラ・プロジェクトのプロデューサーの所に居るから」

「シンデレラ・プロジェクトのプロデューサー?」

「あれー、ありすちゃん知らないんだっけ? シンデレラ・プロジェクトのプロデューサーが、プロジェクト・クローネのプロデューサーもやってるんだよ。あたしは、会ったことないけどね」

「そんなことになっていたんですか……」

「詳しくは、本人から聞いてみたらどうかしら? レッスンが終わった後は、読書会をプ

ロデューサーのオフィスでしているはずよ?」

「読書会ですか？」

文香らしいと思えるものだ。ただ、なんで読書会なんてしているのだろうか？

「行くなら案内するけど？」

「……大丈夫です。私には、これがありますから！」

ありすは、肌身離さず持っているタブレットを自慢気に見せる。これさえあれば、大抵の問題は解決する。

「そう。じゃあ、気を付けてね」

「さらわれないようにね」

◇◇◇◇◇

勢いで来てしまった事を後悔している。よくよく考えたらシンデレラ・プロジェクトのプロデューサーと面識がない。そんな人の所をこれから訪ねるのだ。

（どうしよう……）

話した事はないが、見かけた事なら何度でもある。秋のフェスティバルや仕事先で背の大きな男性がアイドル達と話をしていた。

（怖い……）

自分よりも遥かに背が高い大人の男性。子供のありすにとつては、恐怖の対象と言ってもいい。

「——あれ？ 橘さん？」

急に声を掛けられ振り向く。そこには、プロジェクト・クローネのメンバーでもある渋谷凜の姿がある。彼女は、シンデレラ・プロジェクトのメンバーでもあるので此処に居てもおかしくはない。

「——凜さん」

思わずホツとする。知っている顔に会えた。

「どうしたのこんな所で？」

「——あつ、その……此処に文香さんが居ると聞いて」

「文香に？ だったら丁度いいね、私も用があるから」

「用ですか？」

「借りてた本を返しに来たんだ。最近じゃ、うちのところはちよつとした読書ブームなんだよ」

「そうなんですか？」

「文香って、いろいろと知ってるから皆で面白そうな本を聞いてみたんだ。そしたら面白くてね。じゃあ、一緒に行こうか？」

凜は、扉を叩くと中へと入る。ありすを連れて。

◇◇◇◇◇

部屋の中は、オフィスとは思えない空間だった。テーブルの上には、お菓子や飲み物が置かれており、本も幾つか置かれている。それぞれが好きな本を読みながら、それらをたしなみながら過ごせるように。まるで、何処かの喫茶店のようだ。

「文香、お客さんだよ」

鷺沢文香は、新田美波と本を見ながら話をしていた。

「……お客さんですか？　ありすちゃん？」

文香は、ありすの下の名前を言える。秋フェスの時にありすの許可が下りた唯一の例外だ。

「こんにちは」

ペこりとお辞儀をする。文香だけならともかく、他にも人が居る。

「プロジェクト・クローネの子ですよね？」

「はい。私とユニットを組んでくれている橘ありすさんです」

「よろしくお願ひします」

「こちらこそよろしくね、橘さん。私は、新田美波です」

文香とは別の意味で大人の雰囲気がある。

「橘さんもゆつくりしていきなよ。何か飲む?」

凜は、持ってきた本をテーブルに置くと、ありすのために飲み物を準備する。

「……プロデューサーは、居ないんですね?」

この部屋には、文香と美波だけしかない。

「プロデューサーさんは、用事があつて留守にしているけど、プロデューサーさんに用事?」

「——いいえ、違います。……その……最近、文香さんに会っていませんでしたので」

「もしかして、私に会いに来てくれたんですか?」

「……はい」

「ありすちゃん」

文香の表情が和らぐ。普段とは違い彼女の感情がそこにはある。

(橘さんって、文香には懐いてるよね)

そんな光景を凜は見ている。プロジェクト・クローネの中で、ありすが心を許しているのは、文香だけだ。自分や奏などにも好意はあるが、文香ほどではない。実際、下の名前では呼べていない。

「——はい、これ。じゃあ、私は戻るから」

ありすの飲み物を用意した凛は、適当に本を選んで部屋から出て行く。

「ありすちゃん。此処のお菓子は、シンデレラ・プロジェクトの方が作ってくれた物らしいですよ」

「……これをですか？」

目の前には、クッキーをはじめ、様々な種類のお菓子がある。中には、小さいながらもケーキもある。

「かな子ちゃんに教えてもらいながら皆で作ったの。もしよかったら食べてみて」

「……いただきます」

美波に言われ、お菓子の一つを手取る。

カップケーキに生クリームとイチゴでトッピングをしている物を選ぶ。

「……美味しいです。本当に手作りなんですか？」

「かな子さんは、本当にお上手ですよ。お菓子作りの本もたくさん持っておられますし」

「私も一緒に作ったことはあるけど、かな子ちゃんほどはできなかつたかな。どう、橘さん？ 気に入ってもらえた？」

「——はい。もう一つ頂いてもいいですか？」

「ありすちゃんは、イチゴが好きなんです」

「そうなんですか？ だったら、今度はイチゴを使ったお菓子を皆で作ってみようかな？」

「イチゴのお菓子ですか？」

「楽しみにしててね」

「——はい！ ……いいえ、その……楽しみにしています」

思わず大きく返事をしてしまった。大好きなイチゴのお菓子と聞いて期待で声が大きくなった。でも、仕方がない。だって、美味しいから。

それからは、お菓子を食べながら文香と美波の話に耳を傾けた。二人は、本を読みながらその内容について話し合っている。ここがいい、こういう考えもある。そんな感じの会話ではあるが、二人の姿はとて大人に見えた。

（これが大人の女性……）

ありすの年頃にもなれば、大人に憧れもする。文香は、そんなありすの大人の理想像の一つでもある。知的で綺麗で、でもどこか放って置けないそんな文香に好意を持っている。

（新田さんは……）

それに比べて、美波は別の魅力がある。なんとというか色気？がある。仕草の一つ一つ

が小さな胸を跳ねさせるほどに妖艶だ。

（奏さんと似ているのかな？）

プロジェクト・クローネの速水奏も似たような魅力を持っている。奏もありすにとつては、魅力のある人間だ。ついでに言えば、凜もそうだ。

（私も、此処で本を読めば大人になれるのかな？）

テーブルに置かれている本を手取る。本は、ジャンルがバラバラで、どの需要にも応えられそうだ。

「——ただいま戻りました」

急にした男の声に持っていた本を落としそうになる。

「おつかれさまです、プロデューサーさん」

「……おつかれさまです、プロデューサーさん」

文香と美波に習い自分も頭を下げる。

「……橘さんですか？」

目が合う。

「——はっ、はい。橘です……」

座っている事もあり、見上げるようにして目が合う。

「ありすちゃん、私に会いに来てくれたようです」

「そうですか。ゆっくりして行って下さいね」

それだけ言うと、武内はデスクへと向かう。

(やっぱり、大きいですね)

遠くからでも背が高かった。近くで見たらもっと大きく見えた。

(どんな人なんでしょう?)

様子を見て見る。デスクに座ると、すぐに作業を始める。その動作には無駄がなく、仕事ができる大人みたいだ。表情も真剣そのものだ。少し怖いけど。

それからは、特に関わり合いもなく時間が過ぎて読書会は終わる。お菓子を食べて、置いてあった本を読んで、文香と美波の話聞いて、プロデューサーの様子を見て終わった。

第11話

今日からボーカルレッスンを行う事になる。と言っても内容は単純な物だ。実際に歌うのではなく、鷺沢文香と新田美波の音を合わせるのが目的だ。ただ、今日は特別な客が見学にも来ている。

（頑張ってください！）

声には出していないが部屋の隅から送る視線の先の文香を、橘ありすは身を乗り出し、そんな形で見ている。文香から事情を聞いて、応援に来たのだ。

「——がんばりましょうね、文香さん」

「はい。よろしく願います」

この二人も仲が良くなったものだ。同い年という事もあるのだろうが、もともと合っていたのかもしれない。

「今日は、音合わせをしますので気を楽にして行ってください。それでは、願います」

「——わかった。では、よろしく頼む」

これに関しては、プロに頼む。機材を使って音を出し、それに二人が合わせて行く。

絶対音感の無い者には、この作業は難しい。それにこれはあくまでも始めだけ、それからはより専門的なものになっていく。

武内は、トレーナーに後を任せてありすの横に移動する。今回は、邪魔にならないように見守るぐらいしかやる事がない。

◇◇◇◇◇

レッスンが始まって少し経つただろう。見ている限りでは問題はない。二人の息は合っているし、文香の様子も悪くはない。たまにありすの事を見ているように思えるが、それも文香に取っては精神の安定へと繋がっているのかもしれない。

(ステージの時は、問題はなかったね)

記憶では、体調を崩したものの文香は、ありすと共にステージへと上がる事になった。その様子は、舞台袖で見えていたが素晴らしいものだったと思う。彼女が調子を崩したのはそれからだ。ふと、思い出すのだろうか。もしあの時に何もできず、迷惑を掛けてしまったらと。それからは、美城常務の判断で仕事などは減らされていた。それだけ彼女は、思い詰めていたのだろう。レッスンで自分を追い込むほどに。

「——プロデューサーさん」

隣から小さな声がする。元々大きな声を出す子ではないが、レッスンの邪魔にならないようにしているのだろう。

「なんででしょうか？」

「文香さんの様子はどうなんですか？」

表情にも声にも不安が見て取れる。大切に思っているのだろう。

「……そうですね。今の所は、問題は見られていません。声質に関しては、とてもお綺麗です。音も新田さんと合わせられています。とても安定した物だと思えます」

「——そうですね！……すみません……でも、良かった……」

こうして見ると、彼女も年相応の少女なのだと思う。

「今日の成果には、橘さんの存在も大きいと思います」

「私ですか？」

「気づいていると思いますが驚沢さんは、橘さんを見ると安心した顔をされます。橘さんの存在が文香さんを支えているのでしよう」

文香の不安の大きなところは、迷惑を掛けて見捨てられる事だ。彼女の世界は、一人だけの世界だった。自分にできない事をやる人達を見るだけの灰色の世界。またそこに戻るのが怖くなったのだ。

「……文香さんのお役に立てているんでしょうか？」

「——はい。とても」

「そうですか……」

ありすは、今もレッスンをしている文香へと視線を送る。今、彼女は何を思っているのだろうか？

「プロデューサーさん……：私のお願いを聞いてもらえますか？」

「なんででしょうか？」

「……私も一緒にはできませんか？　こうして見ているだけじゃなくて、一緒に……：そばに居たいんです」

ありすなりに考えたのだろうか。大人に意見すると言うのは、子供である彼女には怖い事だ。今も不安の色が見える。でも、それでも自分の考えを口にする。

「……わかりました。少しだけ時間を頂けますか？」

「——ありがとうございます！　……：ごめんなさい……：また……」

「謝る必要はありません。橘さんの気持ちはわかりましたから。それでは、私は少し外します。橘さん、私の代わりにお二人をお願いします」

「——はい。でも、見ている事しかできませんけど」

「十分です。先ほども言いましたが、橘さんがそこに居てくれるだけでも、鷺沢さんにとつては救いになります。では、後はお願いします」

武内は、レッスン場から出て行く。ありすの願いを叶え、文香を輝かせるために。

◇◇◇◇◇

美城常務の許可が下りた。ありすは、同じユニットの人間であるので必要があるのならば武内の判断で決めていいと。仕事などのスケジュールは、ユニットを組んでいる文香に合わせる形で減っている。代わりにレッスンなどが入っているので、これらを調整すればありすも参加できる。

「これなんて、ありすちゃんに合うと思うんですけど、美波さんはどう思いますか？」
「そうですね。でも、少し難しい漢字もないでしょうか？」

「大丈夫です。コレで調べながら読みますから！」

読書会にありますが加わり、今はありすの為に文香と美波が本を選んでる。今では、シンデレラ・プロジェクトのメンバーも参加しているので持ち寄った本が大量にある。それこそ個性的な彼女達を表すように様々なジャンルがそこにはある。

(こんなものでしょうか?)

そんな光景を見ながら今後の事をデスクでまとめる。ありすもレッスンに加わり、目標であるステージへと立つことになる。ありすの評価などを取り寄せて考えてみたが

正直な所、文香と美波とは差がある。もっともこの二人が高い位置に居るだけでもある。どちらもボーカルレベルが単純に高い。

(調整が難しいですね)

二人ならありすに合わせられる。しかし、全体的なレベルを下げては意味がない。課題曲を変える事も検討しておく必要があるかもしれない。……どうしたものか？

「——プロデューサーさん」

声のした方を見ると、ありすが飲み物を持ってきてきている。

「その……紅茶を淹れてみたんですけど……」

「ありがとうございます」

考えていて気付かなかったがどうやら紅茶を淹れてくれたらしい。

「いただきます」

ありすから受け取り、紅茶を一口飲む。

「……美味しいですね。あまり、紅茶は飲みませんが、これは飲みやすくして美味しいです」

「——本当ですか！ やりました！」

ありすは、文香と美波の方を見る。三人は、お互いに笑顔で向き合っている。問題だとは思ってはいなかったが、気が合うのは良い事だ。

「今度も私が淹れますから言つて下さいね！」

ありすは、上機嫌で二人の所に戻つていく。文香と美波にも褒められ、ありすの機嫌は益々良くなる。

（——頑張りましょう）

この光景を見せられて、他に道などない。3人がステージの上で輝ける方法を探すしかない。それが、プロデューサーとしての役目だろう。

第12話

「ふーん」

別に予想をしていなかったわけじゃない。この時間は、プロジェクト・クローネの人間のために割り振られた時間だ。本当ならシンデレラ・プロジェクトで独占したい。しかし、この部屋の主は、今や両方の担当プロデューサーだ。

「どうかしたのか、凜？ そんなところに居ないでこっちに来なよ」

部屋に入った所で立ち止まっていた渋谷凜を神谷奈緒が呼ぶ。

「遠慮なんていらないよ？ 凜もプロジェクト・クローネなんだからね」

北条加蓮は、シンデレラ・プロジェクトからの差し入れであるお菓子に手を伸ばしている。

「遠慮なんてしてないよ」

凜は、空いている席へと移動する。

「これは、どうやって解くんでしょうか？」

「……これは、ですな——」

空いている席は、宿題をやっている橘ありすと教えている鷺沢文香の隣だ。残念なが

ら同じユニットを組んでいるトライアドプリムスの加蓮と奈緒の方は、だらしなく占領しているので空いていない。二人は、奈緒や他の人達が持ち寄ったマンガを読んでいる。

(これでいいの?)

別にちゃんとしなければいけない決まりなどはない。むしろ、氣を楽にできた方がいいだろう。実際、シンデレラ・プロジェクトの人間も此処には気分転換に来ている。

ただ、なんだか納得いかない。そもそもこの部屋の主は、この状況を特に気にする事もなくデスクで仕事をしている。忙しいのはわかる。シンデレラ・プロジェクトだけではなく、一部とはいえプロジェクト・クローネの方も担当しているのだから。

「ねえ、今後の事について話さない?」

「今後の事?」

「なんか話す事とかあったか?」

「こう……方針とか?」

「プロデューサーに聞けばいいよー」

「だよなー。なんかあつたら聞いてくれるしぎ。そんな時でいいんじゃない?」

元々、トライアドプリムスの方針は美城常務が決めていた。それを考えれば、意見を求められるようになったただけ今の状況の方がマシだろう。必要な時は、ちゃんと場を用

意してくれるのだから。

(なんだろう……この納得のいかない感じは……)

問題はない。順調だろう。隣に居る二人も今はあまり問題がなさそうに思える。まだレッスンをシンデレラ・プロジェクトの新田美波と共にやっている。目標であるステージの為に。ただ、ariusが加わってからの、文香の気持ちに余裕が見られるようになった。今もこうして勉強を教えられるほどに。

(——プロデューサーのバカッ！)

なんだかムカつくので口には出さないが怒る。相手は、素知らぬ顔で仕事を続けている。

「——そうだ、忘れてた」

突然、加蓮が何かを思い出す。

「プロデューサー」

どうやら武内に用事らしい。

「……なんででしょうか？」

「今度、服を選んでほしいんだけどダメ？」

「服ですか？」

「ほら。プロデューサーって流行とか詳しいでしょ？ だから一緒に選んでほしい

なーって思ったんだけどダメかな？」

「——ちよつと、加蓮！ プロデューサーは、忙しいんだからそういうのはダメだよ！」

「……そんな大きな声で言わなくても——わかった！ 凜も行きたいんでしよう？」

「——えっ？」

「違うの？ てつきり自分も行きたいけど、行けないから怒ってるんだと思った」

「——ち、違う！ 私は、純粹に忙しいと思つたからで……そういうのは……」

凜は、次第に言葉が小さくなる。

「もし行くんだつたら私もお願いしたいかな？ 自分で選ぶのとか面倒なんだよな」

「奈緒のは、アタシが選んであげるよ！ とびつきり可愛いの！」

「……前に嫌だつて言つたら？ あんなフリフリなの着られるかよ」

「えー似合つてたよ！ ……ほら、可愛いじゃん」

その時にスマホで撮つた写真を奈緒に見せる。

「——ああ、もう！ 消したんじゃないのかよ！」

「消すわけないじゃん。アタシのも撮つたでしょ？」

「……それは……まあ、そうだけどき……」

「ねえねえ、プロデューサー。少しだけでいいからダメかな？」

「……今度、仕事の合間に時間が空くと思います。仕事で特に問題がなければ少しだけ

ならかまいません」

「——本当に？ やったね、凜！」

「……あつ、うん」

加蓮に振られても、頷くしかできない。

「そうなると、アニメのボックスは諦めるかな？ ……いや、でもなー」

「買い物してから決めればいいじゃん。良いのがあるかわからないだし」

「そうだな。そうするか」

よくわからないが、加蓮の提案で仕事の合間とは言え買い物をする事になった。

「——やつと、終わりました！」

「お疲れ様です」

こつちで話しているうちにありすの宿題は終わったようだ。

「——待っていてください。今、紅茶を淹れますから」

「お願いします」

ありすは、宿題を見てくれたお礼を兼ねて文香の為に紅茶を淹れる。

「プロデューサーさん」

「……なんでしょうか？」

「プロデューサーさんも……飲みますか？」

「……お願いします」

「——はい！」

ありすは、武内の分も淹れる。

「——どうぞ」

「ありがとうございます」

先ずは、文香の方に持って行き。

「頑張つて淹れました」

「ありがとうございます」

今度は、武内の下へと持って行く。

（私達には、聞かないんだ）

凜の思いを知らないありすは、元の場所に戻ると自分の分を口に運ぶ。別に悪気がある訳ではないのだろうが、いつの間にか自分と武内の評価がありすの中では変わっている。と言うよりも、文香とあまり変わらない気さえする。

（なんだかモヤモヤする）

プロジェクト・クローネのメンバーもシンデレラ・プロジェクトのメンバーに負けないうぐらい好きだ。ただ、この光景を見るとモヤモヤしてくる。

（——プロデューサーのバカッ！）

こつちの気持ちも知らないで、当の本人は素知らぬ顔で今も仕事を続けている。

◇◇◇◇◇

文香の調子は、ありすが加わったことにより良いものとなってきた。新田美波の存在も大きく、相談ができる相手となつている。傍に居てくれる者。悩みを聞いてくれる者。その二つが今の文香を支えている。

「——素晴らしいです」

今日は、トレーナーは居ない。代わりに武内が客観的に3人のステージを見ている。場所は、レッスン場。衣装は、レッスン用の服。しかし、それぞれが自分の持てる物を出し切つてパフォーマンスを行った。

「プロデューサーさんにそう言ってもらえると安心します」

「……そうですね。プロデューサーさんの言葉なら」

「……私も大丈夫ですか？」

ありすだけは、不安があるようだ。無理もないだろう。美波と文香との差は、共にステージに立つありすが一番わかっている。

「——問題はないと思います。確かに技術的な問題はあるでしょう。しかし、それだけ

ではありません。橘さんが居る事で全体的な質が高まります。自信を持つてください」「——はい。これからも頑張ります！」

ちなみに曲は変えてある。ラブライカの Memories では、ありすには合わない
と判断したからだ。あくまでもこの3人でステージに立つことに意味がある。

「後は、細かい調整をしながら個人の力量を上げていく事になります。これ以上は、私ではなくプロに任せます」

「……それは、プロデューサーさんが離れるという事ですか？」

文香の表情に不安が表れる。

「いいえ、これまで通り私が見ます。全体的なものや調整は私がしますので。ただ、技術的な指導に関しては、私では限界がありますので」

「プロデューサーさんならできそうな気がしますけど？」

ありますがそう言葉にするが、それは難しい。いや、346プロダクションに居るプロのトレーナー達の実力を考えれば、比べる事すら憚られる。今もそうだが、彼らの助言を下にしている。

「橘さん。気持ち嬉しいですが、こればかりは専門家には勝てません。全てを自分一人でできれば、それは凄い事です。しかし、できないとわかつているのなら他に協力を求めるのが正しい道だと思います。橘さんも無理はしないでくださいね。私や鷺沢さ

ん、新田さんもいるのですから」

「——はい」

「では、最後にもう一度通しでやってみましょう。それで、今日は終わりにします」
彼女達は、アイドルとしてステージへと立つ。その度に問題に遭遇していく事になるだろう。そんな彼女達の力になれるようにしていきたい。

◇◇◇◇◇

レッスンが終わり、家路につくことになる。今日は、美波さんもありすちゃんもいない。プロデューサーさんと二人だけだ。

「——今日は、どうでしたか？」

車を運転しながら、鏡越しにこちらを一瞬だけが見る。その瞬間に目が合う。

「……楽しかったです……とても……」

また、こういう気持ちになる事が出来たのは、今も傍に居てくれる人のおかげだろう。「そうですか。楽しんで頂けたらなによりです」

鏡越しではつきりとは見えない。でも、喜んでくれている。

「……ありがとうございます。プロデューサーさんのおかげで、私はこうしてまだ歩い

て行けそうです」

恥ずかしいけどお礼を言いたい。もし彼が居なければ、私はもう一度あの灰色の世界に戻っていたのかもしれないのだから。

「……そうですか。ただ、一つだけいいですか？」

「……なんででしょうか？」

「私は、特別な事はしていません。鷺沢さんが、最後まで諦めなかったからこそ今があります。——シンデレラの話を知っていますか？」

「——はい」

私が一番好きな本の名前だ。

「シンデレラは、確かに美しい姿をしていたのかもしれませんが。しかし、灰を被り続けても決して諦めずに生き続けたからこそ魔法使いに出会う事が出来ました。最後まで諦めない気持ちこそが私は、魔法なのだと思います」

「……そうかもしれないですね。……でも——」

言っている言葉はわかる。でも、私は少し違うと思う。

「——私にも魔法使いが来てくれたんだと思います」

あの時の私は、諦める寸前だった。でも、そこから立ち上がらせてくれた人がいる。

「魔法使いですか？」

「——はい」

私を灰色の世界に行かせずにいてくれた魔法使いは、今も私の為に鉄の馬車を走らせてくれる。場所は、お城ではなく家だけど。でも、今はこれ以上の事は言えない。言えるのは——

「ありがとうございます。プロデューサーさん」

その言葉だけは、伝えておきたい。

第13話

プロジェクト・クローネのプロデューサーとして働きだして少しばかりの時間が経った。新しい担当アイドルと関わっていく中で、シンデレラ・プロジェクトのアイドル達との関わり方も見直してはきた。ただ、念のために話し合いの場を設けてみることにした。

「プロデューサー。最近、杏は働き過ぎなんだと思うんだー」

「そうですね。双葉さんは、シンデレラ・プロジェクトの中でも一番忙しいかもしれません」

「だよね、だって此処に来るの初めてだし」

双葉杏は、武内の隣に座りグデーとしている。大人が二人で座っても余裕がある広さのソファアーンなので、身体の小さい杏なら広めに使っても問題ない。

「双葉さんは、キャンディアイランドと個人での仕事をされていますからね」

杏は、俗に言う天才だろう。アイドルとそうでない時のON、OFFがすっかりしており結果を出している。実際、シンデレラ・プロジェクトの中でも柱になりやすく、双葉杏、緒方智絵里、三村かな子の三人で組んでいるユニット『キャンディアイランド』も

彼女に任せている。

「やはり個人の方が仕事は入れやすい面がありますので」

「はあく、人気があるって証拠なんだろうけどさー、もう少し杏の事も考えてよね？ こ

れじゃあ、印税生活する前に杏倒れちゃうよ」

「申し訳ありません」

「……いいよ、別に謝らなくても。プロデューサーの事だから杏の事は考えてくれてる
と思ってるし。……それで、二人はどうなの？」

「緒方さんと三村さんは、二人での仕事を最近では行っています」

「智絵里ちゃんとの前は、お菓子の工場の取材に行ってきたんだよ！ おいしそう
だったなー」

「できたてのお菓子……美味しかったよね」

かな子と智絵里は、その時のロケを思い出したのか楽しそうに話を始める。

「……ねえ、プロデューサー」

「なんででしょうか？」

「……杏もキャンディアイランドの一員だよね？」

「……できる限り3人一緒の仕事を取るようにします」

「今度は、杏ちゃんとも一緒に行けるのかなー。だったら、アメとかの方がいいね！」

「そうですね……甘くて美味しいのが食べられるといいですね」

「……取れる？」

「……努力してみます」

この3人は、今のところ問題はなさそうだ。ただ、できる限り3人での仕事を取れるようにしよう。しっかりしているとはいえ、杏もまだ子供なのだから。

◇◇◇◇◇

「新曲が出したい！　ねえーいいでしょーPくん」

隣に座る城ヶ崎莉嘉が、接近して上目遣いでこちらを見ている。人によつては効果があるのだろうが、可愛いだだけだ。

「莉嘉ちゃん、あんまり無理を言ったらダメだにいい」

諸星きらりが窘めるが効果はないだろう。

「でも、みりあも新しい歌、歌いたくないな。この前、パパとママと妹が見に来てくれたんだー！　だから、新しい曲で楽しませてあげたい！」

少し前に行われた凸レーションのライブに赤城みりあの家族が見に来ていた。関係者として楽屋の方にも顔を出してもらい簡単にみりあの仕事について説明をしたのを

憶えている。

「でしよー！　お願いPくん。お願い聞いてくれたらデートしてあげるからー」

「曲に関しては、時期を見る必要があります。それに製作まで時間が掛かりますので」

「Pくんならすぐにできないの？」

「プロデューサーなら魔法みたいに作れそーだよね！」

莉嘉とみりあに期待の目で見られるがこればかりはどうにもできない。

「もおーダメだよ二人ともー、あんまりPちゃんを困らせちゃめっ！」

莉嘉とみりあも、きらりからの2回目言葉には従う。普段からきらりが二人にとつての保護者なので二人もその辺の事はわかっているのだろう。

「城ヶ崎さん、赤城さん。すぐには無理ですが、検討はさせて頂きます。凸レーションも人気が出てきましたから時期を見れば、出せるとは思いますが」

「ホントーに？　信じてるからね、Pくん☆」

「楽しみだなー！」

二人の期待に応えないといけないだろう。少し、早めに検討を始めるようにしよう。

「ごめんねえー。でもお、きらりんもすこーし期待していいかにい？」

「もちろんです。二人の事をお願いします」

「Pちゃんに任せられちゃったにいー。きらりんふあいとふあいと☆」

ここに關しては、きらりとこまめに連絡を取る形で問題はないだろう。その代わり、きらり個人の話も聞く必要はある。

◇◇◇◇◇

「お二人にお聞きします。何か話がありますか？」

「私は、特にはありません。アーニヤちゃんは？」

「Нет проблем。私も、特には」

「そうですか」

新田美波とアナスタシアの二人は、特に話すことがない。あるとすれば、二人のユニットである『ラブライカ』の事についてだろう。この二人の場合は、普段から会話をしている。美波は、シンデレラ・プロジェクトのリーダーとして話をしなければならぬ。アナスタシアは、プロジェクト・クローネの方でも活動しているので、調整も兼ねて話し合いが必要だからだ。

「では、何かあればと言う事で。……時間が余りますがどうされますか？」

「せっかいですから、お話でもしましょう。ねえ、アーニヤちゃん」

「ЭТО право。そうですね。Продьюсер。Давай те погов

Р И М。お話ししよう」

それからは、あまり仕事には関係ない話をした。何かあれば、少なくともどちらからかは話が聞けるだろう。

◇◇◇◇◇

「Pちゃんは、最近みく達をほったらかしにや!」

「そうだそうだ!」

前川みくと多田李衣菜から抗議の声が出る。

「もつと、猫ちゃんの素晴らしさを世の中の人に知ってもらうにはL I V Eにや! それに新曲が必要にや!」

「猫はともかくL I V Eはしたいかな? どうにかならぬですか?」

「リーナちゃん! もつと強く言わなきゃダメにや! それに猫ちゃんは大事に決まってるにや!」

「いやー、私としてはロックの方が大事だし」

「にわかロックなんてお断りにや!」

「誰がにわかだよ!」

「リーナちゃんに決まってるにや！」

それからも、いつも通りの光景が目の前で行われた。二人が組む『アスタリスク』の方も評判は上々だ。二人も仕事の時は、特にケンカはしない。仮にしても普段通りなので気にする必要もないだろう。あとは、一時的に組んだ木村夏樹と安部菜々とのユニツトぐらいだろう。ただ、こちらの場合は保護者になる二人が居るので任せられる。

◇◇◇◇◇

「三人は、何かありますか？」

「未央ちゃんは、特にないよ？　しいて言うならいろいろやってみたいなぐらいで」

「私も特には……レッスンも見てもらえていますし、相談もできてますから」

本田未央と島村卯月からは特に不満はないようだ。プロジエクト・クローネのトライアドプリムスとの合同レッスンも行っており、その時にレッスン内容や相談にも乗れている。

「……私は、あるかな？　ニュージェネレーションには問題ないけど、加蓮や奈緒に甘いと思う」

渋谷凪から指摘が来るがそうなのだろうか？

「そうでしようか？」

「この前も此処で寛いでたよ。時間を超えても。その辺りは、しつかりするべきだと思うけど？」

「確かにそうかもしれないですね。ただ、あの時は特に予定もありませんでしたから。お二人も家に送ってほしいと申されていましたし」

「——甘い！ 最近じゃ、此処に来れない時は、シンデレラ・プロジェクトの方で待つてるんだよ？ もう少し引き締めないと！」

「えー、別にいいんじゃないの？ 二人が来てくれると楽しいよー」

「はい！ 凜ちゃんの事とかいろいろ聞けます！」

「しづりんが昔——」

「——みーおー！」

何かを言おうとした未央を凜が押さええにかかる。

「島村さんは、特にありませんか？」

念の為、卯月に聞いておく。彼女は、気持ちを笑顔に隠すと知ったからだ。

「……本当にないです。ダンスやお仕事は今も失敗しますけど、他の誰かが居てくれます。それにこうして話せてますから」

「……そうですか。何かあつたら言つて下さいね」

「はい！」

この3人も特に問題はないのだろう。ただ、他のアイドル達もだが、何かあれば気づけるようにしておきたい。

「ちよつと、待って！　まだ、私は——」

凛の言葉が聞こえるが、未央との戦いで話ができそうにないのでまた別の機会に。

第14話

ある程度なら予想はしていた。美城常務は、人を見て態度を変えるから。もちろん、立場で変えると言う意味ではない。常務は、人柄や実力のある者には機会を与える。そうでない者には、厳しい態度を取るけど。だから、そんな人間から機会を与えられ続けるとするならば、彼は優秀な人間だと言える。

「いいでしょうー！ プロデューサーに選んでもらったんだー」

「……そうなんですか」

「奈緒もそうなんだよ！」

「私は別に……自分で選ぶのが面倒だっただけで……」

「私も頼めば選んでももらえるんでしょうか？ できれば、大人っぽく見えるのがいいんですけど」

どうやら北条加蓮と神谷奈緒は、シンデレラ・プロジェクトのプロデューサーと買い物へ行ったようだ。加蓮も奈緒も行く前から話していたが、実際に服を着ているところを見ると気に入ったのだろう。それを鷺沢文香と橘ありすに見せている。別に彼女達に自慢したかったわけではない。偶々服を着てきた日に此処に居ただけだ。

「ねえ、奏はどう思う?」

「……そうね」

速水奏は、加蓮を見て考える。どうやら奈緒もそうだが大人し目に抑えられている。それこそありすが言ったような大人の女性が着るような。

「それは、彼の趣味なのかしら?」

「んーどうだろう? 普段と違う格好がいいって言ったからだけど……そうなのかな?」

「でもそうだとすると落ち着いた感じの人がいいのかな?」

「プロデューサーさんの性格で考えればそうかもしれないですね。物静かで知的な……文香さんみたいな人でしょうか?」

「……私ですか? ……私なんて……」

それぞれが意見を口にし始めるが真実を知っているのは一人だけだろう。
(彼の話をするようになったわね)

他のプロジェクト・クローネのメンバーと居る時は今までと変わらない。ただ、彼を知っている者同士の場合は、自然とその話になる。

(欲しいものをくれたから?)

加蓮と奈緒は、同じトライアドプリムスの渋谷凜に対抗心を持っていた。初めは、ラ

イブで見た凜の姿に憧れていただけ。でも、同じ場所に立つようになってからは目標になった。そして、共に歩むうちに嫉妬を覚えるようになってきた。それは、とても自然なもの。憧れは、嫉妬へと繋がるから。ただ、それは届かないからこそ身に宿る感情だ。手に入らないから憧れる。嫉妬する。でも、二人はそれを手に入れた。正確に言えば、そのきっかけをだ。

文香に関しては、少し前に行われたシンデレラ・プロジェクトの新田美波とありすと共に挑んだステージでもう一度前に踏み出せた。失敗によって恐れを抱いていた彼女は、今にも消えてしまいそうな程に弱々しかった。力になりたかったが、残念ながら私にはできなかった。だから、彼の下へ行くように言ってみた。加蓮や奈緒に与えたように、文香にも与えられるかと思つたからだ。結果として言えば、与えられた。余計なものも一緒に与えられた気もするけど。

ありすに関しては、背伸びをしなくなってきた。前と違い、できない事は無理にせず頼るようになった。まだ名前の事に関しては変わらないが、もしかするとそれも変わる時が来るのかもしれない。

(どんな人だったかしら?)

会つて話したのは、秋に行われたアイドルフェスティバルの時だけ。文香が体調を崩した時に動いてくれた。その時に少しだけ話をした。「私の方でなんとかしますので、

鷺沢さんをよろしくお願いします」と言われただけ。私は、それに一言お礼を言っただけ。でも、安心できた。どうしていいかわからなくなった時に掛けられた言葉は今でも憶えている。背が高く、無表情な男性。少し強面だけど、あの時の彼は誰よりも必死で動いていた。

（——確か、会うのよね？）

今日と言う日をもしかしたら心待ちにしていたのかもしれない。彼ともう一度会う日を。

◇◇◇◇◇

「我が友よ！ 我の言葉に耳を傾けるがよい（聞いて下さい、プロデューサー！）」

「なんででしょうか？」

「我がグリモワールに新たな英知が記された。禁断の果実を得る資格を持つ汝にも与えてやろう（頑張つて描いたんですけど、見てもらえますか？）」

「確か、今度のライブの衣装でしたか？」

「我らに言葉など（そうですよ）」

武内と神崎蘭子は、車で撮影場所へと向かっている。本来であるなら送迎は美城常務

から与えられたスタッフに頼むのだが、蘭子の場合には会話に少し問題がある。彼女は、自分の言葉に誇りと拘りを持っている。ただ、それは一般の人には理解が難しく会話間での問題が起きる。それに加え、蘭子は心が繊細で弱い。自分の言葉をやめる事はできないが、それによって起きる問題にはとても怯える。だから、それを理解できない者と彼女の担当にはできない。特に神崎蘭子は、一人で仕事をしている。誰かが傍に居ないと彼女はたつた一人で前に進まなくてはいけない。

「我が友よ……」

話をしていた蘭子の言葉が小さくなる。

「我と汝は古き盟約を結びし仲。だが、我と共に戦場へと赴く墮天使達も同じ盟約を結んでいる。我だけが汝を手元に置くことが許されるのだろうか？（私だけこうして一緒なのはズルくないですか？）」

「神崎さんは、お一人で仕事をされています。皆さんも理解してくれていると思います」「それが理か？（そうですか？）」

（……いつも一人で寂しかったけど、今は嬉しい）

蘭子は、今まで一人で寂しかった。他の人達が羨ましかった。だが、今はそれが報われたかのように内心では喜んでいる。少しは気が引けなくもないが、心に嘘は付けない。

「今日は、プロジェクト・クローネの速水奏さんと共に撮影が行われます。面識はありませんよね？」

「墮天使達の饗宴で（秋フェスであります）」

「行きは、他のスタッフの方が付いていますが、帰りは私達と共に帰る事になりますのでお願いします」

「我が言の葉の理解者か？（お話とかできますか？）」

「……難しいと思います」

「……ふえ……どうしよう……（黄昏の時か）」

◇◇◇◇

撮影場所は、結婚式などでも使われる教会。346プロダクションでも懇意にしているブランドの撮影で、ドレスを着て行われることになる。蘭子は、天使をイメージした物と墮天使をイメージした物を。奏は、漆黒の姫君のイメージをした物を着る事になる。

撮影は順調に進行する。蘭子は、この手の衣装に慣れている事もあり自然と振舞えている。奏は、主にモデルなどの仕事を受ける事が多く、蘭子とは踏んでいる場数が違う。

(どちらも絵になりますね)

どちらも現実的な衣装とはお世辞にも言えない。どちらかと言えば、額縁に入れて飾るような絵としての価値だろう。写真が撮られる度に新しい絵が作られていく。

「お疲れ様です」

案の定、奏の方が早く撮影が終わる。化粧直しなどで、交代で行われたわけだが、奏の方が早い段階でカメラマンの想像の中に納まった。

「ありがとう。少し疲れたわ」

奏は、衣装を着替えずに用意されている椅子へと座る。

「神崎さんの様子は、どうかしら？」

奏の目には、今も続く撮影に挑んでいる蘭子がいる。

「そうですね。楽しんでおられます。神崎さんにとつては、好きな衣装ですから」

休憩中にいつも肌身離さず持っているスケッチブックを見せてもらった。そこには、蘭子が描いた次のライブで着たい衣装が描かれていた。今回着ている衣装もその系統の物だ。

「……………楽しい……………そう……………」

確かに、撮影に挑んでいる蘭子は楽しそうに見える。場の雰囲気もそれに合うように和やかなものだ。

「速水さんは、違うのですか？」

「……どうかしらね。モデルの仕事は嫌いじゃないわ。自分を綺麗に着飾る事が出来るから」

でも、楽しいと思つた事があるかと聞かれれば、それはないかもしれない。

「一つ聞いてみるでもいい？」

「なんでしようか？」

「あなたは、魔法が使えるの？」

どうして自分でもこんな事を聞くかはわからない。でも、自分の知る人達を彼は変えた。

「いえ、残念ながら使えません」

「……そうよね。ごめんなさい。変な事を聞いて」

返つて来た言葉は当然のものだ。

(なんだかバカみたい)

答えなんて聞くまでもなかった。

「ただ、魔法を使える人なら知ってはいます」

「……えっ？」

思わず彼の方を見る。彼は、私の事は見ておらず真つ直ぐに前を見ている。

「私には、魔法は使えません。しかし、人を笑顔にする魔法を使える人なら——」

武内は、そこで言葉を止める。その視線の先を見れば、彼が言おうとしていたことがわかる。

「……そうかもしれないわね」

視線の先には、今もまだ撮影をしているアイドル神崎蘭子の姿がある。今も撮影が続いているのは、別に未だにカメラマンが満足のいく写真が撮れないからではない。いや、それも少し違う。

「——私の真実の姿を今此処に（これなんてどうでしょう？）」

「いいねー！ これも悪くないねー。もう一つお願いしていい？」

「——人の欲とは深きものよ（わかりました！）」

カメラマンは、蘭子との撮影を楽しんでいる。とてもではないが仕事とは思えない光景だ。

「確かに魔法を使っているのかもしれないわね。あんな光景見た事ないもの。でも——」

彼女がそのような笑顔で振る舞えるのは、貴方が彼女に魔法を掛けたのではないの？
奏の目には、今も蘭子の様子を見ている武内の姿がある。

「——私も魔法を掛けてほしい……」

今すぐには無理だろう。でも、願いが叶うなら私も彼女達のように……

第15話

「ねー、アーちゃん。少し聞いてもいい?」

「Как же。何を、ですか?」

塩見周子は、アナスタシアにソファで寝そべりながら訊ねる。

「シンデレラ・プロジェクトのプロデューサーってさー、どんな人なの?」

「プロデューサー、ですか? Это право。そうですね、とても優しいです。それに、Надежный。とても頼りになります」

「そーなんだー。ふくん」

「それが、どうかしましたか? 周子も、я хочу встретиться。会いたいですか?」

「どうかなー」

最近、プロジェクト・クローネの待機場所では度々話題に上がっている。話しているのは、プロデューサーの担当のアイドル達だ。

「私は、会いたいです。今は、история。話だけしか、できませんけど」

アナスタシアは、手を胸の前で組んで目を閉じる。その閉じられた瞼の裏には誰が居

るのだろうか？

「どうしよーかなー」

気にはなる。ただ、会ってどうするつもりなのだろうか？

◇◇◇◇◇

「来ちゃったけど、どうしよーかなー」

特にやる事もないし、フラフラしていたら目的の場所に着いた。目的と言っても来るかどうかは微妙な所だったが。

「悩んでも仕方ないかー、お邪魔します」

扉を叩いて部屋に入る。

「……あれっ？ 居ない？」

部屋の中には誰も居ない。

「なんだー、来て損したな〜」

周子が部屋から出ようとすると、テーブルの上に出したままになっていた物が目に映る。

「……写真？」

ソファアーに座り、写真を手に取ってみる。

「これって、秋フェスの時のだ」

周子の手には、自分もプロジェクト・クロローネの一員として参加した秋のアイドルフェスティバルの時の写真だ。

「そう言えば、見た事なかったな」

初めてのステージという事もあって、本番までレツスンばかりやっていた。それに宣伝に必要な仕事も。だから終わった後は、何もする気がないほどに気が抜けた。

（あたしのもあるのかな？）

シンデレラ・プロジェクトのプロデューサーが撮ったかもしれない写真。それに自分が写っているかは微妙な所だろう。でも、なぜか探してしまう。

「……あった」

それは、偶然に撮られたものだ。シンデレラ・プロジェクトのアイドルを写した時に偶然に写り込んだものだ。

「……楽しかったな」

本当に大変だった。それこそ生まれて初めて頑張ったと思う。

「……別人みたい」

周子は、写真を下の場所へと戻すとソファアーに横になる。

「……つまらないな」

秋のアイドルフェスティバルが終わってからそう思う。なんだか、やれる事はやり切った気さえする。だからだろうか、最近では退屈で仕方ない。そのせいで、橘ありすをからかったりもしてしまう。

「……最低だよねーあたし」

でも、他にする事も浮かばない。そもそもアイドルになったのも、なりたいたいからではない。早い話が家出である。実家に居ると親から小言を言われるので家を出た。ただ、住む場所の心当たりもなかった。そんな時にアイドルにスカウトされた。別にアイドルには興味はなかった。ただ、三食付きで寮に住めると聞いたのでやる事にした。本当にその程度のものであった。

「……楽しかったんだけどな」

レッスンは大変だった。それまでの自分が何もしていなかったと思ひ知らされた。でも、なんだか楽しかった。プロジェクト・クローネの一員になってからは、一緒にやる仲間もできた。クローネの仲間達は好きだ。一緒に何かやるのも好きだ。でも、今はいまいちになっている。

「……飽きたのかな……それとも燃え尽きちゃったのかな」

人生で初めて頑張った。そして、結果も出せた。もしかしたらそれで満足してしまっ

たのかもしれない。

「……………これからどうしよう」

最近、そう思う時がある。

「……………帰ろうかな……………帰れないから此処に居るんだった……………」

なにも浮かばない。何もしたくない。

◇◇◇◇◇

急な呼び出しで部屋を開けてしまった。別に泥棒などが此処まで来るとは思わないが、誰かが訪問する場合がある。仕事の相手にそのような態度をとれば、今後に響くかもしれない。

「……………塩見さん？」

オフィスに戻って来た武内の目には、ソファで横になり眠っている周子の姿がある。

(なぜ此処に?)

彼女が此処に来る予定はない。現在は、担当でもないので用件もないだろう。

「……………」のままではいけませんね」

なぜ居るかはわからないが、このままにしておくわけにもいかない。せめて、上着ぐらゐは掛けておこう。

「申し訳ありません。今は、これで我慢してください」

寝てはいるが、女性に上着を掛ける事になる。断りを入れておく。

「……片付けますか」

呼び出される前まで、秋に行われたアイドルフェスティバルの写真を確認していた。別に仕事と言うわけではないが、参加したアイドル達に配ろうと思ったからだ。一応、資料などの為に撮った物なので一通り使い終わるまでは渡せなかった。今は、まとめておいて今度好きなものを持って行ってもらう。

片付けも終わったので、デスクで仕事を始める。鷺沢文香と橘ありすの担当になるように正式に美城常務から言われ、仕事が増えた。慣れても増える。仕方がない事だが、もう少しなんとかしたい。

「——起こさないの?」

急に声かして驚くが、声の場所は一つしかない。

「起こしてしまいましたか?」

「……ううん、元々起きてた。上着、ありがと」

周子は、身体を起こし、掛かっていた上着を畳んで隣に置く。

「勝手に部屋に入って寝てたのに怒らないんだね」

「事情も知らずには怒れません。私に何か用ですか？」

「……どうなんだろう？　なんか、来ちやつただけなんだよねー」

周子は、上を見上げながらボーとする。

「何かありましたか？」

「……どうなんだろうね？　正直、よくわかんないんだー」

「……私でよければ、お話を聞きますが？」

「……いいの？　あたしは、担当じゃないよ？」

「私は、プロジェクト・クローネのプロデューサーです。確かに担当ではありませんが、無関係ではありません」

周子は、視線を武内に向ける。

「つまらないんだー」

「つまらない？」

「前に秋フェスがあつたでしょう？　それが終わってからさー、なんだか何もする気になれなくて」

「……無気力という事でしょうか？」

「たぶんねー。だから、どうにかできないかなって。プロデューサーってさ、なんでもで

きるんでしょう？ みんな、話してたよ？」

「なんでもは、できないと思います。……周子さんは、やる気を出す方法を聞きに来たんですか？」

「……そうかもしれない」

やる気を出す。どこか違う気もする。

「……やる気を出させる方法があります。効果があるかはともかく。ただ、どれも塩見さんには効果がないと思います」

「なんで？」

「やる気を出させるというのは、元になる物が必要です。何かの為に人は、やる気を出せると思います。しかし、塩見さんは、ありますか？ アイドルをしたいと思えるものか？」

武内の言葉が胸に届く。なんだか苦しい気分になる。

「……ないかもしれない。アイドルになりたくてなったわけじゃないし」

自分が此処に居るのは、家出した先を探した結果だ。アイドルになりたかったわけではない。

「……塩見さん、少しだけ私に時間をくれませんか？」

「時間？ あたしの？」

「私は、塩見さんの事を少しは知っています。此処に居る理由を。ですが、それだけではないと思います。秋のアイドルフェスティバルに向けて行われたレッスンなどは、何もない者が乗り越えられるほど容易いものではありません。ですから、やる気を出す事は協力できません。その代わり、やる気の元を探すことは協力できます」

「あたしにあるのかな？ 自慢じゃないけど、あたしはそういうの向いてないよ？」

「既に塩見さんは、形を残しています。それは、ここにある写真にもあります」

「……ちよつとしか写つてなかつたよ？」

「……この写真の中から探されたのですか？」

写真は、一枚や二枚ではない。なにせ、ライブの一部始終を撮つたのだから。

「……もしかしたら、探していたのかもしれないね。あの場所にあつた物を」

「……言つてて恥ずかしくならない？」

「いえ、事実であればなにも」

「……ふーん。じゃあ、やってみる？ あたしと探し物？」

「はい。共に探しに行きましょう」

突然の来訪者と共に過去にあつた物を探しに行く。それが何かはわからないが、確かにそれはあつたはずだ。

第16話

塩見周子に少しの間だけ待つてもらい。美城常務の下に周子の件を話に言った。なにせ、彼女は自分の担当ではないからだ。結論から言ってしまうえば、却下された。それも当然だとは思う。周子は、特に問題点がないからだ。レッスン、仕事共に一定の結果を出している。実家の和菓子屋で接客をしていた経験から人に対しての話し方や接し方も問題なくできる。普段のやる気のない彼女とは違い、仕事上の彼女はどちらかと言えば優秀な部類だろう。身近な例で言えば、シンデレラ・プロジェクトの双葉杏が近いかもしれない。彼女も普段はやる気を出さないが、常にこちらの期待通りの結果を出してくれる。ただ、杏と周子では決定的な違いがある。その違いが、おそらくだが今の周子に欠けているものだろう。

「あたしが、アシスタント？」

美城常務の下から戻って来た武内は、周子にそう告げる。

「はい。塩見さんは、私の担当ではありませんのでプロデュースはできません。ですので、私のアシスタントとして関わってはいかがでしょうか」と

これが自分の考えた方法だ。

「……シユーコちゃんもこればっかりは思いつかなかったなー。いいね、面白そうー！」
 アイドルとして何かするのかと思っていたのに別の事を言われた。不意を突かれた形だからかなんだかワクワクする。

「基本的な内容に関しては、仕事とレッスンの合間だけ行って頂きます。やることは、今度予定しているライブのプロデュースです」

「LIVE? それって、誰の?」

「プロジェクト・クローネの方で、私が担当している方々のです。正確に言えば、シンデレラ・プロジェクトの関係でアナスタシアさんも含まれますが」

「へー、そりゃ知らないわけだ。ねえ、それでどうするーん? このシユーコちゃんは?」

「先ずは、会議に参加してもらおうと思います」

◇◇◇◇◇

場所は、武内のオフィス。集まったのは、渋谷凜、北条加蓮、神谷奈緒、鷺沢文香、橘ありす、アナスタシアの6名だ。流石に椅子が足りないので増やしてある。

「……周子が居る理由は、わかったんだけど……なんでそんな恰好してるの?」

「あれー？ シューコちゃんには、似合わないかなー。プロデューサーはどう？」

今の周子は、ビジネススーツに黒縁の伊達眼鏡を掛けている。まずは、形からという事で346プロダクションのスタイリストさんから衣装としてあつたこれらを借りてきた。

「似合っていると思いますよ」

「そうだよねー、プロデューサーが選んでくれたんだしきー」

気取るように格好をつけ、眼鏡をクイツとする。

「それでは、今度行われる予定のライブについては話していきたいと思います。まずは、皆さんの前に置いてある資料に目を通して下さい」

会議をするにあたり、何もないと話も上手く行かないので参考程度の物を事前に用意してある。

「今回は、2000〜3000程度の規模の会場を予定しております。人気が出始めている皆さんには小さいかもしれませんが、今回は宣伝的な意味合いが大きいです。メインは、メディアやスポンサーなどになりますので普段よりも皆さんの個性を出していきたいと思います」

どちらかと言うとファンではなく関係者を招く形で行われる。早い話が、アイドルのプロモーションビデオを生でやるような形だ。プロジェクト・クローネは、美城常務の

指導の下大規模な宣伝を行っている。これもその一環である。

「応援してくれるフアンの為じゃないっていうのは少し引つ掛かるけど、これも必要な事なんだよね？」

「はい。メディアに取り上げられることも必要ですし、今後のライブなどのスポンサーになつてくれる方々も来ることになります。ライブを開くにもいろいろありますので」

「大人の世界の話かー。その辺りは、アタシ達はやんなくていいんでしよう？ 言われなくてもわかんないし」

「だな。必要なら言ってくれよ、プロデューサー」

「これに関しては、私達の仕事ですので皆さんは気にしないでください。ただ、少し挨拶回りはするかもしれませんが、その時はお願いします」

有力な人物や懇意にしている人達には、少しでも優遇処置を取る必要もある。別にやましい事はない。そういう人物は、事前に見つけて切り捨てておく。

「今日は、皆さんの好きなように話して頂くこうと思います。こう言う事がしたい。こんな演出を取り入れたい。そう言った事を自由に話して頂ければ問題ありません。念の為、今まで346プロダクションで行われたライブに関する資料は用意してありますので参考にしてみてください」

「……これなんて、素敵ですね。幻想的で綺麗です」

「流石、文香さんです。私もそれに目を付けていました」

「ДОВОЛЬНО。とても、綺麗な景色ですね」

アイドル達は、用意されていた資料に目を通していく。

「プロデューサー。演出とかさー、あたし達が決めていいの？」

「できるかどうかはわかりませんが、ステージの上に立つ皆さんが楽しめなければ、会場に来られたファンの方も楽しめません。できる限り要望には応えたいと思います」

「ふーん。全部お任せだったから初めてだなー」

「塩見さんも何か意見があれば言ってみて下さい」

「——えっ？ あたしも？ 別にLIVEには出ないよ？」

「塩見さんもアイドルですから問題はありません。自分ならどのようなステージで歌いたいと考えてみてください」

「んー、今はプロデューサーのアシスタントだし、頑張ってみるかなー」

周子は、ペラペラと資料を捲っていく。

「ねえねえ、これなんてアタシに似合わない？」

加蓮が選んだのは、煌びやかな衣装を着て演出される物だ。主役を引き立たせるようにそこだけに光が当たるようになっている。

「それ、一人用だろ？ 私達も居るんだからさ」

「ソロで歌う時は、これにしてもらいたいな！ 憶えておいてね、プロデューサー！」

「わかりました。その時は、これを参考にします」

「……私は、これがいいかな？」

凜が見せるのは、蒼色の世界だ。凜は、蒼が好きなのでその影響かもしれない。

「これは、夏に行われた物ですね。夏の暑さを忘れさせるような演出をしたはずですが、もしかして、プロデューサーも関わってたの？」

「当時は、まだ新人でしたので本当の意味での裏方ですが」

「ふーん。だったら今度その時の話を聞かせてよ。参考にしたいから」

「わかりました。その時の写真などもあるはずなので用意しておきます」

「……そう。楽しみにしてるから」

凜は、どこか満足気だ。

「……プロデューサー！ アタシもその話聞いていい？ 参考にしたいから！」

「——ちよつと、加蓮！」

「いいでしょー、プロデューサー」

「……別に構いませんが」

「やったね！ 一緒に聞こうね、凜」

凜は、ただ黙って加蓮をジッと見ている。

「……プロデューサーさん。これは、何処の物ですか？」

文香が見せるのは、会場と言うよりも城だ。

「これは、ライブの物ではないですね。プロモーションビデオの物です。……確か、それを参考にしたものがこれになります」

「……本物を形にしたんですね」

「はい。当時のプロデューサーが凝り性だったらしく予算が大変だったそうです」

「……でも、素敵ですね。アイドルの為にそこまでするなんて」

「必要であるならばします。文香さんもその時は言ってお下さい。できる限りの事はしますから」

「……ありがとうございます」

文香は、丁寧に頭を下げる。

「これは、外ででしょうか？」

「違いますね。これは、Звезда искусстваенного。人工の星です。プラネタリウムでしょうか？」

「綺麗なんですね」

「そうですね。でも、Подлинная звезда。本物の星の方が、綺麗ですよ

「？」

「それは、本当は外でやるつもりだったものです。ただ、夜遅くにやるといろいろ問題になりますので、ドームの中に満天の星空を造る事にしたんです」

「そんなことまでするんですか？」

「でも、Я счастлив。嬉しいです。私も、星空の下で、

Я хочу Петя。歌いたいです」

「アナスタシアさんがステージをされる時は似たような事をしましょう。それとも、ラブリカの方で新田さんとされますか？」

「……смушаете。悩みます。その時は、プロデューサー、一緒に決めて下さい」

「わかりました。その時は、3人で話しましょう」

それからアイドル達の意見を聞くが、周子からは何も言われない。

「……なにかありましたか？」

「……いろいろあるんだねー」

周子は、資料から目を離さずにいる。

「アイドルによって、曲によって、ステージは変わります。それこそ似たような物はあつたとしても、同じものは一つもありません。その時に一度だけのステージがそこにはありません」

「……一っだけのステージ」

周子は、資料から目を離すと他のアイドル達の方を見る。

「みんな、その為に頑張ってるんだね」

どのような物をするかを話し合っている。自分の考えを、気持ちを少しでも形に出来るように。

「見に来てくれる人達を思えばこそです」

「見に来てくれる人か……」

今、周子は何を思うのだろう。あの時のステージを思い出しているのだろうか？
それは、彼女にしかわからない。

第17話

アイドル達との会議は、美城常務をはじめとした運営側や指導するトレーナー達との会議と並行して何度も執り行われた。アイドル達の意見をまとめるとは、会議でいろいろと言われるのが恒例となった。ただ、幾つかの意見は通った。

例えば、北条加蓮の提案である質の向上だ。彼女は、より高度な物を求めた。元々病気がちで体力の面に不安があった彼女が自らより運動量の激しい物を求めた。確かに最近では、体力面の問題は見られなくなってきた。それでも不安がないわけではない。しかし、加蓮の意志は強くそれを尊重する形になった。

もう一つは、鷺沢文香の提案。こちらは提案と言うよりも挑戦に近い。彼女は、一人でステージの上に立つことを求めた。前の失敗から持ち直したとはいえ、彼女もまた不安のある身だ。ただ、彼女は自分の意思と願いを貫くために美城常務達の居る本会議にまで参加した。そこで、直接意見を言った彼女の考えを美城常務は認める事となった。

「皆すごいね……」

それらの会議に塩見周子は、武内のアシスタントとして参加した。彼女の目には、それらの会議がどう見えたのだろうか？ 誰もが最高のステージを用意しようと考え行動

する、意見する場所に居て何を思うのだろう。予定している会場の下見へと向かう途中の車内で、ポツリと周子は言葉を漏らす。

「ステージは一度だけ。そこに誰もが全力を注ぐ。塩見さんが参加された秋のアイドルフェスティバルやそれ以外のステージも同じように多くの者達の意味があります」
その中には、周子の意思もあつたはずだ。ただ、彼女はそれに気づけていない。

「……あたしにもあつたのかな？」

アイドルになりたくてなつたのではない。だからこそ気づけないのだろう。

「……それを共に探しています」

別に難しい話ではない。ただ、本当の意味で見つけられるのは彼女自身にしかできない。
い。

◇◇◇◇◇

予定している会場へと着く。346プロダクションは、ある程度なら大抵の事を自前で出来る程に大きな会社だ。今回は、346プロダクションのスタッフ達がイベントを行う事になっている。そのため、顔なじみも多く比較的簡単に話が進む。

「今回もよろしくね」

「(こちら)こそよろしくお願いします」

何度も仕事を一緒にしている責任者と現場で落ち合う。今日は、会議を下に作られた草案を見ながら全体的な物を決めていく。もちろん一度だけで決まる事はない。これから何度も会議に提出しては突き返される行為をすることになるだろう。

「それで、そっちはアイドル？ 見た事あるけど？」

「塩見周子さんです。今日は、社会勉強の一環で来ています」

「よろしくお願いします」

周子は、姿勢を正して挨拶する。その動作の一つ一つは、一朝一夕で身につくものではない。

「礼儀正しい子だね。でもよかった、またとつかえたと思ったよー」

わざとらしく小指を立てる。

「違いますよ」

「ははは、だろうね。相変わらず硬いね。まあ、だからこそ信頼もできるけど。案内するから付いてきて」

責任者に付いていき会場内へと入る。

会場内には、既に他のスタッフが作業しており草案を下に点検や確認などを行っている。本番まで時間はあるが、準備を考えると早めに全体の形を決めておきたいのだから。

う。

「今回は、6名。ユニット数は、どれぐらいで行くの？」

「いろいろと試したいですね。既存の物もそうですが、この機会に他の方とも組んで行ってもらいますので」

「つまり決まってるの？ 当日まで決まらないとかは勘弁してくれよ」

「必要とあらばお願いします」

「……相変わらず面倒だな」

「責任者の人に案内を兼ねた説明を受けてから周子と二人で実際のステージを見学する。」

「此処で、皆が歌ったりするんだよね」

周子は、ステージ下から眺めている。まだ何もない殺風景な場所だ。

「そうなりますね。せっかくなので上から上に行きましょう」

「いいの？ 上がっちゃって？」

「立つ場所で見える景色は違います。一緒に行きましょう」

周子連れ、ステージへと上がる。

「……広いよね」

周子の目には、大きく開く景色がある。その景色の中には、ライブに向けて動いてい

る人達の姿もある。

「ええ、とても広いです」

会場の規模としては、周子が経験したことのあるものなかでは特別大きいというわけではない。むしろ普通か小さいぐらいだろう。ただ、人も機材もない静かな場所をステージ上から見るとそう思える。

「あたしも此処で、皆と歌ったり踊ったりしたんだよね？」

周子の目には、当時の景色がある。

「楽しかったよね……本当に……」

そう思う。それは、今もあの時も変わらない。

「でも、今は何にもない……」

生まれて初めて頑張れることがあった。でも、それも終わった。それから、どうも本気になれない。

「本当にあるのかな？ あたしが本気になれる元？」

周子の顔には不安がある。彼女も欲しいのだろう。忘れたくはないのだろう。あの時の気持ち。

「……今日は、この後にレッスンがあります。それを周子さんにも見学してもらいます」言葉を掛ける事はできる。でも、できれば自分で気づいてほしい。



「気を引き締めろ！ 北条！」

「——はいっ！」

「鷺沢！ 動きが悪い！ もう一度頭からやり直せ！」

「——はい」

「橘！ 振り付けは覚えてきたのか！」

「——すみません！」

レッスン場内では、トレーナーの叱咤の檄が飛んでいる。本番まで時間はあるが、彼女達の要望で内容は厳しいものへと変わっている。それこそ今までのままでは達成できない程に高い位置に設定してある。だが、彼女達の表情には後悔はない。自分達が選んだものだから。自分の描く最高のステージを創りたい。その意思だけで何度倒れても立ち上がる。

武内は、隣に居る周子を見る。

彼女は、此処に来てから一言も言葉を発していない。彼女がこの光景を見るのは今日が初めてだ。だからこそ言葉が出ないのだろう。秋のアイドルフェスティバルに向け

て行われた物が厳しいものだったのは当時の資料を見ればわかる。ただ、今回はあの時とは違う。自分達で考えたものを実現するために困難へと自らの意思で立ち向かうと決めた者達の姿だ。彼女達は先に進んでいる。あの時よりも先に。

レッススが終わると、誰も何も言わずに身体を休める。武内と周子が飲み物やタオルを配るが反応はよくない。限界まで体力を使い果たしているのだ。

「——まだ、足りませんね」

冷たいようだが事実だ。武内が評価した彼女達の今を、それぞれが自分の中へかみ砕き受け入れる。

「妥協案も用意はしてあります。私の判断で、そちらに切り替えることにもなりますので忘れないでください」

意地だけでステージを潰させるわけにはいかない。

「——わかってる。言ったのは、アタシだから……」

普段と違い。今の北条加蓮は、なりふり構わずに乱れている。お洒落に気を使う彼女からは程遠い姿だ。

「……まだ、やれます。やらせてください……」

文香は、呼吸を整えるので精一杯なのだろう。一度言葉を口にしたら再び呼吸を整え始める。

「……わかりました。身体の整備が終わりましたら休んでいてください。送る者が来ますので」

返事は返つてこない。でも、それも仕方ない。

◇◇◇◇◇

レッスンの見学も終わり、送迎の仕事へと向かう。今回は、打ち合わせもあるので武内が向かう事になる。まだ、ライブの仕事も残っているので周子も同行する。

「遅いよー」

控室に着くと、収録が終わりだらけている双葉杏が居る。今日は、一人での仕事だ。

「申し訳ありません。遅れたようで」

「そんなんじゃないよ、プロデューサー。杏の世話をするのが仕事なんだからさー。だから、アメ頂戴、アメ。それで許してあげる」

彼女と仲が良い諸星きりから預かっているアメを杏へと渡す。もつとも身体を動かす気もないようなので、口まで運ぶ。

「……それで、そっちは？」

「塩見周子さんです。今、アシスタントをしてもらっています」

「どうも、杏ちゃん」

二人は、秋のアイドルフェスティバルで「面識がある。

「久しぶりだねー。でも、少しは杏にも教えてよ？ アシスタントになったとか知らなかった」

「申し訳ありません。正式なものではありませんので、必要ないと思いました」

「……なんだ、アイドルを辞めたわけじゃないんだ」

杏の言葉が周子の胸を締め付ける。

「あくまでも一時的な物です。それでは、打ち合わせがありますので此処で待っていてください。塩見さん、何かありましたら連絡をお願いします」

武内は、杏の世話を周子に頼み打ち合わせへと向かう。

「……なんで、アシスタントなんて面倒なことしてるの？」

二人きりになった杏は、興味本位で聞く。

「……わかんない。プロデューサーに言われて始めたから」

「面白いの？」

「……初めは面白かったかなー？ でも、今はつまんない……。なんだかモヤモヤする」

武内の下に付いて、ライブの為に動いている。初めは、新しい事を見たり聞いたりして面白かった。でも、今は違う。

「……モヤモヤねー」

杏は、ゆっくりと身体を起こす。と言っても体勢を変えただけでだらけているのは変わらない。

「——アイドルとどっちが面白かった？」

「アイドルと……」

「そう。どっちも経験している人っていないじゃん。だからさ、杏的には今後も考えて聞いているんだけどね。アイドルをいつまでやるかもわかんないし」

どっちが面白い。……考えるまでもないか。

「アイドルの方が面白かったよ」

「そっか……困ったな……」

杏は、アメを口の中で転がしながら考える。

「杏もさ、楽しいんだよね、アイドル。初めは何にもしたくなかったけどさ……そりや今もめんどろだけど。でも……杏は、今の自分が好きだよ？ 周子ちゃんはどう？」

「あたしも好きかな……前の自分は今もつとつまらなかつたから」

「つまらないか……わかんなくもないかな？ でも、それだけじゃないんじゃない？」

「……それ以外にもあるの？」

「……ふーん、だからモヤモヤするんだね」

杏は、自分の荷物をガサゴソ探すと先ほど武内から貰ったアメと同じ物を取り出し、周子に渡す。

「それ、杏の友達がくれたアメ。美味しいからあげるよ」

「……ありがとう」

貰ったアメを口に入れる。

「さっきの言葉、少しだけ訂正するね。杏は、アイドルよりもみんなと居る方が好きなんだ。みんなと一緒に何かをするのがさ。でもね、その為にもアイドルでないといけないんだ、なんでだかわかる？」

周子は、首を横に振る。

「みんなならアイドルを辞めても仲良くしてくれと思う。でもね、アイドルとしてみんなと居るのがいいんだよ。一緒に悩んで、一緒に仕事して、一緒に頑張つて……一緒に何かができたらやっぱり楽しいからね。だから杏は、アイドルをやってるんだ」

言葉を口にする杏の表情は、その姿からは似合わない程にこやかだ。

「周子ちゃんはどう？ ……アイドルが好き？」

杏の言葉にモヤモヤが変わるのを感じる。

「……あたしは……あたしも……」

そうか、好きなんだ。

「好きだと思う」

モヤモヤがわかった。

「皆で、何かするの」

わかったらなんてことはない。

「……そっか、アイドルの自分が好きなんだね。皆と居られる」

だから乗り越えられたんだろう。どんなに大変でも辛くても、皆と共に居られるなら。

「……その顔の方がいいよ？」

控室にある鏡の中に自分が居る。

「でも、アイドルは笑ってないとダメだからね？」

「……そうだね」

鏡の中の私は――

「……今のあたしじゃアイドル失格だ……」

気持ちが悪くなって嬉しいのか安心したのかどうかともわからない。

「本当ならハンカチの一枚でも出すんだろうけどさ、必要なら杏の荷物にあるから使っていいよ？」
もう、自分でできるでしょう？」

「……ありがとう、杏ちゃん」

早く止めたくて服の袖で拭く。今はすぐにでもアイドルに戻りたい。戻ってみんなともう一度頑張りたい。みんなと一緒に居たい。でも、気持ちがあわかった安心からか涙が止まってくれない。それまでのモヤモヤが消えてなくなるまで。

◇◇◇◇◇

打ち合わせの内容により、ライブに関する仕事は中止となった。二人をそのまま女子寮まで送り届けるわけなのだが、杏の頼みで買い物に行く事になった。そのため、周子を女子寮に降ろし、今は二人でいる。

「——今日は、ありがとうございます」

「いいよ、別に」

杏は、携帯ゲームで遊んでいる。

「でもさ、なんでこんな面倒なことしたの？ 直接教えてあげればよかったのに？」

「私では、立場が違います。この事に関しては、アイドルの方でないと伝わらないでしょう」

「ふーん。でもさ、アシスタントにしたのは？」

「それは、立ち位置を変える為です。立つ場所で景色は違って見えますから。傍にある

か、そうでないかで見える物も変わります」

「面倒なことをするんだね。自分が居ない所で、他のアイドル達が頑張ってる姿を見せる為だけにさ。ごくろうなことだね」

「必要であるならばやります。おかげで、彼女の中では現状への不満がありましたから。本来なら居るはずの場所に居られない不満が彼女の中に溜まったはずです」

答えは初めから傍にあった。既に手の中にあった。でも、だからこそ気づけなかった。アイドルを好きになる前から既に持っていたからこそ、アイドルを好きになった後も変わらずにいた。無気力になってしまったのは、その事を知らずに目標を達成し見失ってしまったからだ。自分がアイドルとして、仲間達と共に何かを成し遂げる喜びを自覚する前に。

「……でも、なんで杏に頼んだの?」

「双葉さんが適任だと思った理由は幾つもあります。ただ、双葉さんもアイドルになりたくてなられたわけではありませんから」

「プロデューサーに無理矢理やらされたからね。でも、今は感謝してるよ。今、杏は楽しいからね。めんどくさがりな杏が頑張れるぐらいには、此処の居場所は良いよ」

「そう言ってもらえると嬉しいですね」

「でも、約束は守ってよね?」

「わかっていきます。キャンディアイランドの方で仕事を取るようにします。もちろん、諸星さんや他の方とも。既に幾つかは企画段階ですが話は通っています」

「だったらいいけどさ、杏のアイドルをやるための原動力なんだからちゃんとしてもらわないと困るよ?」

「わかっていきます」

「……それと、もう少しかまってよね? プロデューサーは、杏の世話をしないとイケないんだからさ」

杏は、その時だけゲームから目を離す。自分を変えるきっかけをくれて人を見る為に。

第18話

双葉杏と塩見周子が話し合った次の日。武内の下を訪れた周子にライブへの参加を懇願されることになる。

「——お願いプロデューサー。あたしも皆と一緒にLIVEに出たい！ レッスンも仕事も頑張るからさー！ お願いあたしも参加させてくださいー！」

周子は深々と頭を下げる。

「……わかりました」

予想はしていたので問題はない。問題があるとすればこれからだろう。

「——本当に!?! ありがとう、プロデューサー！ 頑張るよ、あたし！」

周子は喜んでいるが確定したわけではない。

「塩見さん。これから私と一緒に美城常務の所に行ってもらえませんか？ 塩見さんは、私の担当ではありませんのでライブに出す場合は、常務からの許可が必要となります」

「……それがないとダメなの？」

「はい。ただ、おそらく許可は出ると思います」

「……許可が出るなら問題ないよね？　ふうー安心したー。もしダメならどうしようかと思つたよー」

「ですが、今から参加になると本当に大変な事になります。今まで経験したことがないほどに苛烈を極める事になるでしょう。それでも参加されますか？」

「やる。もう決めたからね。シューコちゃんは、一度決めたらやる子だから。その辺は任せてよ」

「……わかりました。では、少しだけ時間を頂きます。美城常務からの許可をもらいに行きますので」

◇◇◇◇◇

「——なるほど。これを行うと？」

美城常務に周子を加えた上での企画書を渡す。周子が加わる可能性も考えて予め製作していたのですぐに提出はできた。

「君が何をしていたかは問わないが、彼女はやる気なのだな？」

「——はい。お願いします」

周子は、常務に頭を下げる。

「問題は無い。やる気のある者を止める理由もない。精々努力し、結果を出してもらいたい」

「——はい。ありがとうございます」

「それでだ。君は、彼女をどうする?」

「……どうする、ですか?」

「——なに、別におかしな事ではないだろう? これだけの事をするのであるならば誰かがサポートをする必要がある。預けているスタッフでもできない事もないが……保証はできない。塩見。君は、それでいいのか?」

「——えっと、それは……」

周子は、チラリと武内を見る。

「担当をプロデューサーにしてもいいということでしょうか?」

「他に適任がいれば別だが?」

「……プロデューサーがいいです」

「そういうことらしいが、どうする?」

「……私としてはかまいません。やらせて頂きます」

「では、この話は以上だ。結果を期待している」

二人は、美城常務の部屋から外に出る。

「……なんだか担当になったみたいだけど……大丈夫？」

「まだ、余裕はありますので問題はありません」

「そっか、なら安心だねー。よろしくね、プロデューサー。シューコちゃんを立派なアイドルにしてよね」

「そうですね。一緒に頑張りましょう」

「……でもさ、あたしが参加するのわかってたんだね」

「塩見さんに協力すると決めた時から考えてはいました」

「……そーか。なるほどねー」

周子は、近づいて武内を下から見上げる。

「これは、クローネの皆が落とされる気持ちもわかるね。頼りにしてるよ」

周子は、そう言うのと楽しそうに先を歩く。

「ほら、早く行こうよ！ これからやらなきゃいけない事がいっぱいあるんだからさー、プロデューサー」

「そうですね」

武内は、先に行く周子を追いかけるように足を進める。ただ、やはり気にはなる。

(なぜ、こんなにも甘いのでしょうか?)

プロジェクト・クローネのプロデューサーになってから美城常務からのあたりが弱

い。それはそれでいいのだが――

(……今は前を向きましょう)

考えてもわからない。今は、先を歩くアイドルを見てみよう。

◇◇◇◇◇

周子を加えてレッスンが行われるようになった。

「疲れたーん。もうむりー」

レッスンを終え、報告を兼ねて武内のオフィスに來た周子は、報告よりも先にソファ―に倒れる。

「周子。報告が先だよ!」

渋谷凜から言葉が飛ぶが周子は、顔だけを武内に向ける。

「あたしを見ればわかるよね、プロデューサー」

「……そうですね」

最初の頃は付いて行き見ていたが大変では済まない内容だった。北条加蓮、鷺沢文香の二人と共にレッスン場から此処まで背中背負って運んだぐらいだ。3人とも限界までやるので心配になる程に。

「まったくだらしがないな、周子は」

「私の肩を借りてる奴のセリフには思えないな」

先にレッスンをやっていた者の意地だろうか？ 神谷奈緒の肩を借りても北条加蓮

は虚勢を張っている。

「……疲れましたー」

「……そうですね」

「……Я хочу отдохнуть」

橘ありすと鷺沢文香は、今にも倒れそうな程にふらついている。アナスタシアに関しては、日本語を話せないぐらいに朦朧としている。

（厳し過ぎますか）

当人達は知らないが、実は必要以上のメニューをこなしている。これに関しては、美城常務からの命令で今後の為に様子を見ながらレベルを上げるように言われている。彼女達は、知らない間に徐々に上の方へと移動しているのだ。おかげで、今度行われるライブだけ見ればあと少しと言ったところだろう。

「……皆さん。もしお辛いようでしたら少し内容を見直しますが？」

「——それって、私達が力不足ってこと？」

凜に睨まれる。

「——それはダメ。プロデューサーでも、それだけは許さないからね」
加蓮も凜に続く。

「あたしもやるって決めたからさー。それはなしのほーこーで」

「私も……せつかくここまでやってるから今更変えるのはやだな」

周子も奈緒も反対のようだ。

「……私は、大丈夫です」

「私もこの程度なら」

「Не сдавайтесь。諦めません」

文香、あります、アナスタシアも同じ意見だ。

「……そうですか。では、もう言いません。頑張りましょう」

各々からライブへと向けた声が出るが、内緒に少しだけ変えておくとする。まだ彼女達の道は遥か遠くまで続いているのだから。

◇◇◇◇◇

「それで、最近調子はどうなの?」

「まーまーかな」

双葉杏と周子は、武内Pのオフィスでだらけている。周子は、漫画を。杏は、ゲーム機を手持っている。

「ふふっ、創世の日は近い（あと少しで完成です）」

その横では、神崎蘭子がスケッチブックに絵を描いている。

「ねー、杏ちゃん。かな子ちゃんて和菓子とかは作れないの？」

「どうかなー。お汁粉とかなら作れるんじゃない？」

「クッキーも美味しいけど和菓子が食べたいな」

「隣に居ると思うよ」

「うーん、めんどくさいなー」

今日は、個人でやっている杏と蘭子が此処を使う事になっている。周子は、元から中に居た。静かなので寝るには最適なのだそうだ。

「——できた！」

蘭子は、描き終わったのでプロデューサーの下へと持って行く。

「我が友よ！」

「……なんででしょうか？」

「古き都に住む東方の禍々しき妖狐（周子ちゃんをイメージしました）」

蘭子が描いたのは、今度の周子のライブの衣装だ。周子にどんな衣装を着たいか聞い

たところ、同じプロジェクト・クローネの速水奏から蘭子が自分の衣装を考えていると聞いていた。それで、丁度傍に居たので頼んだのだ。

「……狐ですか？」

蘭子は、うんうんと頷く。

「蘭子ちゃんから見た見たシユーコちゃんのイメージは、狐かー。コンコーン。和菓子とお茶がほしいコーン」

「そこは、油揚げにしておけば？」

「……良いと思います。先方に送っても？」

「ほんとに？ やったー！」

蘭子は、満面の笑みで喜ぶ。

「ねーあたしは見れないの？」

「それは、ダメ！ 我がグリモワールは、選ばれし資格者だけが英知を授けられる（見てもいいのは、プロデューサーだけなんです！）」

「残念だなー、まーいつか。できたら見れるし」

周子がクツキーに手を伸ばした時、部屋の扉が急に勢いよく開く。

「——プロデューサーさん！」

橘ありますが手に何かを持って武内の下へと駆ける。

「見て下さい！」

「これは、イチゴ……いえ、チョコレートですか？」

ありますが持ってきたお皿の上には、ピンク色のチョコで作られたイチゴがある。

「この前、文香さんと一緒にかな子さん達と作ったんです。それで……プロデューサーさんに食べてほしくて持ってきました」

「あー、そう言えばかな子ちゃんが言ってたなー」

「あたしの分とかあるん？」

「あつちにあるんじゃないかな？」

「甘美なる一時（甘くて美味しかったです！）」

「じゃあ、めんどーだけど行くかー」

周子は、渋々隣の部屋へと行く。

「それでは、頂きます」

ありすに期待の目で見られながらイチゴのチョコを口に運ぶ。

「……中にイチゴが入っているのですね」

チョコレートフォンデュで、果物を使う場合があるがそれに近い味がする。ただ、チョコもイチゴの甘さがあるので二つのイチゴの味が口に広がる。

「最初は、イチゴのチョコレートで何か作る予定だったんですけど、かな子さんがイチゴ

を中に入れてみたらって言ってくれたんです！」

「チョコレートでコーティングする物がありますがこれもそうなんですね。美味しいですよ」

「——本当ですか!?! やりました!」

ありすは、満面の笑みで喜んでくれる。

「すみません、プロデューサーさん。文香さんとかな子さんに報告に行かないといけませんので、また後で来ますね!」

隣に居るのであろう鷺沢文香と三村かな子の下へと来た時と同じように急いで戻っていく。

「なんだか賑やかだねー」

「そうですね」

「でも隣は、もつと賑やかだよ。最近じゃ、クローネの人達も居るからね。そろそろ引越したいよね。杏は、ベッドとかほしいし」

「引越ですか……」

プロジェクト・クローネのプロデューサーになる時に元の場所へと戻る事になった。自分とシンデレラ・プロジェクトのアイドル達を分ける為に。

「流石に難しいですね」

「じゃあ、仕方ないね。こっちで休もう。おやすみ」

杏は、ゲームを止めて横になる。

(賑やかですか)

仕事の量も増えたが、それと同じように担当のアイドルも増えてきた。彼女達が問題なくアイドルをやるように考えて行かなければいけない。

第19話

「これは、由々しき事態だよー！」

「由々しき事態なんだよー！」

大槻唯と宮本フレデリカは、真剣な表情で速水奏に抗議する。

「……何が？」

いきなりプロジェクト・クローネの待機場所に二人で来たと思つたら、こんな感じになった。別に二人もクローネの一員なので問題はないが、面倒事なんだと思う。

「カナデちゃん、そんなんじやダメだよー！ 見てよ、ほら」

唯が部屋の中を見るように促す。

「……何かあるの？」

特に普段と変わりが無い。

「あるんじやなくて、ないんだよー！ たまに顔出すと誰も居ない時もあるんだよー！」

「この前なんてー、フレちゃんといちちゃんしか居なかつたんだよー」

二人が言いたいことはわかった。

「……つまり、寂しいの？」

「そうそう！ 遊びに来たのに誰も居ないとか、ゆいがまんできない！」

「アタシも遊びたい！」

「そうは言っても無理な話よ？ 最近、皆忙しくなってきたもの。それは、貴方達も同じでしょう？」

「むー、確かにそうだけど……」

「どうするの？ もう終わっちゃおうよー？」

「えー、せつかくカナデちゃんが居るから一緒に遊びたい！」

唯とフレデリカは、一生懸命考え始める。

「ゆい、良い事思いついた！」

「わーお！ 教えて〜」

「あっちの方に行けばいいんだ！ みんな行ってるみたいだし、大丈夫っしょー」

「うーん、ありかもねー。じゃあ、いこっか☆」

「……迷惑掛けないようにね」

奏は、二人にそう言葉を掛け、読んでいた雑誌に戻ろうとするがジツと見られる。

「……えっ？ カナデちゃんは、行かないの？」

「うそ〜、いつしよに行こうよ〜楽しいよ？」

「特に行く理由もないから」

「理由かー。フレちゃん、なにかある？」

フレデリカは、わざとらしく悩んでみる。

「フレちゃん良い事思いついたよ！」

「ホントに？ やったね、フレちゃん！」

「いえーい！」

二人は、ハイタッチを交わす。

「……何を思いついたの？」

「あつちとこつちで勝負しよー。シンデレラとクローネで☆」

「いいね、おもしろそー！ カナちゃんもクローネで参加しようよー？ ねーってばー」

「……勝負をするって、何をするの？」

「んー、普通に勝負してもおもしろいけど、もう一つほしいのかー」

「カナちゃんよくばりさんだねー」

唯とフレデリカは、更に考え込む。

「だったら、賭けちゃおうよー！」

唯が何かを思いついたようだ。

「たしかさー、プロデューサーさんがどっちも担当してるでしょー？ それを賭けて戦うなんておもしろくない？ ミカちゃんやキラリちゃんの話だとすごそうな感じだし」

彼女が言うミカとキラリは、アイドル城ヶ崎美嘉と諸星きらりの事である。3人は、他でよく仕事をしたり、遊んだりしている。

「アタシも聞いた事あるよ！ シューコちゃんが話してたかな？ ……うん、話してたよ、たぶん。楽しいって！」

「——ちよつと、貴方達!?!」

奏の言葉も聞かずに二人は、シンデレラ・プロジェクトの下へと向かう。

◇◇◇◇◇

「——と言う訳で、勝負に来たよー！」

「しようぶー！ しようぶー！」

唯とフレデリカは、いきなり扉を開けるとシンデレラ・プロジェクトに勝負を申し込む。

「……よくわかんないけど——勝負を挑まれた!?! どうしよう！ しまむー？」

「——えっ!?! えつと……頑張ります！ ……よくわかりませんが、頑張ります！」

一番近くに居た本田未央と島村卯月がよくわからないがソファァーから立ち上がり向かい合う。

「おっ!? どうやら、やる気みたいだね」

「フフン! フレちゃんとういちゃんコンビに勝とうだなんて〜1万年は早いね!」

「——待つにや!」

前川みくが間に割って入る。

「いきなり意味がわかんないにや! 説明を求めるとにや!」

「……説明?」

「……勝負の?」

「——えっ? ないの?」

みくの言葉に二人は、困った顔をする。

「——二人とも、待って……」

二人を追いかけてきた奏がやつと追いつく。

「やったにや! 常識人が来てくれたにや!」

「——えっ? どうかしたの?」

奏は、みくに手を取って歓迎され困惑している。



奏が、二人の代わりに説明をして状況を理解した。

「つまり、プロデューサーを賭けて勝負したいと？」

「それは、ダメです！ プロデューサーを賭けに使っちゃ！」

「えー、良いアイディアだと思ったのにー」

「残念だねー」

二人は、計画が失敗して拗ねる。

「もう、帰りましょう？ 確か、差し入れにマカロンを貰ったはずだから」

「マカロンか……ん？」

唯の目にテーブルに置かれているお菓子の数々が映る。

「お菓子のバイキングでもやってるの？ フレちゃんもお呼ばれしていい？」

「——えっと、いいですよ。どうぞ、食べてみてください」

お菓子を作った一人であろう三村かな子が二人を誘う。

「おおっ！ やったじゃん！ マカロンは、今度にしよう！」

「お菓子のまんかいなんたらやないかい、だね☆」

「——ちよつと、二人とも！」

奏の言葉も聞かずに空いている席に唯とフレデリカは座る。

「紅茶ですけど、飲みますか？」

かな子の隣に座っていた緒方智絵里が紅茶の入れ物に手を掛ける。

「砂糖甘々で〜」

「アタシも〜」

「わかりました。待つててくださいね」

智絵里は、嫌な顔もせず二人の分を淹れ始める。

「……もう、帰っていいかしら?」

「——えっ!? 二人を置いて帰っちゃうの?」

「基本的には無害なはずだから。ごめんなさい、少し相手をしてあげて。飽きたら帰ると思うから」

「……大変なんですわね」

卯月の言葉が嬉しいような、悲しいような。

「そうね……楽しいのだけど、少しね。あとは、任せていい?」

「……もう居着いちゃってるからいいよ」

未央の言葉通り、唯とフレデリカはお菓子を選びながら食べている。

「これって、手作りなんだー。凄すぎだねーカナコちゃんはー。ねえ、キラリちゃんのオススメとかある?」

「きらりんのオススメは、これだよお。甘くてすっごく美味しくてはっぴはっぴにな

れるにいい☆」

「これと、これもキープしーとこ」

「ああ、ズルいー。アタシもキープするー」

「みりあもー」

フレデリカと競うように城ヶ崎莉嘉と赤城みりあもお菓子を自分のお皿に取り始める。

「……そうみたいね。じゃあ、何かあつたらその時は連絡して」

奏は、疲れたように元来た道を帰っていく。

「なんだか大変そうにや」

「……うちも変わんない気はするけどね」

「そうかにや?」

みくの言葉にどう返すか悩む。

「まあ、いいじゃん。それよりも、シンデレラ・プロジェクト流のもてなしってやつを見せてあげないとね。島村卯月隊員!」

「はっ、はいっ!」

「あの二人をもてなしして、シンデレラ・プロジェクトの力をみせるんだ!」

「——わかりました! 頑張ってもてなします!」

卯月は、頑張ってもてなす為に既にお菓子争奪戦にまで発展している戦場へと向かう。

「未央ちゃん……」

「しまむーは、試練を乗り越えて強くなるんだよ、うんうん」

新しく参加した卯月を加え、他のシンデレラ・プロジェクトのアイドルも参加し始めている戦いは、渋谷凪がレッスンを終えて帰るまで続くことになる。

第20話

「しまむー、私は今重要な事に気づいた」

「どうしたの、未央ちゃん？」

本田未央は、シンデレラ・プロジェクトの待機場所に来るまでに買ってきたポツキーをタバコのように啜えながら、同じくポツキーを食べている島村卯月に視線を送る。

「こうしている間にも、しぶりんを含めトライアドプリムのみんなも成長して行っているー！」

加えていたポツキーをパキリと折る。

「……そうですね」

「そうですねじゃないよ、しまむー！ 最近、ライブに向けて忙しいからって合同でレッスンできてないんだよ？」

「でも、私達もやってますよ？ プロデューサーさんからも指導を受けてますし」

「……それもそうなんだけど」

未央は、何かが引つ掛かる感じがしてモヤモヤする。最近、ニュージエネレーションでレッスンをしているとそのモヤモヤが強まる。

「最近、大変そーだもんねー」

「ねー。フレちゃんにはムリそー」

最近、暇な時に来るようになった大槻唯と宮本フレデリカが二人の話に加わる。この二人は、この前のもてなしを気に入ったようだ。

「ねえ、唯ちゃんとフレちゃんは、どんな状況か知らないの？」

「んー、いつも疲れてる感じかなー。それ取つてよ」

「はい、あげる。そつだよねー、クタクタさんだよねー」

二人は、興味なさげに雑誌を読んでいる。

「奏さんは、何か知っていますか？」

「——私？」

卯月に声を掛けられた速水奏は、雑誌を閉じて考える。一応、奏は二人の保護者役として来ている。決して、他のプロジェクト・クローネのメンバーがレッスンで居なくなり、二人も居なくなると一人で寂しくなるからではない。(本人談)

「……そうね。文香から聞いた話だと相当厳しいそうよ？ それこそ、まともなのが凜ぐらいなもので。こういう言い方もどうかと思うけど、周子はああ見えて意外と真面目にレッスンはしていたから少し疑問はあるわ」

「しづりん以外本当に大変そーだもんね」

「アーニヤちゃんも疲れてました」

「なんだか卯月まで心配になってきた。せつかく追いついてきたのにまた離され、置いて行かれるのではないかと。」

「見に行くのって大丈夫かな？　こう、邪魔しない感じに入り口の小窓からさ」

未央の提案に卯月は心を揺り動かされる。

「それなら、私も少し見て見たいわね。正直な所、彼が行っているレッスンは気になるから」

「彼って、プロデューサー？」

「ええ、私は受けた事がないから」

「じゃあ、一緒に見に行こう。しまむーは、どうする？」

「……私も行きます。邪魔をしないように気を付けて」

「よし！　じゃあ、行くとしよう」

未央、卯月、奏の三人は、現在レッスンが行われているであろう場所へと向かう。

◇◇◇◇◇

346プロダクションにあるレッスン場の一つへと来る。此処までなら誰でも来ら

れるが、中に入るとなると別だ。

「なんだか緊張しますね」

変に緊張している卯月を見てみると、二人まで緊張してくる。

「島村さん。そこまで意識しなくてもいいと思うわ」

「しまむーが緊張すると、こっちまで緊張してくるよー」

「ごめんなさい。でも、なんかこういうのってドキドキしません？」

「隠れて覗き見るから？」

「……奏さんが言うとなんだか別の意味でドキドキするなー」

「あらっ？ 本田さんは、何を想像したの？」

「……そ、それは、なんでもないよ！ ホントに！」

「未央ちゃん、顔が真っ赤です」

いつもはからかう側だからか、奏にからかわれて未央はテンパる。

「ふふっ、可愛いわね。本田さんは」

「……からかわないでよー」

「……未央ちゃんがなんだからしおらしいです。奏さんには勝てそうもないです」

勢いの減った未央を最後尾に目的の場所へと着いた。

「確か、此処ね」

奏の案内で目的の場所に着いたわけだが、扉に付いている小窓はそれほど大きくないので一人ずつしか見られない。

「誰から見るの？ 私は、後でいいけど」

「未央ちゃんから見ますか？」

「えっ!?! 私から？」

「未央ちゃんが最初に言いましたから」

「……そうだったね。じゃあ、先に見るね」

未央は、小窓の近くに寄り、少し高めの所にあるので背伸びをして覗く。

「どうですか？」

「——ちよつと待ってて」

未央は、中を覗く。

「……未央ちゃん？」

未央が中を覗いて少し経ったが、未央は何も言わない。ただ、小窓の中を覗いている。

「どうかしたの？」

奏も気になって声を掛ける。

「……自分で見た方がいいかもしれない」

未央はそれだけ言うと、場所を譲るようにその場から離れる。

「……島村さん。次は、どうする？ さっきも言ったけど、私は最後でいいわ」

「……私は——」

中を見た未央は、何かを考えるように口を開くことがない。気になる。あの中で何が
行われているのか……でも、どこか見ない方がいいのではと思う。

「——見ます。その為に来たんです」

覚悟を決める。自分も未央のように何かを感じるとは思う。それでも、見なければい
けない気がする。

「……どう？」

未央と同じように小窓を覗く卯月も、声を掛けてもなかなか反応しない。まるで、中
の何かに心を奪われているようだ。

「……未央ちゃんの気持ちはわかりました」

卯月もその場から離れる。

（……何かあるのね）

ただ黙って、しかし何か考えている二人の様子を見るとそう思える。

「……来なかつた方がよかつたかしら」

今更だがそう思う。でも、ここで引くこともできない。2人が見たものが気にならな
いわけではないから。

(……そう——)

小窓から見える景色。それは——

◇◇◇◇◇

三人は、レッスンが終わり、プロジェクト・クローネの人間が武内の下に報告が終わったのを見計らって訪ねる事にした。

「……どうかしましたか？」

神妙な面持ちの3人を見ると、そう言葉が出る。

「プロデューサー、一つだけ教えて。今の私達と、しぶりん達はどれぐらい差が開いているの？」

「それは、どういうことですか？」

「ごめんなさい、プロデューサーさん。今日のレッスン……覗いてしまいました」

卯月の言葉で理解する。彼女達は、あれを、今の彼女達を見てしまったようだ。

「しぶりんとは、ニュージエネレーションでも一緒にやるけどあんなのは見た事がなかった。もしかして、私達と居る時は手を抜いてるの？」

未央の考えに卯月も同意見なのだろう。未央が感じたモヤモヤは、今日のレッスンを

見てわかった。

「私も少し聞きたいわ。周子達とは同じ時期からレッスンを始めているけど、私は今の彼女達を知らないわ」

奏も見た上で判断しているのだろう。

「……………」だけの話でお願いします」

隠しても逆効果だと思ひ話すことにする。

「彼女達は、美城常務が考えたプログラムを参考にレッスンを行っています。表向きは、次のライブの為ですが中身は違います」

周子のライブ参加の許可が簡単に下りた理由はここにある。

「今、彼女達のレッスンをしているトレーナーは美城常務がアメリカから連れて来られた方です。346プロダクションの基準で言えば、最高ランクのマスタートレーナーの方です」

346プロダクションには、指導をするトレーナーにランクが付いている。最低ランクから、ルーキートレーナー、一般トレーナー、ベテラントレーナー、マスタートレーナーの順だ。マスタートレーナーは、数えるだけしかおらず担当するアイドルはそれに相応しいだけの実力者になる。

「確か、有名なアイドル達を指導する人の事だよな？　なんでそんな人がレッスンを

「やってるの?」

「本来ならありえない話です。マスタートレナーを付ける場合は、実力によって決められます。新人に付けることはまずありません。ですが、美城常務の判断で付けることになりました。常務の持つ権力なら可能ですから」

「でも、私は初めて見たわ。プロジェクト・クローネのアイドルなのに」

奏の疑問もわかる。

「先ほども言いましたが、美城常務が考えたプログラムを参考にしています。そのため、私が常務の代わりに内容を判断しています。その理由から、速水さんにはマスタートレナーが付いていません」

「……つまり、貴方の下に居ないと受けられないのね?」

「そうなります」

その言葉を聞くと、奏の顔つきが変わる。

「——私も受けたいんだけど」

力の籠る声からは、彼女の意志を感じる。

「……可能ではありませんが、今は無理です。ご覧になられたのならわかると思いますが、今の彼女達とは差がありますので邪魔になります。ニュージエネレーションなどのように別の物であるのなら問題はありませんが、今の段階での途中参加は遠慮願いま

す」

厳しい言葉だが仕方がない。彼女達は、ここまで血の滲むような努力と意地でやって来た。今では止める事もなく、細かく内容を見直して少しでも負担を調整するぐらいだ。

「……私は、わかったわ。今度のライブが終わったらまた話しましょう」

奏は、未央と卯月を残して先に出る。邪魔にならないように。

「なんで、教えてくれなかったの？」

「申し訳ありません。教える事はできませんでした。しかし、何かしてあげる事が私にはできません。今、ニューージェネレーションに付いてもらっている方は、ベテラントレーナーになります。私の頼みを聞いて、特別にやって頂いている方です。私の持つ力では、ここが限界になります」

本来なら新人である彼女達には、一般トレーナーが担当することになっている。ベテラントレーナーもそれほど数が居る訳ではない。

「少しでもできませんか？ 頑張りますから」

卯月の言葉に心が揺り動かされるがそうもいかない。

「私だけの力でできるのならばそうしたいです。しかし、最終的な判断は常務が下します。私の知らない知識を下にしていますので独断でやるには危険があると思います。」

限界を見極めて行いうレッスンですので、マスタートレーナー、常務が欠けてはできません」

2人もわからないわけではない。ただ、心が納得してくれない。

「少しだけ待っていてくれませんか？ 私もできる限りの事はします。それまでは、今考えられる最高のレッスンを受けて下さい。今行っているものも決して価値の低いものではありません。少しづつかもしれないませんが確実に前に踏み出している事は、お二人ならご理解いただけていると思います」

「……私は……私は、プロデューサーさんの事を信じてます。だから、今を頑張ります……頑張ります！」

「……そうだよね。今できる事をやるだけだよね。——でも、一つだけ約束して、私達のことをちゃんと見るって。そしたら頑張れるから、お願い」

「……私は、シンデレラ・プロジェクトのプロデューサーです。本田さんも島村さんもそうですが、他の方々も最後まで見届けます。歩き続ける限り」

「……だったたら、安心だね。でも、何か頂戴。さすがにこのままだと気がすまないから」

「はい。何でもしますから！」

「……無理をしても結果に繋がるとは限りません。場合によっては、怪我など取り返し

のつかない事になるかもしれません。トレーナーの方と話して他にできる事がないか考えてみます。少しでも時間を下さい」

「わかった。待つてるからね」

「お願いします！ プロデューサーさん」

先を歩こうとするアイドルの為に居るのが自分達プロデューサーだ。

「待っていてください。必ず皆さんを今以上に歩かせる方法を探してみせます」

なにができるかわからない。そもそもできる物があるかもわからない。それでも、進もうとする限りはその手助けをしたい。

◇◇◇◇◇

「——報告は以上です」

マスタートレーナーは、美城常務にレッスン内容の報告を済ませる。レッスンの時に取りついていたデータと映像を渡して。

「……なるほど。順調のようだな」

「はい。ですが、彼は何処から？ 主要な者は、今は空いていないはずですが？」

「……彼は、魔法使いの一人だ。最初の舞踏会を創りだした内の」

「……最初の舞踏会? ……今も続く舞踏会ですか? ……なるほど、なら納得はできません。彼は、良い目を持っています。彼女達の限界を見極めるだけなら今の私よりも上かもしれません」

「そうでなくては困る。今は、離れてはいるが彼らと共に居た。その時に学んだものは、今も彼の中にあるはずだ。一度の失敗で、潰すには惜しいとは思わないか?」

「そうですね。では、期待させてもらいます。それでは——」

マストレは、立ち去る前に一つ思い出す。

「——そう言えば、アイドル達が居たそうです。聞いた話ですが、本田未央、島村卯月、速水奏の3人が。既にレッススが終わった後にレッスン場近く居たそうです」

「……そうか、報告、苦勞」

「——失礼します」

マストレは、頭を下げてから部屋の外へと出て行く。

「速水奏か……」

他の二人はともかく、彼女の事だから彼の下へ行く事になるだろう。彼女もまた、誇りのある人間だ。

「魔法使いの一人だった君の腕を見せてもらおう」

第21話

「……ダメですね」

専門書や資料を読み漁り、トレーナーや他のプロデューサー達からも話を聞いているが何も浮かばない。そもそも専門性が高過ぎて理解すら怪しい部分がある。

「——プロデューサーさん。今、大丈夫ですか？」

「——失礼します」

扉の叩く音が聞こえ、新田美波とアナスタシアの二人が部屋を訪れる。

「どうかされましたか？」

「少し、お話をいいですか？」

「かまいませんが」

どうやら話があるようなのでソファの方へ移動し、話を始める。

「それで、お話とは？」

「……未央ちゃん達にお話を聞きました。様子がいつもと違う気がして。それで、凛ちゃんやアーニヤちゃん達の事を聞いたんです」

「ЭТО правда。二人から聞いたことは、本当なんですか？」

「……本当です」

当事者であるアナスタシアが居る以上、隠すのは意味がない。ただ、シンデレラ・プロジェクトの中でお互いの心境の変化に気づけているのは嬉しい事だ。

「アナスタシアさんもそうですが、今行われているものは既にライブのレッスンではありません。もちろん、ダンスやボーカルなどは本番まで調整を行ってはいきません。全体的に合わせないと意味がありませんから。ただ、それ以外の部分に関しては、今後の事を考えてのレベルアップを考えています」

「今後ですか？」

「今回は、宣伝を兼ねた物を行います。結果次第では、更にライブなどを行っていきま
す。より規模も質も高い物を」

今度行われるライブは、メディアやスポンサーに向けて行われる物だ。評判が良ければ、宣伝が行われ、資金と支援を受けて大規模なライブイベントなども行えるようになる。これは、別に目的ではない。次へと繋げるための通過点でしかない。

「そんな事になっていたのですか。Я не знаю。知りませんでした」

「それもそのはずです。今行っているプログラムは、そう言ったものですから。レッスンにも幾つか種類があります。明確に目的を定め、それを確実にこなしていくもの。目標は、あくまでも基準として様子を見て増やしていくもの。今回行われているのは、後

者の方になります。が明確な目標はありません。皆さんの様子を見ながら内容を絶えず変えて調整して行くものになります」

個人差と言うものがある。ある者は、上半身が疲れ果てる。ある者は、下半身が疲れ果てる。この場合、複数によるレッスンは行えない。だが、前者は下半身であるならばレッスンが行える。後者は、上半身なら行える。限界まで状態を見抜き、無駄をなくすように調整して行われている。

「皆さんの持つ全てを鍛え上げる。それが、今行われているプログラムになります。成果は早く出るかもしれませんが、その分危険でもあります。知り合いにも聞いては見ましたが、知識や技術もそうですが経験が大事だという事です。限界を見極めて行うという事は、それに相応しいだけの人間でなければできません。残念ながら、今の私では力が足りません」

だからこそ打つ手がない。知識や技術もそうだが経験を積む手段がない。今も積めていなくはないが、理解をしながらやっているわけではない。美城常務やマスタートレーナーに言われながらやっているに過ぎない。

「なにか、私達にできることはありますか？ 未央ちゃんや卯月ちゃんの力になりました。それに、私の為にも」

「おねがいます。プロデューサー」

「……考えている事はあります。ただ、解決策ではありません。実験と言う言い方は不適切だとは思いますが、シンデレラ・プロジェクトから何人か選り私の方でレッスンをしてみたいと思います」

「実験ですか？」

「はい。それでなんですが……新田さんをその中の一人にと考えています」

「私ですか？ ……私は、それでかまいません。プロデューサーさんを信じていますから」

「Спасибо。私も、お願いします」

「アナスタシアさんは、申し訳ありませんが今のまままでお願いします。これ以上の負担は、本来の目的であるライブに影響が出ます」

「そうですか……残念です」

「ありがとう、アーニヤちゃん。アーニヤちゃんの気持ちは、私が引き継ぐからね」

「美波……спасибо。ありがとう、美波」

アナスタシアが美波の手を取り、見つめ合う。二人の仲が良さそうで安心する。アナスタシアがプロジェクト・クローネに参加してから、美波は一人で頑張る事が多くなつた。二人でいる時間も少なくなつた。でも、こうして信頼できる仲間のままでいてくれる。

「プロデューサーさん。他に参加する人は、決まっているんですか？」

「体力面などから考えて、諸星きらり、前川みくの二人を考えています。3人ぐらいが見られる限界だと思います」

「未央ちゃんや卯月ちゃんは？」

「二人は、ニュージエネレーションの方で考えて行こうと思います。既にお二人には個別にレッスンも行っていますので、ユニットとしての底上げをと考えています。これ以上の負担は、正直なところを言いますと避けたいのが実情です。無理をしても結果に繋がるわけではありませんので。二人に関しては、話し合いながら決めていく事にします」

美波とアナスタシアは。特に美波に関しては、シンデレラ・プロジェクトのリーダーとして考えてから自分の中で納得しようだ。

「……わかりました。未央ちゃんや卯月ちゃんもそれで納得してくれると思います。私も、プロデューサーさんを信じて行こうと思います。だから、一緒に頑張りましょう！」
「Давай те сделаем наше самое лучшее。頑張りましょう、みんな一緒に」

「そうですね。此処で立ち止まるわけにはいきません。内容がまとまり次第正式に発表したいと思います」

一人では進めなくても、他の誰かが共に歩いてくれる。それだけで進める気がする。

◇◇◇◇◇

プロジェクト・クローネのレッスンは、それぞれの送迎を行う。普段は、スタッフに頼んだりするのだが今日は、渋谷凖から直接指名があった。

「単刀直入で聞くけど、二人になにかあった？」

以前の事があるので、凖は気になっていたことを聞く。

「速水奏さんと共に皆さんのレッスンを見たそうです」

「……そう。それで、なんで様子が変なの？ あの二人って、隠し事とか向いてないよね。卯月なんて、あからさまに動揺してたもん」

どうやら凖と話す時に言葉遣いや動作に表れるらしい。ついでに言えば、未央も挙動がおかしくなるそうだ。

「現在行われているレッスンは、既にライブの為だけの物ではありません。次を見越しての物になっています。本当は、ライブが始まる前にこちらから言う予定でした。ですが、状況が変わりましたので近いうちにプロジェクト・クローネの皆さんに言う事になります」

「……ふーん。通りでキツイと思った。明らかにニュージエネレーションよりも負担が大きいもんね」

二人の話からも凧は、二人に比べると余裕で行っていたのだろう。だからこそ違和感を覚えたのだろう。

「渋谷さんは、おそらくですが最もレベルが上がっています。シンデレラ・プロジェクト、プロジェクト・クローネの中で一番だと思っています」

「……そっか」

凧は、喜ぶわけではなく考え込む。

「自分が成長してると言われるのは嬉しい。でも、なんだか……寂しいかな？　なんなんだろうね、この気持ちは」

「距離を感じているのかもしれませんが。今までは、同じ歩幅で隣を歩いていました。ですが、今は先を歩いています。距離が離れば離れる程、その感情は強くなるのだと思います」

凧は、すぐに言葉を返すことなく考え込む。今、アイドル渋谷凧は、他の誰よりも先を歩いている。たった一人で。

「……プロデューサーは、傍に居てくれるんだよね？」

「はい。傍に居ます」

「……そっか、だったらいいや。一人じゃないなら寂しくない。皆が来るまで待てるよ。プロデューサー。私は、先を行くよ。後から来てくれるって信じてるからね」

「……そうですね。私も皆さんなら必ず追いつけると思います」

「……でも、それだと先を歩いていた私って、恥ずかしくない？　なんだかうサギとカメみたいじゃん」

「渋谷さんは、休まれるのですか？」

「そんなわけない。最後まで走り切るよ、必ず」

今の凜は、自信に満ちている。自分に対しても、仲間達に対しても。

「私も置いて行かれないようにします」

アイドル渋谷凜の成長の早さは、予想を超える程に早い。このままだと誰も追いつけなくなるかもしれない。自分も含めて。

(戻ったらもう一度見直しましょう)

少しでも力を付けよう。それが、プロデューサーとして傍に居るために必要な物だ。

第22話

武内が担当し、ライブに参加するプロジェクト・クローネのアイドル達に現状の説明をする。

「……つまり、アタシ達は知らない間に成長してたつてことなの？」

「なんだか実感がないな？ レッスン後は、いつもクタクタな記憶しかないんだけど？」

北条加蓮と神谷奈緒は武内の言葉に疑問を浮かべる。

「基本的にプログラムは、皆さんに疲れが見え始めた頃から開始されます。そのため、実感が湧きにくいのだと思います。トレーナーの方から指示が多く出始めた時がその開始になります」

「……んー、よくわかんない。なんかそんな感じもするような？ しないような？」

「……私も疲れていてその辺りはわかりません」

「私も記憶があいまいで」

塩見周子、鷺沢文香、橘ありすもレッスン中の記憶がはつきりしない。疲れにより判断が難しくなっている頃に行われるため記憶が曖昧なのだろう。

「その辺りが皆さんの限界近くだという事です。その辺りからこちらの判断でプラグラ

ムに基づき行っています。本日は、本番と同じ形式で行おうと思います。その方がわかって頂けると思いますので」

これから予定しているプログラム通りに疑似ライブを行ってもらう。今の彼女達なら多少の変更などもできるので、これから撮る彼女達の一部始終は美城常務などが参加する会議に提出することになる。場合によっては、更なる内容の追加も考えられる。より素晴らしいライブを行うために。

「二ついい？ 本番と同じようにすると出番がない時があるんだけど？」

渋谷凪から質問が出る。

「今日は、皆さんに現状を知ってもらいたいと思います。出番の無い方は、他の方が行っているのを見て下さい。その方がわかりますので。他に質問がないのでしたら始めて行きます」

ライブでの予定は以下の通りだ。初めに渋谷凪、北条加蓮、神谷奈緒、鷺沢文香、橘あす、アナスタシア、塩見周子の7人でライブが始まる。予定では、2曲行われる予定だが時間的な余裕があるので追加もいかもしれない。それから、既存のユニットで行う。最後には、要望があつた文香のソロ。既存以外でのユニットやソロを行う予定だ。もちろんライブの締めで7人全員でのステージが行われる。

基本的に渋谷凪が最も多く出番がある。彼女には、文香、加蓮、あすの体力調整と

しての役割がある。全員とユニットを組んでもらい、尚且つソロも用意されている。奈緒、周子も凜と同じように出番が多めになる。ソロはないが、全員とのユニットがある。アナスタシアは、バランスよくユニット、ソロが配置されている。凜の次に全体の調整役を担ってもらうことになる。文香に関しては、出番はできるだけ減らしソロに備えてもらう事になる。彼女の要望を叶える為にも余裕を残す形で送り出したい。加蓮に関しては、美城常務の方からの指示でソロを追加されている。本人が望む質の向上の一環との事だ。本人も了承しているので問題はない。あるとするなら体力面だが、今の加蓮なら特に心配はしていない。ありすに関しては、年齢的に体力が多くはないので出番は少ない。その代わり、立ち位置は中央になるので丁寧な動きが求められる。

◇◇◇◇◇

本番さながらの内容で通しを行った。服装は、レッスンの為に動きやすい服装だ。観客も居ないので精神的負担も少ないだろう。ただ、息は切れ、肩を揺らしてはいるものの表情には余裕が見える。

「……本当に成長してるんだ……アタシ……」

加蓮は、自分の胸に手をあてる。心臓が激しく動くのを感じる、息も激しい。でも、ふ

らつく事などはない。

「……不思議なもんだな？　いつもならもうダメって感じなのに」

奈緒も不思議そうに身体を動かして確認している。彼女は、凜に続き体力がある方なので加蓮以上に不思議に思っているはずだ。

「手を抜いたわけじゃないんだよねー？　ふっしぎだなー？」

周子も奈緒と同じように身体を伸ばしながら確認している。どうやら不完全燃焼のよう欲求不満に思える。

「……でも、これなら安心できます」

文香は、自分の体力面に対しての不安が消えたからか安心感がある。これで、ソロに臨めると。

「これならもう少し出番があっても大丈夫そうですね」

ありすは、出番が少なかったことに少し不満があるようだ。実際にやってみて余裕があるからこそそう思えるのだろう。

「……こうしてみるとわかるもんだね。本当に成長してる」

この中でも最も成長している凜からすれば、おそらく実感は一番強く出ているだろう。今の彼女の目には、更なる向上心の色が見える。

「……Он выдвинул перед тем。前に進んでいるんですね」

アナスタシアは、実感を受け止めるように自身の身体を抱きしめる。彼女は、自分の可能性を信じてプロジェクト・クローネに参加した。だからこそ他の人よりも多くのものを感じているのかもしれない。

「今回の件を踏まえ、もう一度検討が行われます。時間も無くなっては来ましたが、今の皆さんなら十分に対応できると思います。なにか意見などがありましたら私の方で受けますので言って下さい」

武内の言葉をそれぞれが受け入れ、考え込む。彼女達の顔を見る限り、内容の変更を考えていく事になるだろう。成長したからこそ現状への不満があるからだ。

「――それでは、残りはトレーナーの方に任せるとします」

通しでやるためにデータを取りながら見ていたマスタートレーナーが前に出る。

「今撮った物を見ながら問題点を説明して行く。それが終わり次第、レッスンを開始する」

武内が話している間に準備をしていたモニターに先ほどの映像が映し出される。

「これからは、細かい部分を調整していく事になる。大雑把なものよりも難しいと思っておいた方がいいぞ」

マスターの言葉からモニターへと意識を移す。そこに映る自分達の動きを確認していく。より良く、高みへと昇るために。

◇◇◇◇◇

プロジェクト・クローネの方は、マストレに任せて自分は別のレッスン場へと向かう。既に準備はできている頃だろう。

「——お疲れ様です」

レッスン場に入ると、新田美波、諸屋きらり、前川みくの3人が既にレッスンをやっている。それも汗の量から考えて相当身体を酷使させられたのだろう。

「準備はしておいた。後は、好きにするといい」

ベテラントレーナーが武内に言葉を掛け部屋の外へと出て行く。ベテトレには、彼女達を限界まで疲れさせるように頼んでおいた。ただ、今回行う事には賛成ではない。そのため、途中で席を外す。

「……大丈夫ですか?」

これから行うのは、レッスンではなく実験だ。不足している経験を補うためだけの。

「……大丈夫です……」

「……きらりんは……まだまだだいじょぶだよお……」

「……みくも……」

シンデレラ・プロジェクトの中でも体力がある3人でも現在のプロジェクト・クローネが行っている基礎強化ですら負担が大きい。予想以上にシンデレラ・プロジェクトとプロジェクト・クローネの差は大きいのもかもしれない。

(私の指導力不足ですか……)

シンデレラ・プロジェクトのレッスンは、主に自分で考えている。ベテトレに意見を貰いながらではあるが自分で決めている以上この差はプロデューサーである自分の責任だ。

「……始める前に一つだけお願いがあります。僅かでも体調の変化や違和感を覚えた場合はすぐに言ってお下さい。これは、レッスンはありません。皆さんの協力を得た上で行う実験になります。そのため、皆さんの協力が必要になります」

「……わかっています。何度も話は聞きましたから」

「……きりりんは、じょーぶだから平気だよ。だから、安心してほしいに」

「……みくもこの程度じゃへこたれない」

事前に危険性は何度も説明した。それでも3人は、協力してくれる。

「……わかました。では、始めたいと思います」

まだ草案の段階ではあるが考えていたプログラムを実施する。内容もそうだが、彼女達の変化を見逃さないようにする。重要なのは、成長ではない。彼女達が安全に進

める道を見極めることだ。

第23話

「——ふにやあー！ もうクタクタにやー！」

「——きらりんもお疲れさんだにい〜」

レッスンが終わり、アイドル達は疲れ果てまともに話す事が出来なくなった。それから、武内が献身的に介助を行い話せる所まで回復した。その第一声が前川みくの声であり、それに続くように諸星きらりも声を上げる。

「……予想よりも大変ですね」

アナスタシアがプロジェクト・クローネの方に参加してから新田美波は努力を続けた。その美波でも他の二人よりはマシではあるが負担に身体が悲鳴を上げている。

「——今日は、ここまでにしておきましょう」

彼女達の頑張りも予想以上だった。ただ、それがどうなのかがわからない。自分の予想が低かったからか？ それとも無理をさせ過ぎたのかがわからない。

「ねー、Pちゃん。それで、みく達はどのなの？」

みくの言葉で他の二人もこちらを見る。

「私の予想以上にはできていました。日頃から行われているレッスンを真面目に受けて

いる結果だと思えます」

武内の言葉に一瞬喜びそうになるが、すぐにそれは影を潜める。

「……でも、まだまだ足りないんですよね？」

「……凜ちゃんもアーニヤちゃんも、他のみんなもすつごおーい……きらりんもガンバガンバしないといけないに！」

「——みくは、負けたくない！ みくは、もつとがんばりたい！ ……そうじゃないと、嫌だ……」

心を隠す余裕もない。心の声が表に現れる。

「今回の件を踏まえて再検討します。今から体調などに変化がありましたらすぐにお願
いします」

レッススが終わったと言っても安心はできない。むしろ、ここから本番と言っていい。酷使した身体には、必ず何かしらの形で表れるはずだからだ。

「わかりました。二人とも、私も相談に乗るから何かあったら言ってね」

美波が武内のフォローに回る。おそらく、武内ではできない相談もあると考えての事
だろう。男と女では悩みの種類も変わってくる。

「この後は、どうされますか？ 予定もありませんので帰る事もできますが？」

「うーん。みんなはどうすゆ？」

「皆の所に寄っていくのもいいけど、今はベッドで休みたいかも。Pちゃんが送ってくれるの?」

「そうですね。新田さんと前川さんは寮になりますので、帰られるのでしたら諸屋さんとどちらが先に帰られますか?」

「私は、どっちでもいいけど?」

「みくもどっちでもいいにや」

「きらりんもどっちでもいいよおー」

譲り合いは素晴らしいが決まらないのは困る。

「……もし、時間があるのでしたら今日のお礼を兼ねて何か食べに行きませんか?」

「食事ですか? プロデューサーさんと?」

「——お肉が食べたい! Pちゃんのオススメのハンバーグを要求するにや!」

「うつきやー、きらりんも一緒に行きたあーい! みんなで一緒に食べればハピハピだにー☆」

「わかりました。それでは——」

「——ちよつと待てーい!」

レッスンスターの扉が開き、本田未央をはじめシンデレラ・プロジェクトのアイドル達が入ってくる。

「——本田さん!? それに皆さんも……」

レッスンに夢中になって気づかなかったが、どうやら気になって見に来たのだろう。今回の件に関しては、シンデレラ・プロジェクトのアイドル達に正式に公表して行っている。

「心配で来ちゃいました! お疲れ会をするなら私達も参加したいです!」

「そうそう。頑張ったのはみんなだけど、アタシ達も一緒にいたいからね。ヨロシクね、Pくん☆」

島村卯月と城ヶ崎莉嘉の言葉に他のアイドル達も賛同する。

「……大丈夫ですか?」

渋谷凜とアナスタシアの二人は、プロジェクト・クローネの方のレッスンで居ないが、それでもシンデレラ・プロジェクトのアイドル達は大勢居る。美波の心配もわかる。

「……この人数ですと車では無理ですので、下のカフェになりますますがよろしいですか?」
不満の声もなくはないが、全員一緒の方が良いらしくすぐに収まる。とはいえ、全員分となると少し困る。

(経費で落ちるでしょうか?)

そんな事を考えなくてもないが、普段からお世話になっている彼女達に恩返しができるなら安いものだろう。



「今度、何処に行こうか？」

「アタシは、ハンバーガーでも良いけどせっかくだからオシヤレな所かなー」

「私は、何処でもいいぞ。奢ってもらえるなら」

シンデレラ・プロジェクトのアイドル達との食事が終わる頃に連絡があり、プロジェクト・クローネのアイドル達を送る事になった。その時に食事の件が知られ、クローネの方でもお疲れ会をする事になった。寮の方から先に送り、疲れていた鷺沢文香を次に送り届け、今は渋谷凜、北条加蓮、神谷奈緒を送っている所だ。

「ねー、プロデューサー。何処かオシヤレな所とか知らない？」

加蓮が身を乗り出しそうな勢いで聞いて来る。少し前までは、レッスン後にここまで元気が残っているとは思わなかった。

「取材などで行った所なら知ってはいますか？」

「ふーん。意外と詳しいんだ」

「だったら、プロデューサーに決めてもらえばいいじゃん。私は、特に好き嫌いとかないから皆で決めてくれていいよ」

「プロデューサーのオススメはあるの？」

「やめといたほうがいいよ。どうせ、ハンバーグになるから」

「ハンバーグ？ プロデューサーは、ハンバーグが好きなの？」

「はい」

「そうなんだー。ねえ、そのハンバーグ屋さんにはハンバーガーとか置いてない？ たま

には、ジャンクフード以外にも食べてみたいかなー」

「ある所もありますが、そこにしますか？」

「なあ、文香や橘さんは肉よりも他の方がよくないか？ 文香とか肉を食べるイメージ

がないんだけど」

「周子とアーニャもないよね？」

「そっか……じゃあ、そっちは今度二人だけで行こうか。ねえ、プロデューサー？」

「機会があれば」

「約束だからね！」

喜ぶ加蓮を凜は、無言で見ている。

「それなら私も何処かお願いしたいな。あんまり詳しくないから良い所があったら教え

てほしいかな」

「何かリクエストがあるなら聞いておきますか？」

「んー、あんまりないんだよな。ああ、そうだ。変わった物がいいな、珍しくて美味しいの。そんなのってある?」

「探しておきます」

「……プロデューサー。私も何処か行きたいんだけど?」

鏡越しに見る凛は、こちらをジッと見ている。

「前の所にしますか?」

「ふーん。まあ、そこでもいいよ。プロデューサーが好きなお店だしね。それに美味しかったし」

「気に入ってもらえて何よりです」

「……アタシもそこにする。そこって、ハンバーグ屋なんでしょう?」

「はい。シンデレラ・プロジェクトの方達も気に入ってもらえていますので味は保証します」

「じゃあ、いつ行こうか?」

「おいおい、プロジェクト・クローネのお疲れ会はどうするんだよ?」

奈緒の言葉で目的を思い出したからか話は戻る、ただ、結局他の人達の意見も聞いて決めることになるだろう。



《おまけパート》本編とは関係ないです。

「ふーん、アイドルの女の子達と食事にねー。ビールお代わりで！」

「武内君も大変ね。私は、ワインでお願い」

「武Pも大変だねー。ゴクゴク、ぷっはー！ やっぱり、仕事の後のビールは最高だねっ
ー！」

アイドル達と何処に食事に行くかを前に担当していたアイドル達に相談する。と言つても、川島瑞樹以外はまともに聞いていないだろう。片桐早苗と姫川友紀は、ハイペースでジョッキを空けて行く。

「武内さんも飲みましょう！ 酔ったらいけないからって、お酒を避けちゃダメですよー！」

隣に座る高垣楓にグラスになみなみと日本酒を注がれる。ストレートで。

「でも、どうかしらね？ あまり気取ったお店だと若い子達には居心地が悪いんじゃないかしら？」

「そっかもねー。騒げないと困るかもねー」

「早苗さん、焼き鳥取って！」

「私は、お酒が飲めれば大丈夫ですよ、ふふっ」

早苗はともかく、残りの二人は人選ミスかもしれない。

「……人数も居ますので」

「……そうね。でも、忙しいから分ける事もできるんじゃないの?」

「皆さんお忙しいのでできれば一緒の方が。最近、全員で会う機会もないので」

「だったら、いつそのこと頼んじやえば? お酒がなければいけるんじゃないの?」

「お酒が飲めないのはヤダな」

「どうにかして持ち込めないでしょうか?」

「あなた達は、参加しないでしよう?」

久しぶりに飲むことになった訳だが相も変わらずのようであんまり安心する。

「でもさー! あたしもかまってほしいんだけどな? 早苗さんも最近遊んでないん

だぞー? どつか連れてけ!」

「あたしは、キャッツの試合でいいよ! 今、スポーツ番組のおかげでチケットが取れるからね! 行きたくなかったらいつでも言うてよ!」

「私は、こうして飲みに行ければいいです。でも、温泉も行けたらいいですね! この前、ロケで行った所が良かったんですよ!」

「皆、無理は言わないの。今は、担当じゃないんだから。……でもそうね。私もオシヤレ

なお店で男性にエスコートされたいわ。お願いね、武内君」
瑞樹にウイंकされるが困る。

それから不毛な話し合いが夜通し続くことになり、お店選びは自分でする事になる。

第24話

食事の場所を選んだのは、有名なホテルのバイキングだ。此処は、346プロダクションも懇意にしている所でいろいろと融通が利く。

「ねえ、プロデューサー。此処って高そうだけど大丈夫なの？」

渋谷凛をはじめ、プロジェクト・クローネのアイドル達に心配される。確かにこの人数を自腹で払うのは大変だが、美城常務が何処からか話を聞いたようで会社の方でいろいろとしてくれた。

「美城常務の方から無料券を頂きました。これを使うので安心してください」

「ミツシーさすがだねー！」

「常務つてすごいねー！ フレちゃん、もうミツシーに足向けてネムネムできないよー！ でも、ミツシーの家つてどこだろ？」

大槻唯と宮本フレデリカの二人は、物珍しそうにその辺を見て回っている。保護者役の速水奏が居ないと不安だ。

「二人とも、落ち着きなさい」

「えー！ でも、なんかいろいろあつて楽しいよ？」

「みんなでたくさん取ろうよ！ アタシは、一口ずつ食べるからさー」

「食べられる分だけ取りなさい。いいわね？」

「はいはい、もーカナデちゃんはマジメなんだからー」

「ねえねえ、ゆいちゃん。あつちで何かやつてるよ？」

「ホント？ じゃあ、行つてみよう！」

唯とフレデリカは、ローストビーフを切っているシエフの下に急ぐ。

「……まったく仕方がないわね。ごめんなさい、あの子達を追いかけるから」

奏は、二人の後を追いかける。

「文香さん、あつちにケーキがありますよ！ イチゴがたくさんキラキラしてます！」

「そうですか。では、一緒に行きましょうか」

「はいー！」

鷺沢文香は、橘ありすと共にケーキバイキングの方へと向かう。

「こう言うのつてマナーとかないよな？ 私、そう言うの無理だ。やったことない」

「大丈夫じゃないの？ アタシもそんなにないし。それに普通のバイキングでしょう？」

「奈緒。そんなに気にする必要はないんじゃない？」

「でもさー。此処つて有名なホテルだろ？ だからもしかしたらあるかもしれないじゃ

ん」

「……凜、先に行こう」

「……だね。じゃあ、先に行ってるよ」

「——待ってくれよー」

北条加蓮と渋谷凜は、有名なホテルのバイキングに落ち着かない神谷奈緒を置いて先に行く。

「なんだか、パーティーみたいですね。Вы потеряли。たくさんあって、迷います」

「そうですね。どれを取るか悩みます」

「適当に皆で取って食べちゃおうよー」

武内とアナスタシア、塩見周子は、端の方からゆっくりと見て回る。

「こう言うのって元を取ってナンボって言うよねー」

「もと、ですか?」

「代金分の事だよ。元取れワンワンってね」

「どれぐらい食べれば、もとが取れるんでしょうか?」

アナスタシアは真剣に食べ物を選び始める。

「そう言うのは気にしなくていいと思います。好きな物を好きなように食べるのが醍醐

味ですから」

「だいごみ……少しむずかしい言葉ですね。でも、みんな楽しそうです」

既に取る物を取って席に着いている者も居る。唯とフレデリカは、皿に山を作っているが食べられるのだろうか？ 皿には、山盛りのローストビーフが載っている。

「……私は、取らずにいる事にします」

「Почему。どうしてですか、プロデューサー？」

「いえ、バイキングは基本的に残す事は禁止されています。此処も残すと罰金があります」

「前に美波とケーキのバイキングに行きました。美波も同じことを言っていました。 Б е с п о л е з н ы й , в р е з у л ь т а т е ч е г о . 残したら、ダメだと」

「男の人って、こういう役になるよね。頑張つてね、プロデューサー」

アナスタシア、周子と共に簡単に見て回るが、自分は取らずに唯とフレデリカの方を食べることにする。案の定、食べている途中で飽きたようで残りを食べることになった。

「いやー、奏つてなんだか様になつてるよな。もしかして、こう言うの慣れてんのか？」
「慣れているかはわからないけど、両親とたまになら食べるわね」

隣に座っている奏の作法が気になって、奈緒も真似てみる。

「うーん、どうかな？」

「アタシ達は、ファーストフードの方が似合うよ」

「そうだよ。普通に食べたら？」

「でもさ、少しはない？ こう奏みたいにさ？」

「へえー、どんな感じ？」

「そうだな……たとえば、こうとか」

二人は、奏のような食事の姿を真似る奈緒の写真を無言で撮る。その動きには無駄がない。

「——どう見ても子供が親の真似をしているだけだね」

「——だね。いつもの可愛い奈緒だね」

「——くそー、私としたことが……」

ニヤニヤしている二人に乗せられてポーズを取ってしまった自分に腹が立つ。

「どうしましょう。こんなにいっぱいイチゴがあります！」

ありすの皿には、イチゴが使われているケーキなどが大量に載っている。

「そうですね。でも、全部食べ切れるでしょうか？」

「大丈夫です！ 私と文香さんなら。それにプロデューサーさんも居てくれますから安

心です」

「……プロデューサーさんですか……」

文香の目には、唯とフレデリカが持ってきたローストビーフの残りを一人で食べる武内の姿が見える。

「……大丈夫です、ありすちゃん。私が頑張りますから」

「……そうですか」

急にやる気が十分になった文香の姿にちよつとありすは引いてしまう。

「プロデューサー、大丈夫ですか？ Поможешь。私も手伝いますか？」

「……いえ、大丈夫です。アナスタシアさんは、好きな物を食べて下さい」

「そうだよー、アーニヤちゃん。プロデューサーは、男として頑張ってるから手伝うんじゃないくて、応援しなきゃ。フレフレって感じですよー」

「Не унывайте ли。頑張ってください！ 応援していますー！」

アナスタシアと周子の応援を受けて頑張って皿に載っている肉を食べていく。しかし、新たな敵がこの間にも盛られている事を彼は知らない。

◇◇◇◇◇

大人？組が書きたいだけなんや《おまけパート②》

「聞いて下さいよー。ナナは、頑張ってるんですよー」

今日は、たまたま帰る途中で出会った安部菜々と屋台のおでん屋で飲むことになった。

「知っていますよ。安部さんが頑張っている事は」

「ほんとはーですか？ プロデューサーさんは、ナナのプロデューサーさんじゃなくなりましただけど、ナナにとっては今でもプロデューサーさんなんですよ？ わかってくれますか？ ナナをアイドルにしてくれたのは、プロデューサーさんなんですからね」

ナナは、ウサミン星特製の炭酸麦茶を一気に飲む。

「ぶっはー！ プロデューサーさんと一緒に飲むと美味しいですね！ おかわりください、ガンモとタマゴも！」

「はいよー！ 菜々さん！」

お店の親父が手慣れたようにタネを選んでいく。

「大体、忙しいのはわかりますけどナナの事もかまって下さいよ！ この前、みくちゃん
の時に久しぶりに話したんですからね！ 怒りますよ、ぶんぶん」

「……申し訳ありません」

「……別にいいですよ。プロデューサーさんが大変だったのも知っていますから。でも、

ウサミンは寂しいと死んじゃうんですからね？　こうしてかまって下さいよ」

「はいよ、菜々さん！」

「——待ってました！　親父さんのおでんは本当に美味しいです！」

「そうかい？　いやー、菜々さんに言われると嬉しいね！　よし、これもおまけだ！」

「ありがとうございませーす！　でも、ナナにさんはいらないんですからね！　ナナは、リアルJKの17歳なんですから！」

（それ飲んでてそれはまずいんじゃないかい？）

親父さんは、そう思いつつもウサミン星特製の炭酸麦茶を菜々に出す。

「でも、みくちゃんとは最近一緒になりますけど若いですね……なんだか付いて行くのが大変で……。——ち、違います！　ナナも若いんですよ！　ただ、身体が言うことを聞いてくれない時があるぐらいで……。いえ、違うんですよー！」

久しぶりの菜々との飲みは、ほとんど聞き役で終わった。迎えに頼んだ川島瑞樹も合流して女子寮近くで飲み直すことになる。

第25話

実験と言う名のレッススが始まり数日が経過した。早速ではあるがアイドル達の身体に変化が表れる。

「……筋肉痛ですね」

新田美波、諸星きらり、前川みくの身体を調べてみたところ、疲労が溜まっているようで本来の動きができなくなっていた。理由だけ見れば、ただの筋肉痛だが彼女達の場合は少し意味が違ってくる。普段からレッスンをしているので多少の事なら筋肉痛にはならないからだ。

「今日は、レッスンの方はやめておきましょう。その代わり、身体の整備に回します。ストレッチを行った後、ゆっくりと身体を休めて下さい」

「……ダメですか？」

「ふにゆく、Pちゃんにめーわくかけたくないけどおー、ちよつとさんねんさんにい、ぐすん」

「ふにやあく、猫ちゃんパワーで頑張りたいけどPちゃんは心配するよね？」

三人からレッスンの要望はあるが叶える事はできない。

「レッスン量が増えていますので筋肉痛になることは不思議ではありません。ただ、今回は事情が事情ですので様子を見たいと思います。それに今回の筋肉痛の箇所からもう一度内容を見直してみます」

「仕方ないですね。きらりちゃん、みくちゃん、今日はストレッチだけしましょう」
「によわわ、せめてストレッチだけはガンバルにー」

「早く良くなるからね、Pちゃん！」

三人とはレッスン場で別れ、オフィスに戻り改めて考える事にする。プロジエクト・クローネのアイドル達も最初の頃は似たような事があった。ただ、その時には美城常務やマスタートレーナーのような知識などがある人間が居た。数日ではあるが自分の予想を彼女達は良くも悪くも変える。不安がどうしても残ってしまう。撮っていた映像を見ながら不安を取り除く方法を考える。

「——プロデューサー。今、大丈夫？」

北条加蓮が部屋にやって来た。今日は、レッスンは休みのはずだ。

「どうかされましたか？」

「えっと、その……少し相談。今、忙しくない？」

「かまいませんよ」

加蓮を席に招き、ソファアールへと移動する。

「それで、どうかされましたか？」

「あのさ、ライブの事なんだけどソロがあるでしょう？　ちよつと心配になっちゃって」
加蓮にとっては、初めてのソロになる。曲は、既存のもので加蓮の好きな曲でもある。レッスンで見た限りでは問題点は特にはない。細かいところは、レッスンでトレーナーが調整しているはずだ。

「北条さんなら問題ないと思います。細かい点は、トレーナーの方で調整して頂けていますから」

「……そうなんだけどさ、他の皆もあるじゃん？　だから比べられると思うと心配で。凛は、言わなくてもわかると思うけど凄く上手いよね、いろいろと。文香も歌声が綺麗だと思うしさ。アーニヤだって歌っているところとか可愛いし。だから、心配なんだ」
「私には、北条さんの歌声も、姿も素敵に思えますが？」

「プロデューサーに言われたら嬉しいよ？　信頼もしてるから少しは自信も湧くし。でも、不安なものは仕方ないじゃん！　ねえ、なにかこの不安を取り除く方法はない？」
考えてみるが浮かばない。ライブに対しての不安ならともかく、他の人間と比べての不安ならこれから先も普通に持つ感情だ。決して慣れる事はないだろう。

「北条さん。残念ながらその不安は消える事はありません。それこそ慣れる事もないでしょう。これから先もその不安は常に傍にあるはずですよ」

「じゃあ、ずっとこの気持ちのままでないくちやいけないの?」

「いいえ、それではダメです。不安は心を蝕みますから。この不安に対する方法としては、ほどよく付き合う事です。決して逃げてはいけません。だからと言って気にしすぎてもいけない。その合間を見極めて付き合って行く事がこれから先アイドルとしてやっていく上で必要になります。誰でも持つ不安だという事を覚えておいてください」

「言ってることが難しい……どうやっていけばいいかわかんないよ」

「すぐに解決できるものではありません。ただ、人に話を聞いてもらう事で少しずつ距離がわかるものでもあります。私でよければいつでも話を聞きますので」

「話せばいいの? それだけでこの気持ちは良くなるの?」

「そうなるはずですよ。今、北条さんが思っていること、考えている事を話して下さい。先ほどのように不安を私に話してみてください」

「……わかった。でも、今はもうないかな? なくもないけど上手く言葉に出来ないし」
「では、待つとしましょう。北条さんが話してくれるまで。私は、いつでもかまいませんから」

「……ありがとう、プロデューサー。ねえ、今は浮かばないから他の事でもいい?」

「もちろんかまいませんよ」

「だったらそうだな……この前、皆で服を見に行った時の話でもしようかな? あの時

は——」

それからは、加蓮の話に付き合った。問題は解決していないが話して気が紛れたのか加蓮はいつも通りの様子で部屋を出て行った。

◇◇◇◇◇

加蓮が部屋を出て行ってから再び作業を開始した。ただ、しばらくすると再び来訪者が来る。

「——プロデューサーさん。今、大丈夫ですか？」

「かまいませんよ」

橘ありすがゆつくりと部屋に入ってくる。今日は、個人レッスンがあつたはずだ。時間を確認してみると終わった後のようだ。とりあえず、話を聞くためにソファアへと移動する。

「どうかされましたか？」

武内の言葉にありすは、モジモジしている。言いたいことがあるのだろうかなかなか口を開けないようだ。ここは、彼女が話すまで待つとしよう。

「……その、相談なんですけど」

決心がついたのか、ありすは口を開く。

「私の事、皆さん『橘さん』って呼ぶじゃないですか？ 最近思うんです。私だけが上の名前で、さんを付けて呼ばれているって」

橘ありすは、下の名前である『ありす』で呼ばれるのが嫌いだ。前に鷺沢文香から話を聞いたことがあるが、同級生に名前でからかわれたことがあるからの事だ。ありすとしても悩んでおり、文香に相談などをしていた。さん付けに関しては、単純に呼び捨てが失礼だからだ。

「橘さんは、ありすと呼ばれてもかまわないのですか？」

「……わかりません。でも、なんだか寂しくて。私だけ他人みたいに思えるんです」

ありすとしても前に踏み出したいがなかなか難しい話だ。

「少しずつですが他の方で慣れていきますか？ 鷺沢さん以外だと他に呼べる方はいますか？」

「えつと……奏さん、凜さん。それと、お菓子作りでお世話になっているかな子さんと」

「では、その3人から初めて見るのはどうでしょうか？ 確かに中には羨ましがる方もいらつしやると思います。皆さん、橘さんと仲良くされたいと思いますから。ですが、デリケートな問題ですので無理はしない方が良くと思います」

「……でも、それだと他の方に變に思われませんか？　なんで私はダメなんだろうって？　私は、その……皆さんに良くしてもらっています。嫌われたくはない、です」

「そうですね……」

ありすの言いたいこともわかる。下の名前で呼ぶことを許された者とそうでない者ではいろいろとあるはずだ。

「でしたら、私が呼ぶのはどうでしょうか？　私なら年齢、立場などもありますので他の方よりも不満はないのではないのでしょうか？　橘さんが嫌であるならばやめておきますか？」

「プロデューサーさんが……私の名前を？」

ありすは、こちらを見ながら考え込む。ジツと子供の小さな目が真剣に見ている。今、ありすの中ではいろいろな事が考えられているのだろう。

「……プロデューサーさんなら下の前で呼ばれてもいいです」

「そうですね。では、これからは下の名前で呼びたいと思います。もしお嫌になりましたらいつでも言つて下さい」

「はい」

どうやら一段落したようだ。これで上手く行つてくれればいいのだが。

「あつ、あの……」

「ありますがこちらの様子を窺うように見ている。まだ、話があるのだろうか？」

「なんででしょうか？」

「その、試しに呼んでみてもらっていいですか？」

「試しにですか？　ありがとうございます。これでいいですか？」

「ありがとうございます……なんだか嫌いじゃないですね。ありがとうございます、ですか……えへへ」

「どうやら嫌ではなさそうで安心した。どうやら他には特にならないようだ。この後は、簡単に世間話をしながらありますの相談は終わる事になる。」

尚、これは別の話になるが、突然ありますだけを下の名前で呼ぶようになったことで一騒動起きる事になる。それこそ、シンデレラ・プロジェクト、プロジェクト・クローネ以外の場所でも。

◇◇◇◇◇

《おまけパート③》もう書かんから許してなんでも島村卯月頑張ります

オフィスで作業をしていると懐かしい組み合わせが顔を出す。

「プロデューサーさん！　カワイイ、ボクが来ましたよ！」

「……久しぶりだな」

「私は、この前会った……ちよつとだけだけど」

輿水幸子、星輝子、白坂小梅。昔、担当していた三人だ。ただ、最近はこの三人でいる姿も見なくなつた。この三人でユニットを組んでいたことが懐かしく思える。

「どうかされましたか？」

「フフーン。久しぶりに三人でお仕事をしたので会いに来たんですよ！ ほら、懐かしいでしょ！ ……つて、二人とも何処に行くんですか？」

輝子と小梅は、幸子を放つて置いて武内の下まで行く。

「お邪魔します」

「私も」

輝子と小梅は、武内のデスクの下に潜る。

「此処は、初めてだけど……居心地は悪くないな……フヒ」

「私は、こういう所は慣れてないけど邪魔しちやダメだもんね……うん、ここなら大丈夫だよ」

「プロデュ……じゃなかった。えつと、武内さん？ ……なんだか言いにくいな。……

親友でいいか、トモダチだし」

「私は、どうしようかな？ ……そうだよね、今は違うもんね、残念」

輝子と小梅は、デスクの中で落ち着き始める。小梅は珍しかったが、この光景は懐か

しい。仕事は辛いけど。

「——ちよつと、なにやってるんですか!? プロデューサーさんのお仕事の邪魔しちゃダメですよ!」

「……幸子ちゃん、うるさい」

「うん、静かにしなきゃダメだよ?」

わざわざデスクの裏側まで来た幸子の方を見もせず二人は自分の世界へと入る。

「……ボ、ボクだって……久しぶりにこうして話せるのに。最近、仕事先でしか会えないのに」

「そう言えば、三村さんと緒方さんが輿水さんにお礼を言っていました。どうやら困っていた時にアドバイスを頂けたと」

「——当然です! あの二人は、カワイイボクの後輩ですからね! アイドルとしても! ボクの担当プロデューサーのアイドルとしても! いいんですよ? 先輩として頑張ったボクを褒めても! ほら、早く褒めて下さい!」

いつにも増して幸子のテンションが高い。

「……なあ、親友。此処にキノコって持って来ちゃダメか?」

「そうですね。前と少し状況が変わりましたから」

「そうか……残念だな……」

輝子は、落ち込んでデスクの奥へと消える。

「私は、新しいの見つけたんだ。……一緒に見れない？」

「申し訳ありません。此処には、テレビなどはありませんので」

「……そつか……そうだよね……」

小梅も輝子と同じようにデスクの奥へと消える。

「プロデューサーさん。なんだか冷たくないですか？ 元とは言え、ボク達はプロデューサーさんの担当だったんですからね？ ちゃんと甘やかして下さい」

とは言っても、キノコとテレビの件はどうしようもない。

「そういうえば、なんで幸子ちゃんは、プロデューサーって呼んでるんだ？」

ひよっこりと輝子が顔を出す。

「そうだよね……なんだかズルい」

小梅もひよっこり顔を出す。

「ボクにとつては、プロデューサーさんは、プロデューサーさんなんです！ たとえ担当でなくなっても、それだけが変わりません。いいですか、プロデューサーさん。この奥水幸子のプロデューサーであることは、もう決定事項なんです！ カワイイボクが言うんですから間違いありません！」

「幸子ちゃんが一番会いたがってたからな」

「そうだね。足、速かったもんね」

「別にボクは会いたくなかったです……いえ、そうじゃなくて……会いたくない事もないですけど、プロデューサーさんが会いたくなかって思ってた来てあげたんです！ だからボクをもてなして下さい！ 今までの分もあるのを忘れないでくださいね！」

「……では、下のカフェでよければ一緒に行きますか？」

「カフェですか？ もう仕方ないですね。カワイイボクは寛大ですから許してあげます！ じゃあ、早く行きましょう！」

幸子に服の袖を引っ張られる。

「久しぶりだな……4人で何かするの……ヒヤッハー！ ハッピー過ぎで最高の気分だぜエエ!! ……頭ぶつけた……」

「そうだね。でも……4人じゃないよ？」

「ほら早く行きましょう！ カワイイボクを待たせるなんて罪にもほどがありますよ！ 話したいことはいくらでもあるんですからね！」

幸子に引っ張られるように輝子と小梅も連れてカフェで話をする。仕事はまだ残っているが、3人が楽しそうにしているのを見ると戻るに戻れない。

……もう一人も同じ気分なのだろうか？

第26話

「プロデューサーさん。今日は、クッキーを焼いたんですよ！」

「四葉のクローバーをたくさん作りました。みんながたくさん幸せになれるように」

「おいしいよ」

仕事の話をするためにシンデレラ・プロジェクトの待機場所に来た。用があるのは、三村かな子、緒方智絵里、双葉杏の3人だ。

「ありがとうございます。ただ、今日はキャンディアイランドの皆さんに仕事の話を持ってきました」

「お仕事ですか？ 嬉しいですよ！」

「その、どんなお仕事ですか？」

「杏は楽なのがいいな」

「仕事は、2つです。一つは、料理番組になります。三村さんをメインに緒方さんには助手として番組を行って頂きます。ジャンルに関しては、基本的にはお菓子になりますが内容をしながら他のものも考えていく形になります」

「お菓子作りの番組ですか!? ……でも、私なんかメインでいいんですか？」

「かな子ちゃんなら似合つてると思うよ。私も一緒に頑張るからね」

「そうそう。かな子ちゃんなら適任だよ。それで、杏はないの?」

「双葉さんには、番組のマスコットキャラクターを兼ねて料理の仕方などを教える役になります。衣装などもそうですが、そちらの方のデザインも現在考えて頂いています」
「作るよりは楽そうだね」

杏には言っていないが、マスコットキャラクターとしての宣伝などのイベント活動がある。番組だけで見れば楽かもしれないがそれ以外も含めると大変だと思う。

「それで、プロデューサーさん。もう一つのお仕事は何ですか?」

『幽体離脱フルボッコちゃん』にキャンディアイランドとしてゲスト出演して頂きます。詳しくは、こちらをご覧ください」

武内は、3人に企画書を渡す。ちなみに幽体離脱フルボッコちゃんとは、アイドル小関麗奈がマスコットであるアイドル太田優の飼犬であるアツキーと出演している子供向け番組である。実写、アニメの両方があり、今回はアニメの方だ。

「枠として見れば僅かですが、キャンディアイランドとして出演する形になります」

「この番組って、けっこう視聴率いいよね? よく取れたね、こんなの?」

「ついこの間、外回りをしている特に撮影現場の近くに行く事になりました、その時に小関麗奈さんの担当の方と食事をする事になりました。それで、話をしてみたところ出演

が決まりました」

「コネってやつ？ 随分と簡単に決まるんだね」

「話のネタを考えるのも大変だそうです。番組自体も長いですからね」

人気があり長期化している番組なので、現場としてもネタ切れに悩まされていると話を受けた。それで、試しに言ってみたらすんなりと通った形だ。

「3人には、少しですがセリフも用意されていますので今度収録に行きます。歌に関しては、音源を使用しますのでそれほど難しい仕事ではないと思います」

「本人役だしね」

「でも、アニメの世界に自分が居ると思うと凄いですね！」

「うん、楽しみだね！」

どうやら喜んでもらえたようだ。詳しい事は、企画書を見ながら説明して行く。

◇◇◇◇◇

「——お疲れー」

神谷奈緒がシンデレラ・プロジェクトの待機場所に顔を出す。

「あれ？ プロデューサー？」

「お疲れ様です。神谷さん」

奈緒は、荷物を置いて空いている席へと座る。

「なんで、こっちに居るんだ？」

「お仕事のお話を持ってきてくれたんです！」

「仕事？」

「料理番組とフルボッコちゃんのゲスト出演だつてさー」

「マジで？ 本当にフルボッコちゃんに出るの？」

「読んでみる？」

杏は、奈緒に企画書を渡す。

「……本当だ。本当に出るのか」

奈緒は、武内の方を見る。

「なあ、プロデューサー。私達もこういうのつてないのか？」

「こういうのですか？」

「いや、その、なんだ。アニメとかそういう仕事」

「……そう言えば、神谷さんはアニメや漫画が好きでしたね」

「うん、だからさ。やってみたい、かな？ 無理にとは言わないけど」

「わかりました。検討してみます」

「本当か!? 本当を取ってくれるのか!? 期待してもいいんだな? 約束だからな!」
普段と違い勢いがある。

「オタクにとつては、最高の仕事だもんね」

「オ、オタクじゃねーしっ! 好きなだけだし……」

「はいはい、奈緒は可愛いよ」

「なんで、凜たちと同じようにからかうんだよー!」

奈緒の言葉は、既にだらけモードに入っている杏には届かない。

◇◇◇◇◇

仕事が終わったので武内がオフィスに戻ろうとしたところ、奈緒も一緒に付いてきた。どうやらプロジェクト・クローネの方には誰も居ないので暇なんだそうだ。同じトライアドプリムの渋谷凜は、ニュージエネレーションの仕事で居ない。北条加蓮も用事があり今日は居ない。シンデレラ・プロジェクトの待機場所には、キャンディアイランドの3人が居るが仕事の話を聞くと羨ましくなるので居辛いらしい。

「なあ、プロデューサー」

奈緒は、ソファアールで横になりながらマンガを読んでいる。

「なんででしょうか？」

「今更だけどき、私ってプロデューサーを呼び捨てにしてるよね？ やっぱり敬語とかの方が良いのかな？ プロデューサーさんとか」

「別にどちらでもかまいませんけど？」

「そうかー。いやさ、本当に今更なんだけど、プロデューサーって結構偉いんじゃないのかなって思ったんだよね？ 美城常務と話せるし、こんな部屋も持つてるし、仕事とかもできるからさ。凛たちが呼んでるから普通にプロデューサーって呼んでるけど、立場的にまずい気がして」

マンガから視線を離して、こちらの様子をチラチラと窺っている。

「私としては、仕事の無い時ぐらいはゆつくりしてほしいと思っています。何処でもいいので、気が抜ける場所がある方がいいですから」

「私としても今の方がいいからいいんだけど、もしダメだったら教えてくれよな？ 担当アイドルがちゃんとしてないからって迷惑掛けたくないから」

「ありがとうございます。気を使って頂きまして」

「いつもお世話になってるからな。プロデューサーが担当になってからいろいろと楽しんでる気がする。この仕事ってそんなに楽なもんじゃないんだろうけどさ、何かあってもプロデューサーが居れば何とかなる気がするから」

「そう言ってもらえると嬉しいですね」

「そっか。じゃあ、このままでいいか」

奈緒は、再びマンガを読み始める。

「——あっ!? そういえば、宿題があるんだった!」

マンガを閉じると急いで鞆から宿題を取り出す。

「……プロデューサー少しいいか? わかんない所を教えてください」

「別に構いませんよ。必要な時に呼んでください」

「じゃあ、今から頼む!」

「今からですか?」

「それがさー、最近レッスンはばかりで勉強する時間がないからかちよつとなー、あはは

……」

奈緒の近くには、先ほどまで横になりながら読んでいたマンガの山がある。

「わかりました」

奈緒に教える為に作業を止めて、ソファの方へと移動する。

「本当に助かるな。プロデューサー教えるの上手いから助かるよ」

「そうでしょうか?」

「そうだよ。この前も三人で教わったしな。やっぱり、慣れてたりするのか?」

「そうですね。親御さんから勉強との両立は言われていきますので。ただ、必要な場合はプロに頼むこともあります。必要でしたらこちらの方で手配しますので言っておきい」
「便利なもんがあるんだな。でも、今はいいや。プロデューサーに教えてもらえればい
い」

奈緒から宿題を見せてもらい教えていく。奈緒もまったくわからない訳ではないよ
うで、そこまで教えるのは難しくもない。

「なんだかさ、プロデューサーって兄貴みたいだよな？ 私は、一人っ子だからわかんないけど頼りになって勉強とか見てもらおうのってそんな感じがしないか？」

「どうなんでしょう？ 私も一人ですのわからないですね」

「じゃあ、今だけは兄ってことでよろしく！ 頼むぜ、兄貴！」
「……わかりました。兄らしく頑張ってみたいと思います」

それから宿題を教えている間、奈緒から兄貴と呼ばれることになる。ただ、こちらは特にこれといって変わることなく普段通り宿題を教えていく。

◇◇◇◇◇

「ふーん。プロデューサーが兄ね。まあ、悪くないかな？ 私にも教えてね、兄さん」

「可愛い妹にべんきよー教えてー！ 今度、テストがあるんだよ、お兄ちゃん！」

次の日。トライアドプリムのレッススが終わった後に渋谷凜と北条加蓮がやって来たのだが、なぜかこんな感じになっている。理由に関しては、後ろで顔を赤くしている奈緒を見れば想像はつく。

「やめてくれよ……」

奈緒の必死の抵抗も、二人にとっては原動力にしかない。

「それで、教えてくれるんでしょう？ 可愛い、奈緒にだけ教えるってことはないよね？」

「アタシは、奈緒関係なくヤバいから教えてー」

「……そうですね。少し待っていてください」

切りの良い所まで終わらしてから二人に教える為にソファーへと向かう。

「じゃあ、兄さん。奈緒に教えたようにお願いね」

「プロデューサーでも、お兄ちゃんでもいいからお願いい！」

「もう、やめてくれ……」

「いったい此処に来るまでにどれだけ弄られたのかわからないが、今日はこのままだろう。」

第27話

今日は、実験内容の確認をするためにオフィスで視聴会を開くことにした。参加者は、新田美波、諸星きらり、前川みく。それにシンデレラ・プロジェクトの待機場所へ呼びに行った時に居た速水奏が話を聞いて参加することになった。オフィスにテレビなどの機材。長くなるので、デリバリーで食事なども用意しておいた。

「ふにゆうー、きらりんにはむっずかしいにい」

「みくも、ちよつと……」

きらりとみくは、実験中の映像を見ながら武内がまとめた資料などを見ているが難しく疲れたようだ。どちらもアイドルとしてのキャラとは違い、普段は真面目に学校に通っている優等生だ。それでも英文で書かれ、専門性の高い物だと理解は難しい。

「難しいですね」

「そうですね」

美波と奏も同じように読んでいる。こちらは、まだ頑張っているようだ。美波は、シンデレラ・プロジェクトのリーダーとしての意地。奏は、プロジェクト・クローネの一人としての誇りだろう。

「できる限りまとめてはみましたがこれが限界です。知り合いの方にも聞いてはいきませんが他も考慮してやる方が良いかもしれません」

「他に何かあるの?」

「きらりんにも教えてほしいに、Pちゃん」

まだ資料に目を通してしている二人は、視線だけをこつちに向ける。

「限界までの見極めはやはり時間が掛かります。これからも注意してやっていきますのでいずれはできるかもしれません。ただ、いつになるかもわからないものに縋っていて駄目だと思います。そこで、できる限り形で見えていきたいと思います」

「何を形にするの?」

「にやわく、きらりんにもわかりやすくおなしゃー」

「簡単に言えば数値化です。本来なら機材なども必要なのですが他に方法も浮かびませるので」

武内は、ノートパソコンを操作し、幾つかの画面を見せる。

「これは、トレーナーの方で取っている皆さんの情報になります。トレーナーの方達は、これと実際の動きを見ながらレッスン内容を考えていきます。先ずは、自由に見て下さい」

ノートパソコンを真ん中に居る美波の前に置く。

「説明してくれないとわかんないよー、Pちゃん」

4人は、とりあえず画面を見て見たがいろいろと数字とグラフがあるだけでどう見ればいいかわからない。

「失礼します」

武内は、美波の後ろの方に回り込み、美波に指示を出す。

「新田さん。その下の方をお願いします。その中に名前がありますので、新田さんのをクリックしてください」

「こうですか？」

言われるがままに操作すると、美波の情報が出る。

「これが私のですか？」

「はい。新田さんが346プロダクションに在籍してからの情報が入っています。今回必要なのは、レッスンとトレーニング内容の項目になります。今回は、レッスンと書かれているところをお願いします」

「はい」

操作をすると、新しい画面が表示される。

「これが、美波ちゃんの情報なの？」

「んー、よくわかんないにー？」

「そこにあるモデルと書かれている所をお願いします。それをクリックすると現在の346プロダクション内のアイドルの平均と一般的なアイドルの情報が重ねて表示されます」

「わかりました」

美波が操作をするとグラフに別の物が重なるようにして表れる。

「この新たに表示された物が一般的な基準です。基本的なプログラムなどはこれの下に考えられています」

「美波さんは、全体的に上なのね。一つも下にないわ」

「凄いにや！ さすが、美波ちゃん！」

「うきやあー！ 美波ちゃんすっごーい！」

「ありがとう……」

他の三人から褒められて嬉しい。ただ、今の位置は皆の真ん中になるので照れても逃げ場がない。

「見て頂いている通り、既に新田さんは基準よりも上にあります。ただ、これにボーカルなどの要素なども含まれますので一概には判断できません。ダンスだけならともかく、歌いながらですと別物になりますので。トレーナーなどの評価や他にもいろいろあるものを吟味すると今の皆さんの実情が表れます。これとは別に機材などで肉体の情

報を取る物もありますが、そちらを利用するにはもう少し実績が必要になります」

既に簡単な物ではあるがトレーナーの方で数値などの形にはしてくれている。これらを機材も使わずに目測やプログラムだけで評価や判断をするのがプロである彼らであり、できないのが素人である自分である。

「今も既にこれらを参考に行つてはいますが、結果は皆さんも知つての通りです。ただ、これ以上の物も現状ではないでしょう。それで、もう一度検討して考えたのを用意しておきました」

デスクの方に行き、用意していた物を持つて戻る。

「これは、レッスンは別をお願いする形になります。基本的には、基礎力の向上になります。身体を休める事も大事ですのでレッスンなどが無い時などにやってみてください。私やトレーナーが居なくてもできるものを選びましたので問題はないと思います。ただ、わからない事などがあれば言つて下さい」

美波、きらり、みくの三人に渡す。さすがに途中参加の奏の分までではない。

「意外と簡単な内容なんだね?」

「これならきらりんでもできそうだにいい」

「これで大丈夫なんですか?」

「やつて頂くとわかりますが普段使われていない部分を使う事になります。ただ、バラ

ンスよくやって頂かないといけませんので、やる場合は全てお願いします。それと、各自で内容が違いますので紛失した場合などは言っておいて下さい」

これからしばらくはこのメニューを行う事になる。もちろん、実験はこれからも続く。

◇◇◇◇◇

《おまけパート④》本編とは関係ないです。書きたいだけです。

「——お邪魔しまーす」

城ヶ崎美嘉が部屋へとやって来る。今日は、妹である莉嘉と一緒に家まで送る事になっっている。

「お疲れ様です、城ヶ崎さん。まだ莉嘉さんの方は時間が掛かりますのでこちらでお待ちください」

「そう……じゃあ、失礼しようかな」

美嘉は、ソファアに座る。

(どうしよう……これって二人つきり!?)

てつきり莉嘉が居ると思って安心していたら、まさかの二人きりになった。

「ね、ねえ、そういえばなんだけど——」

とりあえず何か話そう。そうじゃないと間が持たない。

「——ほら、最近みんなに会ってるんだってね？ 楓さんとか、菜々ちゃんとか、幸子ちゃんとかが話してたよ！ 一緒にお酒とか、ご飯食べたって！」

（どうしよう！ なんだかおかしいよ、アタシ！）

意識し過ぎて言葉遣いに変な感じになる。だって仕方がない。アイドルと関わらないように裏方に回っていた。美嘉を含めて担当だったアイドル達とも距離を取っていた。最近では、莉嘉を通して関わられるようにはなつた。でも、昔みたいにはいかなかった。そんな時に昔のように他の人達が一緒に過ごせたと聞いたら意識もする。変な意味じゃなくて。変な意味じゃなくて！

「そうですね。皆さんと久しぶりに御一緒しましたね」

「そ、そうだよね、うんうん。でもさー、なんでアタシには声が掛からないのかな？ こうして居るのに？」

（何言ってるの、アタシ!? これじゃあ、卑しい女見たいじゃない……ああ、最悪）

「……確かにそうですね。城ヶ崎さんには、いろいろと普段から助けて頂いていますから」

（莉嘉……お姉ちゃんはダメだったよ……）

「——この後何処かに行きますか？」

「……ふへえ？ 行くの？ どこか？」

「時間も遅いですし、家まで時間も掛かりますので」

「そ、そうだよねー、いい時間だもんねー。……本当に行くの？」

「やめておきますか？ 家の方で用意をされているかもしれないので」

「ああ、うん、それは……大丈夫かな？ うん、大丈夫だと思うな！ 今日、忙しいと
か言つてた気がするし！」

（連絡しておかないや）

「では、何処に行きましょうか？」

「ええつと、それは……どこがいいの？ どこでもいいよ？」

「それなら莉嘉さんに決めてもらいましょう」

「うん、それがいいよ！ 疲れてるのは莉嘉だしね！ アタシは別にど——」

「——Pくん！ 疲れたよ——」

美嘉の言葉を遮るように莉嘉が部屋に入ってくる。

「お疲れ様です」

「聞いてよ、Pくん。今日ね——あれっ？ お姉ちゃん居たんだ？」

莉嘉の目には、うなだれるようにしている美嘉の姿がある。気のせいではなければ部屋

に入った時に動いた気がする。

「……ああ、うん、居たよ。お疲れ、莉嘉」

美嘉の声は明らかに疲れている。

「そっか。ねえ、Pくん！ アタシ、おなか空いたよおー。どっか連れてって！」

「いいですよ。今、城ヶ崎さんとも話していましたので」

「ホント!? やったー！ ねえねえ、どこ行く？ それとも、もう決まった？ それかー

アタシが決めていい？」

「莉嘉が決めていいよ」

「じゃあね、じゃあね。うーんと、どこにしようかなー」

無邪気に喜ぶ莉嘉の姿を見て少し羨ましく思う。もう少し莉嘉のように素直になれたらもっと早く昔のように戻れたのかもしれない。

第28話

視聴会も終わり、デリバリーで用意した食べ物などが余ったので他のアイドル達もオフィスに来ることになった。

「……どうしよう、未央ちゃん。全然わかりません!」

「うーん、こればかりは未央ちゃんもパスで。しぶりんは?」

「私は、別にいいよ。プロデューサーに任せてるから」

一 生懸命資料に目を通していている島村卯月と本田未央とは別に渋谷凜はピザに手を付ける。

「ズルいです、凜ちゃん」

「これが先を行く者の余裕か……しまむー、付いてこい!」

「——はっ、はい!」

卯月はよくわからないが凜に襲い掛かる未央に続く。

「——ちよつと、未央! そこは——ダメだから!」

「ここか? ここがええのんか?」

「な、なんだかドキドキします!」

未央が凜の身体をくすぐり始めたわけだがその光景はなかなか直視し辛い。

「しまむー！ 増援を求む！」

「ダ、ダメだから——アハハッ——や、やめて……」

「美波ちゃん、私はどうすればいいんでしょうか!？」

「——えっ!?! 私?！」

どうしていいかわからなくなった卯月に新田美波は助けを求められたがどうしていいかわからない。

「参加すればいいのよ」

代わりに速水奏が答える。その顔は、いたずらをする子供のようだ。

「そ、そうですか? 奏さんが言うなら、私も頑張ります!」

「——えっ!?! 卯月!?! そこは——」

未央とは反対側から卯月が凜を襲う。挟まれる形でくすぐられる凜の助けを求める声と笑い声が部屋中に響き渡る。

「元気だにや〜」

「ハピハピだにい〜」

前川みくと諸星きらりは、疲れた脳を休めるように甘い物を口に運んでのんびりしている。

「異界の書物（なんて書いてあるんでしょう？）」

「うーん。よくわかんないや」

神崎蘭子と多田李衣菜の二人も資料に目を通すがさっぱりわからない。そもそも興味はあるけど内容を理解しようともしてない。

「ねーねー、アーニヤちゃんはわからないの？」

「英語は、ちよつと。русский。ロシア語ならわかります」

赤城みりあとアナスタシアも読んではいるが、ページをパラパラと簡単に眺めているだけだ。

「なんだか騒がしくなったわね」

奏は、この光景を楽しそうに眺めている。最近よく顔を出すようになったから見慣れてはきたが賑やかなものだ。

「でも、私は今が好きです」

「そうね。美波さん」

二人は、この中でも静かにお茶をしている。ここだけ別の場所のようだ。

「でも、今思っただけだ。美波さんの以外も見て見たかつたわね。自分の事なんて普通はわからないから」

結局、見たのは美波の情報だけ。他の人間の名前もあつたので見ようと思えば見られ

ない事はない。

「ねえ、プロデューサーさん。私のも見ていいかしら?」

既にデスクに戻り、仕事を始めている武内に聞く。

「先ほどと同じところだけならかまいません。それ以外だと、いろいろと書かれていますので見ない方がいいと思います」

「あらつ? もしかしてよくないこととか書かれているのかしら?」

「——いえ、そういうわけでは……ただ、書いてあることを意識してしまうと良くなるに悪くなる場合もあります。他者からの評価は、良くも悪くも影響を与えますので」

「そう、なら他は見ないようにするわ」

武内の下に行き、ノートパソコンを借りる。一応、自分で操作できるところまでは操作してもらってから。

「禁断の書物が封印されしパンドラの箱（私のもあるんですね?）」

「私のもあるのかな?」

資料よりも面白そうな物が現れたので、蘭子と李衣菜がやって来る。

「美波さんは、平均よりも上だったけど。二人は、自信がある?」

奏は、二人に忠告する。仮に下だったらショックを受けるかもしれないから。

「ど、どうしよう……あうう……」

「へ、へえ、まあ私だから自信はあるけど……今回はやめておこうかな」
「へタレにや」

蘭子と李衣菜の二人は、大人しく空いている席へと座る。

「じゃあ、私でいいわね」

奏は、操作をして自分の情報を出す。その後は、モデルをクリックして比べてみる。

「奏さんは、体力以外は上ですね」

「そうね。体力に関しては、確かに問題はあるかもしれないわ」

「でも、ヴィジュアルとかは高いですね」

美波のグラフが平均して高いとするなら、奏の場合は体力面が低く、その代わりヴィジュアル面が高い。

「モデルの仕事などが影響しているのかしら？」

「いやー、奏ちゃんは雰囲気だと思っうな」

「汝の纏う雰囲気は魔性の如き（大人っぽいです）」

李衣奈と蘭子の意見は的を射るものだ。ヴィジュアル面は、個人の魅力をどれだけ引き出しているかが重要になっている。年齢に対して不相応の大人のような妖艶な魅力はかなり優位に働いている。

「でも、それなら美波ちゃんも負けてないにや。シンデレラ・プロジェクトのエロス担当

「やー！」

「エ、エロス!？」

「美波ちゃんは、大人のみりよくでーメロメロでうらやましにいー。きらりんもみんなをハピハピでメロメロにしたいなあ、うっきやーはずかしい！」

「そうね。美波さんも私以上に色気があるものね」

「Милый。美波は、可愛いです」

話を聞いていたアナスタシアが参加する。

「ありや？ アーニヤちゃんは別意見だ？」

「片翼を担う者か（ラブライカとしてですか？）」

それからしばらく美波について話し合われることになる。主にアナスタシアが中心に。

（アーニヤちゃん……）

アナスタシアが美波の秘密を公の場で公開しているわけだが、なかなか止めるタイミングを掴めずに美波は辱めを受け続ける。

◇◇◇◇◇

「プロデューサーさん」

後部座席から卯月が声を掛けてくる。今日は、ニュージエネレーションの3人を家まで送る事になった。既に未央と凜は家に送った後だ。

「なんででしょうか？」

「あの、最近忙しそうだなって思つて。私達のために頑張つてくれてるのは嬉しいですけど、自分の事も見て下さいね？」

「気を使つて頂いてありがとうございます」

「気になりますよ。プロデューサーさんが何をしているのか私にはわかりませんが、大変なんだって事はわかります！何かあつたら言つて下さいね、私頑張りますから！」

卯月の言葉に嬉しい反面照れ臭くもなる。

「島村さんの方は大変ではありませんか？ レッスン内容も様子を見ながらではありますが増えています。負担になっていたら言つて下さい」

「それは、大丈夫です！ プロデューサーさんやトレーナーさんが考えてくれますから！……でも、勉強の方が少し」

鏡越しに卯月と目が合う。

「今度、私でよければ見ますが？」

「本当ですか!? ご迷惑じゃないですか?」

「皆さんのサポートが私の仕事ですから気にしないで下さい。時間は何時頃がいいですか?」

「ちよつと、待つてください!」

卯月は、鞆からスケジュール帖を取り出して確認する。

「明後日はダメですか?」

「かまいませんよ。それでは、時間を決めましょう」

「はいっ! 島村卯月! 勉強も頑張ります! ……苦手ですけど、えへへ」

それからは勉強会の時間を話し合う。その後は、残りの僅かな時間を好きなように楽しむ。

第29話

「どこにしようかな？ お酒の神様の言う通り！」

残業で仕事をしている訳なのだが、今日は珍しい客が来ている。

「高垣さん。もう行かれたらどうですか？」

ソファーに座りながら持つてきた温泉旅行のガイドブックを見ている高垣楓に言う。
楽しそうなのはいいが、もういい時間だ。

「ダメです。私は、武内さんを連れていく係なんですから」

この後、川島瑞樹、片桐早苗、姫川友紀など他のアイドル達と飲みに行く事になっている。別に約束していたわけではないがどうも参加は決定らしい。

「ですが、他の方も待たれていますし」

「もう、どうしてそういうこと言うんですか？」

楓に睨まれる。オッドアイの左右で色の違う瞳は、昔と変わらずにそこにある。そう思うと悪い気はしない。

「そうやって来なくなったらじゃないですか！ ダメです！ もう、参加しないのはダメなんですよー！」

珍しく彼女に怒られる。彼女が怒るのは本当に珍しい。それこそ、担当していた時でも数えられるぐらいだろう。数が少なくてどれも憶えている。

「……すみません」

「……謝らないでください」

気まずい空気が流れる。彼女と居ると上手くできない。彼女は、自分の事をよく知っているから。自分が彼女を知るように。

「ですが、本当に時間が掛かります。確かに残業ですが、仕事ではないですから」

別に隠しているわけではないが、知られたくもない。知られたら何か言われるのはわかっている。

「お仕事じゃないんですか？」

「今度、島村さんに勉強を教える事になっています。実際は他の方もいますが。それでもわかりやすく教えられるように予習をしているんです」

武内の言葉を聞いて、楓はデスクの方へと来る。

「なんだか学生の頃を思い出しますね」

面白そうに問題が書かれている紙を手取る。

「そうですね。昔は、勉強などは好きではありませんでしたが、今ではこうして仕事でもやっています」

基本的には、346プロダクションの方で用意している学校にアイドル達は通う事になつてゐる。ただ、必ずしもそうしななければいけないわけでもなく好きな所に通う事もできる。そのため、勉強の内容や質が違つたりして教えるのは大変だ。だからこそプロも手配できるようになつてゐるのだが、アイドル達にとつて勉強しやすい環境を考えると知つてゐる人の方がいいだろうと思つてやつてゐる。

「武内さん、私にも教えてください」

なにか面白い事でも思いついたのだろうか。嫌な予感しかない。

「ダメです。遊びではないんですよ？」

楓から紙を取り返す。相手のペースに乗ると負けるのは経験からわかつてゐる。こういう時は、強く出た方がいい。

「先に高垣さんを送る事にします。それでいいですね？」

「……わかりました」

楓は、ゆつくりとソファアに行くくと自分の荷物を手に取る。

「場所は、いつもの所ですよね？」

「……はい」

目に見えて落ち込んでいる。言い過ぎてしまったのだろうか？ いや、相手のペースに乗つてはダメだという事はわかつてゐるはずだ。

「では、行きましょう」

◇◇◇◇◇

目的の場所まで着くと確保される。

「よくやったわ、楓ちゃん！」

「武Pゲット！」

346プロダクション近くの居酒屋まで楓を送り届けたわけだが、入り口近くに潜んでいた早苗と友紀に捕まる。

「片桐さん!? 姫川さん!?!」

いきなりの事で状況が理解できない。

「プロデューサーさん、1名ご案内です! キヤハ!」

居酒屋の入り口の方から安部菜々の姿が現れる。既に顔が赤く、テンションが高いのはなぜなのだろうか?

「行きましょう、武内さん!」

両腕を掴まれている状態で、楓に背中を押される。

「ま、待ってください! 私には、まだ仕事が!」

「楓ちゃんから聞いてるわよ？ 勉強なんて大丈夫大丈夫！ なんとかなるって！」

「そうそう！ それよりも飲もう飲もう！ 今日、キャッツの試合もあるから一緒に見ようよ！」

「みんな待つてますから行きますよ、プロデューサーさん！」

「一緒に楽しみましょう！ 武内さん！」

女性とは言え、レッスンで鍛えているアイドル3人には勝てない。仮に勝ても怪我をさせるかもしれない行動はとれない。

（そういえば前にもあつた気が……）

今思うと、似たようなことが前にもあつた気がする。

（勝てませんね……）

無駄な抵抗はやめて従う事にする。彼女達に勝てた事は、今思うと記憶にはない。

◇◇◇◇◇

「……大丈夫ですか？」

オフィスに来た鷺沢文香に来て早々心配される。

「いえ、大丈夫です。少し、飲み過ぎただけですから」

結局、朝方まで飲んでいた気がする。気がするというのは、飲んだ後にそのまま会社に来たからだ。家に帰る時間ももつたないのでオフィスで寝る事にした。着替えなどは予備の物で代用している。

「お水をお持ちしましょうか？」

「お願いします」

武内の言葉を受け、文香は水を取りに行く。

(今日の予定は……)

朦朧とする頭で考える。そもそもなんでこんなに早く文香が来ているのだろうか？
確か、レッスンは午後からだっただけ。では、なぜ此処に？

「お待たせしました」

「ありがとうございます」

文香が持ってきてくれた水を飲み干し、考えている事を聞いてみる。

「すみません、鷺沢さん。今日は、どうしてこんな早くに？」

「……言っても大丈夫でしょうか？」

文香の表情に不安がある。まさか彼女もこんな形で会うとは思っていなかったのだろう。

「大丈夫です。それよりも鷺沢さんの要件の方が気になります」

深呼吸をして少しは体裁を整えるように心掛ける。

「お願いします」

「……実は、レッスンの方なのですが、トレーナーさんの方からプロデューサーさんに見てもらおうように言われました。技術以外の所を見てもらおうようにと」

「そうですか」

レッスンに関しては、今は細かいところの調整をしている。本番までは、このまま続くはずだ。

「それでは、次のプロジェクト・クローネのレッスンには私も顔を出します。そこで、鷺沢さんの様子を見たいと思います」

「ありがとうございます」

文香は、丁寧に頭を下げる。

「他にはありますか？」

「いえ、特にはありません。ただ、その……」

文香は、恥ずかしそうにこちらを見ている。

「お邪魔でなければ此処で本を読んでいてもいいですか？ プロジェクト・クローネの方は閉まっています」

「それでしたら、シンデレラ・プロジェクトの方を使いますか？」

「……いえ、その、此処でお願いします。開くまでの間だけでいいですから」

「わかりました。ご自由にお使い下さい」

「ありがとうございます」

文香はお礼を言うと、ソファの方に行き手荷物を自分の隣に置くと、本を荷物から取り出す。

(次からは、ほどほどにしましょう)

心にそう誓うが、今回も自分のペースで飲ませてもらえなかったので意味もないだろう。

「——あの、プロデューサーさん」

文香の声が聞こえる。

「もし、私もお酒を飲めるようになったら何処か連れて行ってもらえますか?」

文香の方を見ると、手に持つ本で目元以外が隠れている。

「いいですよ。その時は、一緒に飲みましょう」

いつになるかもわからないが社交辞令で答えておく。これから先はまだわからない。

「……楽しみにしています」

酒による痛みと不快感で武内は気づかなかつたが、本越しに文香は少しだけ笑顔で笑っていた。

第30話

鷺沢文香から言われたこともありプロジェクト・クローネのレッスンを見学することにした。既に本番までの調整段階なのでそれほど厳しいものは行っていない。ユニツト間の僅かなズレや個人で感じる違和感を取り除くような段階だ。今日は、衣装合わせを兼ねて衣装を着て本番の時にように披露してもらおう。

「——どうでしたか？」

文香のソロが終わり、曲も止まる。文香が心配そうにこちらを見ているが問題点は見当たらない。しいて言うなら——

「——そうですね。もう少し視線を動かさないようにしてみてもどうでしょうか？」

どうも文香は人と目を合わせるのが苦手だ。何度か視線が合ったがすぐに逸らされた。

「それはさー、大丈夫じゃないの？」

武内の横で同じように文香のレッスンを見ていた塩見周子が寝転がりながらこちらを見る。彼女は、既に今日の分は終わらせている。

「ねー、ふみふみ？」

周子の言葉に文香は顔を隠すように俯く。

「それなら特に言う事はないですね。よかったです、鷺沢さん」

よくわからないが一緒に居る時間が長い周子の方がわかつているのだろう。

「ありがとうございます。すみません、着替えてきます」

文香はそう言うのと小走りでレッスン場から出て行く。

「今度は、私もお願いします」

桶ありすが入れ替わるように武内の前に立つ。

「今度は、ありすちゃんかー。頑張つてねー」

周子が手を振つて声援を送る。

「下の名前で呼ばないでくださいー」

「でも、プロデューサーはOKじゃん？」

「いいんです！ プロデューサーさんは！」

周子にニヤニヤして見られた上に横腹を突かれる。

「うらやましいなく、コノコノー」

どう返せばいいのかわからない。

「Вы начинаете делаться.はじめますか？」

アナスタシアが曲を流すために準備している。

「そうですね。ありがとうございます、準備はよろしいですか？」

「はい。お願いします」

「わかりました。では、アナスタシアさんお願いします」

「Da。行きます」

アナスタシアが曲を流すとありますがそれに合わせて曲を歌いながら振付を行う。ありすは、プロジェクト・クローネの中では正直なところ全てにおいて低いと言っている。ありすの価値は、プロジェクト・クローネの中に一つの色を添えるところにある。本人は文香や速水奏、渋谷凪などの大人らしいクールな女性に憧れているがその姿が愛らしいものであることを本人は知らない。クローネは、ある意味では品格を形としている所がある。ありすは、その品格のあるクローネを親しみやすくなる。背伸びをした少女が居るだけでより親しみやすくなる。このことは本人には言えないが。

「可愛いよね。ううん、もっと可愛くなったよね」

隣で見ている周子の言葉には納得できる。今のありすは、初めの頃に比べると表情が柔らかくなった。

「そうですね。いい笑顔です」

アイドルに慣れたからか？ それとも文香をはじめ多くの人と関わるようになってきたからか？ 理由はわからないが良い傾向だ。

曲が終わり、ありすは一息つく。

「よかったです、ありすさん。ありすさんは、他の方と組んでライブを行います。ありすさんの立ち位置は、全体の調整役となる中央になります。他の方の動きを見るのを忘れないでください」

「ありがとうございます」

ありすは、丁寧な頭を下げる。

「可愛かったよー」

周子の声にありすは、顔を背け替える為に外へと向かう。ただ、その表情は嫌がっているのではなく恥ずかしそうに赤いものだ。

「今度は、アタシの番ね」

部屋の隅で調整を行っていた北条加蓮が最後にやって来る。

「気合十分だな」

「奈緒。レッスンだからって油断しちやダメだよ」

加蓮に付き添っていた神谷奈緒と渋谷凜もこちらに来る。

「プロデューサー。ダメな所があったら言つてね」

「わかりました。アナスタシアさん、お願いします」

気合十分な加蓮の姿を見ると、聞くこちら側も気が引き締る思いだ。



「——どうだった？」

加蓮の歌が終わる。しばらくして曲も終わるわけだがどう言えばいいかわからない。

「……もしかしてダメだった？」

加蓮が心配そうにこちらを見る。

「……いえ、素晴らしいと思います。ただ、少し調整した方がいいかもしれません」

武内の言葉に加蓮は不安を募らせるがそうではない。

「北条さん。一つ聞きますが、物足りなさはありませんか？」

「物足りなさ？」

「はい。もう少しこうあつたらいい。こうしたい、などです」

加蓮は武内の言葉に考え込み頷く。

「ある……かも？　よくわからないけどもう少し頑張れるかもしれないと思うかな？」

本人は気づいていないのだろう。

「北条さん。はつきり言いますが時間がありません。ただ、今の北条さんには余力が見えます。安定を考えれば今のままでいいですが、どうされますか？ 挑戦してみますか？」

「挑戦？」

「少し、内容を見直すという事です。ただ、時間もあまりありませんので大変だとは思いますが。しかし、このまま出すには勿体ないと私は思います」

武内の言葉に加蓮は迷わず答える。

「アタシの返事は決まってるから。少しでもよくできるのならその方がいい。お願い、プロデューサー」

「ここ最近で最も成長したのは、もしかしたら加蓮かもしれない。傍に凜と言うライバルがいるからこそだろう。」

「すぐに用意します」

今は、彼女に合わせるようにこちらにも動かなければいけない。

◇◇◇◇◇

トレーナーと話し合った後、美城常務へと話を持って行く。

「——なるほど。それで、どうする気だ？」

「時間はありませんが、北条さんにもう少し上の段階に行って頂こうと思います」

「主にサビの部分と最後の部分を変更するのがいいかと。少し動きが変わりますので歌声に影響があるかもしれない。それが懸念ではありますが」

具体的な話を武内、トレーナーから聞き考える。

「今度のLIVEは、次への通過点でしかない。だが、その価値はとても高い。より高く階段を上るためにもできる限りの事はすべきだ。任せてもいいな？」

「はい。お任せ下さい」

武内が頭を下げる。

「少し厳しいものになるが問題ないな？」

「はい。すぐに用意させます」

マスタートレーナーも頭を下げる。

「今度のLIVEは、プロジェクト・クローネにとって重要な物になる事を期待している」



とりあえず加蓮の件はマストレの方に任せて今は約束していたことに集中する。

「ここは、こうですよね？」

島村卯月が解いた問題を確認してみる。

「問題ありません、正解です」

「プロデューサーさん、やりました！」

問題ができる度にこんな感じになるのだが順調に進んでいると思う。

「……むうー」

前川みくも反対側で勉強をしている。こちらに関しては猫耳を外し、眼鏡も掛け本気モードで勉強をしている。時々悩んでいるようだが、見ている限り問題はなさそうだ。

「もうダメー、わかんないよー。Pくん、助けてー」

城ヶ崎莉嘉は、これで何度目かのお手上げ状態になる。今回の勉強会の主役は彼女だろう。

「頑張りましょう」

「もう頑張り疲れたよー。ねえ、遊ばない？」

莉嘉が甘えるように上目遣いで迫ってくるがそうもいかない。アイドルをする上で家族の同意を得るには重要な事だ。

「まずは、宿題を終わらせましょう。遊ぶのはその後で」

「Pくんが言うなら頑張るけどさー」

莉嘉は、不満はあるようだがもう一度宿題に向き合う。数分は持つだろう。

「ねえねえ、こつちも助けてよー」

「プロデューサー」

加蓮と奈緒からも助けを求められる。人数が多い今日に限って、新田美波や鷺沢文香、速水奏が居ない。3人とも仕事だ。

「ここと、ここと、ここと。全然わかんないよー」

「私は、ここからここまでがわからない」

どちらも正解しているかはともかく他はできているようだ。

「これを参考に見てみてください」

事前に用意しておいたものを渡す。こういうのも初めてではないので、以前他のアイドルに教えた時に製作しておいた解き方を解説したものを渡しておく。これでダメならその時に改めて教えればいい。

「えー、教えてよー」

「別にいいじゃん。とりあえずやってみようぜ」

加蓮から不満の声は出るが、奈緒と一緒に紙を受け取り勉強を始める。

「プロデューサーって、他の仕事でもやっていけそうだよね」

意外と真面目に勉強をしている多田李衣菜に言われる。ただ、どう返していいかわからない。

「Pくん、助けてー」

再び、莉嘉に助けを求められる。

もしかしたら普段の仕事よりも大変かもしれない。

第31話

北条加蓮の新しいレッスン内容は翌日には考えられ実行された。

「どうだ、やってみた感想は？」

マスタートレーナーに言われ、新しく考えられたダンスなどを試したばかりの加蓮は息を整える。

「——頑張ります」

できるかどうかではなく。簡単か難しいかでもなく。加蓮は、やる事だけを告げる。

「……わかった。但し、こちらに決定権があることを忘れるな。後は任せます」

マストレは、それだけ言うと武内に任せてレッスン場から出て行く。

「元々、北条さんの言われた通り質の高い物を用意していました。今回は、それよりも上の物になります。当然、これ以外にもやらなくてはいけない物もあります」

「——わかってる。でも、これでいい」

意地を張る加蓮に手を貸し、用意されていたパイプ椅子に座らせる。単純な体力的な物に関しては、今までのレッスンの内容を見れば心配はしていない。ただ段階が上がり、動きの一つ一つにより意識を集中する必要がある。精神的な疲れが負担となり加蓮

の体力をいつも以上に奪っている。

「自信、あつただけだな……」

加蓮は、疲れた身体を休めながら渡された飲み物を口に含む。

「まだまだ上があるんだね。もつと上が」

言葉に、目に、力は残っている。

「はい。上は、まだ遠くまであります」

「そつか。なら、こんな所にいる訳にはいかないよね、プロデューサー？　ちゃんと最後

までアタシを上まで連れて行ってね？」

「もちろんです。時間もないので、厳しくいきたいと思います」

「それをお願い。手を抜いたら許さないからね？」

北条加蓮は、上を目指す。今の彼女ならあと僅かな時間でも物にするだろう。

◇◇◇◇◇

「ねえ、ここはどうかかな？」

レッスンを終え、休憩を兼ねて346プロダクション内にあるカフェに行く事になった。加蓮は、レッスン中に撮っておいた映像を見ながらフライドポテトをつまんでい

る。

「まだ大きくする必要がありませんね。以前に比べて、大きく動けるようにはなりました。北条さんの丁寧な動きも残ったままで。ただ、今回はよりパフォーマンスを意識したもものになります。会場の広さを意識した物に。多くの人に見てもらえるように」

「今度皆で、会場でリハするんだよね？」

「はい。実際に現場で行います。機材などはまだありませんが全体の動きを把握するのに必要ですから。できればそれまでに最低限の動きは欲しいですね」

加蓮は、ポテトを手に取り遊ぶ。

「……間に合うと思う？」

不安がないわけじゃない。実際、初めてではあるが上手く行ったわけではない。

「私は、北条さんならできると思います。それともやめたいと思いますか？」

「ヤダ！ 絶対にやる！ だから協力して？ プロデューサーとならできると思うから」

「なら、前に進むだけです。私は、北条さんが前を向いて進む限りその道を進むお手伝いをします。それが私の役割ですから」

「頼りにしてるよ、プロデューサー。ここまでアタシを歩かせたんだから、最後まで責任とってもらわないとね。これ、お礼にあげる！」

加蓮は、手に持っていたポテトを武内に差し出す。

「あーん」

「……頂いておきます」

武内は、ポテトを手にとると飲んでいたコーヒーの載る皿の上に置く。

「もう、女の子に対して失礼だよ？　そこは、ちゃんと食べないと」

「……すみません」

加蓮は、楽しそうにもう一度同じことをする。結果は言うまでもないだろう。

◇◇◇◇◇

レッスンで撮った物を加蓮に渡し家まで送る。本人は、まだ居ようとしたが無理をし
そうなので家に帰した。今日は、イメーヅトレーニングだけで後は休んでもらう。

(どうしますか……)

オフィスに戻り、加蓮のスケジュールなどを確認する。できる限り疲労を残さずに本
番に臨めるように。

「どうなのかしら加蓮は？」

「私も気になるかな？」

オフィスには、プロジェクト・クローネのアイドル達が居る。その中でも速水奏と渋谷凖は加蓮の事を気にしているようだ。

「本番までには間に合わせます。場合によつては、今までの物を行う事も考えてはいませんが、本人の意思は固いです」

「だろうね。加蓮は、最後まで諦めないと思うよ」

「そうね。私は話だけしか聞かないけど、必死な感じは伝わってくるわ」

「ちゃんと見てあげてね？ 無理させて何かあつたら許さないから」

凖に念を押される。

「わかっています。必ずステージに立たせて見せます。北条さんが望む状態で必ず」

「なら、いいけど。それと、こつちも忘れないでよね？」

「私も今はダメだけど、終わつたらお願いね？ これでも期待して待っているのよ？」

奏に関しては、ライブが終われば正式に担当になる。詳しくはその時に改めて行う事になるので今は他を見る。ライブに参加する他のアイドル達は、今までと内容が特別変わる事はない。このまま最後までできる事をしていくだけだ。今は、できれば加蓮の事に時間を割きたいのが本音だ。ただ、他にもやっておく事がある。

「速水さんは、ライブが終わりましたら改めて話ししましょう。他の方に関しては、今まで通り何かありましたらお願いします」

今までもそうだが相談はされている。だから問題はないと思う。

「はいはい！ シューコちゃん、おなか空いたーん。なにか食べさせてー」
塩見周子が手を上げる。

「そういえば、少し空いたかな？ 私もなにか食べたいかも」

神谷奈緒も周子に続く。

「ありすちゃんは、大丈夫ですか？」

「わ、私は大丈夫です！ 文香さんこそ大丈夫ですか？」

「そうですね。私は、大丈夫です」

こっちでは、鷺沢文香と橘ありすがお互いに確認している。

「申し訳ありません。今日は、用事がありますので。それと、アナスタシアさん」

「私ですか？」

突然名前を呼ばれ、アナスタシアはきよんとした表情になる。

「何時でもかまいませんので少しだけ話をさせて下さい」

「わかりました」

「もし邪魔なら出てくけど？」

「いえ、急ぎではありませんので」

凜からの申し出は断っておく。内容は、ライブ後の事だ。他のアイドルにも話す事に

はなるが、アナスタシアは一人で既にやっている為話がしやすい。それだけの理由なので急ぎはしない。むしろ、アナスタシアの都合の良い時の方がいいだろう。

◇◇◇◇◇

アイドル達は、下のカフェに食事に行った。その後、アナスタシアだけがオフィスに顔を出す。

「話の内容は、簡単な物です。今度のライブの結果次第ではありませんが、アナスタシアさんに新曲が提供されるかもしれません」

「新曲ですか？ 本当なら、Я счастлив。とても嬉しいです」

「正確には他の方々にもある話です。もちろん、結果次第ではありませんが。ただ、アナスタシアさんの場合は選ぶ必要があります」

「選ぶ、ですか？」

「新田さんとラブライカで曲を出すかです。ラブライカの方でもそろそろ新曲をと考えていました。それで、相談なのですがどうされますか？ ソロで出すか？ ラブライカで出すか？」

アナスタシアは、少し考えるが答えはすぐに出る。

「美波と、Хотите Sing。一緒に歌いたいです。共に同じ場所です」

両手を胸にあて、目を閉じる。そこには、新田美波とのステージの光景が浮かんでい
る事だろう。

「では、そのように動きます。ただ、この話は結果次第になりますので秘密にしておい
てください。新田さんはもちろんですが、プロジェクト・クローネの方達にも。本当なら
アナスタシアさんにも言いたくはありませんでした。プレッシャーになりますから。
ただ、新田さんとやる場合は調整が必要ですので事前にやっておく必要があります。そ
のため、こうしてお話の方をさせて頂きました」

「Спасибо。ありがとうございます、プロデューサー。私、頑張ります！」

アナスタシアに関しては、このまま問題なく結果を残してくれると信じている。彼女
は、既に大きな冒険を経験している人間だ。

「頑張ってください。アナスタシアさん」

美波とのライブを考えているのかアナスタシアの表情はとても華やかで綺麗だ。こ
の後、美波に隠し事がバレたのは予想外ではあったが。

第32話

《おまけパート⑤（橘ありすヤンデレ風味）》時系列とか関係ない本当のおまけ。息抜きも必要だからね。

「プロデューサーさん」

「どうかされましたか？」

「その、お願いがあつて来ました」

オフィスに来た橘ありすは、そう言うともジモジしながらこちらの様子を窺っている。

「お願いですか？ 私にできる事であれば言って下さい」

「本当に、いいんですか？」

「はい」

少し考えるようにありすは俯くと、意を決して口を開く。

「私の事を『ありす』と呼んでくれませんか？」

「橘さんの事をですか？」

ありすは、顔を赤くして頷く。

「橘さんは、その……下の名前で呼ばれるのが苦手と聞きましたが違いますか？」

「確かに嫌です。クラスの子とかにからかわれたりした事があるので本当なら嫌です。でも、いつまでもこのままだとダメだと思っんです！」

口調が徐々に強くなる。

「下の名前で呼ばれるのは嫌です。でも、両親がつけてくれた大事な名前でもあります！ だから好きになりたいんです！」

ありすは一步前が出る。ふんす、と鼻息が荒い気がする。

「そのお考えは素晴らしいとは思いますが、ですが、橘さ——」

「——ありすです！ ありすと呼んでください！」

更に一步前が出る。

「で、ですが、その……橘さんはアイドルとして一人前に働かれています。その方を下の名前で呼ぶのは……」

「プロデューサーさんは、私がこのまま下の名前を呼ばれるのが嫌なままでいいんですか？ プロデューサーさんは、私の味方だと思っていたのに……」

ありすは、顔を隠すように後ろを向く。武内には、顔を手で抑え震える後姿が泣いているように見える。

「……わかりました。その代わり、仕事の時以外でお願いします。仕事の時は、体裁など

がありますので。……あります。これでいいでしょうか？」

未だに背を向けるありすに問い掛ける。

「……あります。ありすと呼んでください」

困り果て、癬である首をさする癬が出る。

「流石に呼び捨てはまず——」

「——私の事なんてどうでもいいんですね……うう……」

身体が上下に揺れる。微かに泣き声のような物も聞こえる。

「……あります。これでいいでしょうか？」

他に名案も浮かばないのでここは従う事にする。あくまでも一時的な物だろう。自分の名前を呼ばれる事に慣れる間だけの。

「……もう一度、お願いします」

「あります。これでよろしいでしょうか？」

「はい。えへへ……あります。いいですね。ありますですか……えへへ」

どうやら泣き止んでくれたようだ。

「あの——」

機嫌が良くなったありすがこちらに振り返る。ただ、そこで違和感を覚える。泣いていたはずの彼女の表情はとても華やかで、泣いていたような感じが一切見られない。

「今度は、目を見てお願いします!」

デスク越しとは言え、限界まで前に出たありすは、デスクに乗るような形でこちらに顔を、目を向ける。

「お願いします、プロデューサーさん!」

「……あります」

「もう一度!」

「あります」

目を見ながら言われて満足したのか? ありすは、歓喜に震えている。

「いいですね! いい気分です!」

更に鼻息が荒くなるのを感じる。

「落ち着きましょう、たち——」

「——あります! もう、忘れたんですか!? プロデューサーさんは、ダメな人ですね。でも、大丈夫です。ありすと呼べるようになるまで何度でも聞いてあげますから!」

それからしばらく、ありすが満足するまでありすと呼び続ける事になる。

◇◇◇◇◇

(大人組との飲み会②) 片桐早苗、姫川友紀、川島瑞樹、高垣楓、安部菜々(ウサミン17歳)

「最近、大変なのね。友紀ちゃん、枝豆取って」

「はい、早苗さん。武Pは、昔から働き過ぎだからねー」

「少しは息抜きしないとダメよ? はい、これ。身体に良いサプリメント。若返りの効果もあるのよ」

瑞樹から愛用のアンチエイジング作用のあるサプリメントを分けてもらう。

「仕事ですから」

「そんな事だと疲れて倒れちゃいますよ! 今日、ナナがたくさんご奉仕してあげますから休んでくださいね、ご主人様!」

そう言つて、ビールをグラスに注いでくれる。

「疲れには、温泉が一番ですよ? 美味しいお酒があればもつと良いですね! 何処に行きましょうか?」

楓は、楽しそうに鞆から温泉旅行のガイドブックを取り出す。

「腰痛や筋肉痛に効くところをお願い。最近、レッススが堪えるのよ」

「茜ちゃんと一緒だとキツイよね。いつもの倍以上する時あるもん。あと、レッスンは

午後からにしてほしいかな?」

「友紀ちゃん。午前中にレッスンがある時は前の日は抑えておきなさいよ? マストレさんが本気で怒るから」

「いやー、この前も大変だったなー。あたしだけ居残りレッスンだったから。あれっ? もう、ビールがない?」

頼んだばかりのビールが空になっているのを不思議に思っただけ居残りレッスンの中を覗き込む。

「姫川さん。確か、明日もレッスンがあると書いていませんでしたか?」

武内の記憶だと、友紀がそう言っていた気がする。

「友紀ちゃんは、ここからはお酒無しね」

「瑞樹さん。それだけは許してよーなんでもするからー」

「ダメよ。少しは、アイドルとしての自覚を持ちなさい」

「そうそう。それと、女の子がなんでもするとか簡単に言っちゃダメよ。友紀ちゃん可愛いんだから男が黙っちゃいけないわよ。ねえ、武P?」

「……私に振らないでください」

「えー、あたし武Pに何かされちゃうのー?」

そう言っただけ、友紀は武内の腕に抱きつく。

「た、大変です?! これ以上は、ナナにはまだ早——いえ、ここはナナも乗るべきなんで

しょうか？ 最近、実家からの催促が増えてきましたし……ええい！ ウサミンも行き
ますよー！」

反対側から菜々に抱きつかれる。友紀と菜々に挟まれる形になるわけだが、嬉しいよ
うな、酒臭いような。

「……なんてどうでしょうか？ 近くに酒蔵もありますのでオススメですよ？」

この状況でも冷静に場所を選んでいた楓がオススメを見せる。

「あらっ？ 近くにワインの酒造所もあるのね」

「あたしは、温泉入ってお酒が飲めれば何処でもいいわ！」

「じゃあ、決まりですね。スケジュールの方は任せてもいいですよね？」

楓は、武内に言うが――

「きやあー！ 武Pのエッチー！」

「そこはダメなんですよー！」

両腕をガツチリと掴まれ、身動きが取れなくなつた武内は抵抗することもできずにそ
れを受け入れている。

「私の事は気にせずに皆さんで行って下さい」

「むう、そんな事を言うのはこの口ですか？」

身動きが取れない武内の口を楓は、人差し指で塞ぐ。

「ダメです。行きます。いいですね？」

否定はしたいが、下手に口を動かすと楓の指に今以上に触れてしまう。

「黙秘は、肯定とみなす！ 武Pも追加で！」

「強引だけどエスコート役は必要よね。じゃあ、調べておきましょう」

「やったー！ みんなで旅行だー！」

「そうです——ハッ!? ウサミンの秘密がバレる危機では!？」

「みんな、菜々ちゃんの秘密知ってるけどね。ほら、菜々ちゃんも飲んで！」

「すみません、早苗さん。ゴクゴク、ぶっは——！ 五臓六腑に染みわたりますね——！」

早苗にグラスに注いでもらったウサミン星特製炭酸麦茶を菜々は一気に飲み干した。

こんな感じの一コマがあってもいい気がする。

第33話

シンデレラ・プロジェクトの方で行われている実験は良くも悪くも順調だ。新田美波、諸星きらり、前川みくの頑張りによつて結果は出ている。ただ、プロジェクト・クローネの方で行われたような物には遠く及ばず緩やかな物で個人差もある。

(新田さんの調子が良いですね)

実験内容を見ている訳だが美波の動きが一番良い。これに関しては、主にアナスタシアが原因だろう。彼女が美波にラブリカでの新曲があると話してしまったからだ。どうも二人でいる時に動揺してしまい美波に問われてバレたそうだ。アナスタシアが隠し事をできない性格なのもあるのだろうが、二人の仲はそれだけ深い物とも言える。予想外ではあつたが良い方に働いているのなら良しとしておこう。

「今日は、ここまでにしておきましょう」

武内の声で実験が終わる。

「皆さんの動きは良くなりつつあります。これも皆さんの頑張りによるものだと思ひます」

三人は、汗を拭き、飲み物を飲みながら聞いている。前に比べると慣れたからか少し

はマシになっただろう。

「ねえねえ、Pちゃん」

「なんでしようか？」

「今度、みく達のLIVEはいつになるの？」

「ライブですか？」

「もうそろそろクローネのみんなのLIVEがあるでしょー？　きらりん達もしたいなーって思うにー」

全員ではないがプロジェクト・クローネの方でライブがあるので意識しているのだから。少し困ったがどうすべきか？　美波の方に視線を移す。

「他の皆も気にしています」

「そうですか」

美波には、少しだけ話をした。アナスタシアから新曲の話聞いたこともあり改めて話す必要があったからだ。それでその時にもう一つの方の話もしてもある。

「実は、シンデレラ・プロジェクトの方でもライブは考えています。ただ、時機に關してはもう少しだけ待ってください」

これに關しては、主にアナスタシアと渋谷凜のプロジェクト・クローネの方での結果による。ラブライカで新曲を出す場合は、ライブで新曲の発表を行いたい。凜に關して

は、アナスタシアにした話をライブ後に行く。凜に関していえば、トライアドプリムにニュージェネレーションの二つの選択肢があるからだ。もちろん、ソロでの道もある。そのため、最終的には凜の結果を待つ形でライブをと考えている。

「本当にあるの？ みく達LIVEができるの？」

「うつきやー！ Pちゃん、すっごーい！ きらりんうれしくてハピハピだよー☆」
「おそらくですが、プロジェクト・クローネのライブが終わった後になります。その後に企画を正式に通しますのでその時に改めて皆さんにはお伝えします。ただ、あまり期待させてもどうかと思いますのでここだけの話にしておいてください」

「わかったにゃ！ ……でも、李衣菜ちゃんには言っつていい？ 気になつてみたいだから？」

「きらりんも莉嘉ちゃんとみりあちゃんには教えてあげたいかなあ？」

二人としては、普段から行動を共にする機会が多い相手に教えたいのだろうが……美波に助けを求めるように視線を送る。

「二人とも、プロデューサーさんから正式にあるまで待ちましょう。変に期待させてもよくないと思う」

「美波ちゃんが言うなら……」

「わがまま言っつてごめんなさいだに……」

「皆さんのお気持ちは良くわかります。ただ、先の事を気にしては足元が疎かになりません。確かにシンデレラ・プロジェクトでのライブはありませんが、各ユニットではあります。できれば、その一つ一つに意識を集中してほしいと思います」

「でも、L I V Eはあるんだよね？」

「はい。それに関しては、約束します」

「だったら、今を頑張るだけにや！ もつともつと頑張つてL I V Eにたくさん人が来てくれるようにみくは頑張るよ！」

「きらりんもみんなをハピハピさせていーっぱい人を集めちゃうよおー。それで、もつとみんなでハピハピしたいなあ☆」

「私も頑張ります。シンデレラ・プロジェクトのリーダーとして！」

新しい目標を知ったからかやる気が出たようだ。ただ、まだ秘密にしておかなければいけないので他の人達には申し訳ないと思う。

◇◇◇◇◇

今日も北条加蓮のレッスンはある。これからは、ライブが行われるまで毎日あるわけだが体調管理だけは気にしたい。

「もう大丈夫だよ」

レッススが終わり、家に帰る途中に加蓮の要望で途中にあるファミレスに寄る。当分の間、レッススが終わればそのまますぐに帰る事になっている。

「確かにアタシは、あんまり身体は丈夫じゃないけど、今はそんなことないのに」

「レッスンで体力面の心配がなくなっているのはわかります。ただ、今行っているのは通常よりも内容が濃いものとなっています。短期間でものにするために」

加蓮もその辺りは理解しているようで、わがままや文句を言ったりはしない。彼女自身も誰よりもそれを実感しているのだから。

「でも、やらせてよね? ……やらせてくれるよね、プロデューサー?」

時々自信が無くなる時がある。彼女もまだ子供だ。

「北条さんが望むことを私は手伝います。必ず北条さんが望む状態でステージまで送り届けます。それが、私の役割ですから」

「……なんだか不思議だよね? プロデューサーに言われると安心する。なんだか凜が言つてた事もわかるよ」

「渋谷さんが?」

「うん。あんまり人の事だから言えないけど、今は信頼してるみたい。何があつたかは話でしか聞かないからわかんないけど、それでも今はプロデューサーの言葉なら信じら

れるみたいだよ?」

思いがけない言葉に嬉しくなる。こうしてアイドルから信頼してもらっていると聞くと救われた気持ちになる。

「アタシもプロデューサーの事は信頼してるからね? よくわからないけど今は実感があるんだ。階段を一つずつ歩いてる気がするんだよね。こう、一歩ずつ前に。前は、アイドルになれたのが嬉しいだけだった気がする。でも今は違う。今は、アイドルをやってるんだなって気がする」

「それは、良い事だと思います。自分に自信がある証拠ですから」

「そうなのかな? でも自信か……少し前のアタシにはなかったのかもしれないね。アタシ、身体が生まれつき弱かったからなにもできないって思ってたから。どうせ、途中でダメになるって」

加蓮は、遠くを見ている。過去の自分を。詳しくは知らないが、物心つく頃から入院を繰り返していたそう。やりたいことも上手くできず、徐々にする事もなくなっていくって。

「今の北条さんなら大丈夫です。共に道を歩く仲間達が心を支えてくれます。私も傍で必ず支えます。北条さんが諦めない限り、前に進めるように」

「……ねえ、プロデューサー」

加蓮がこちらを見る。自分の目を。

「プロデューサーは、凛のプロデューサーだけど、他の人達のプロデューサーだけど、今だけは……私と居る時だけはアタシだけのプロデューサーで居てくれない？ そうだったら今よりも安心できると思うから……ダメかな？」

どう答えるのが正解なのだろうか？ 答えがあるのかもわからない質問に迷いはする。ただ、一つだけ言える事はある。

「私は、北条さんの担当のプロデューサーです。それだけは変わりません。これでは、答えにはなりませんか？」

加蓮は、武内の言葉をかみ砕き飲み込む。自分の中にゆっくりと溶かし入れるように。

「……それでいいよ。今は」

それから他愛もない話をする。特に何かがあるような話ではない。ただ何故だろう？ 加蓮の姿が少しだけ変わったように見えたのは？

第34話

いよいよ担当しているプロジェクト・クローネのアイドル達のライブが近づいて来た。今日は、実際に会場となるステージでリハーサルを行う。まだ機材などはないが、それでも頭の中には本番と同じステージがそこにあるように見える。

「今日は、本番を想定して行います。既に皆さんの実力なら問題なく行えるはずです。リハーサルだとは思わず全力でお願いします」

武内の言葉にアイドル達は返事をして、いよいよリハーサルが始まる。

内容は、以前より変更が少しだけある。一つ目は、最初に行われる全員でのステージの数を一つ増やすことになった。これに関しては、予想よりも全体的に実力が付く形となったからだ。武内をはじめ、美城常務やマスタートレーナーの予想以上の結果を彼女達は達成した。二つ目は、北条加蓮の内容が変わったために順番を入れ替える事になった。これに関しては、渋谷凜、神谷奈緒、塩見周子の3人が予定通り調整役に回る事になったので問題なく進められるだろう。

「——君はどう思う？」

隣でステージを見ている美城常務に問われる。

「予想よりも仕上がりは良いと思います。問題を上げるとするならば北条さんですが、トレーナーの方とも話ししましたが間に合うと思います」

「報告通りのようだな。だが、最後まで気を抜かないように。舞台は終わるまで何が起ころかわからないものだ」

「わかっています」

二人はそれだけ話すと再びステージへと視線を移す。今も彼女達は、自分のできるところをしている。最高のステージを創るために。

◇◇◇◇◇

簡単な打ち合わせを行ってから通しのリハーサルは予定通り終わる。この後は、演出家やトレーナーなど多くのスタッフ達を交えて話し合いが行われる。特に音や光などは実際にやってみないとわからない所が多い。今回も調整が必要なようだ。それにステージでやってみて動きなどを見直す話も出る。これも実際に行ってみた上での話だ。

(どうしますか……)

話し合いの内容をまとめながら考える。主に考えるのは、加蓮の事だ。これ以上の負

担は彼女の夢を壊しかねない。だが、彼らもプロである以上は簡単には妥協しない。

「——今は、ここままでにしておこう。詳しくは、改めて行う事にする」

美城常務の言葉で話し合いは終わり、休憩していたアイドル達の下へと向かう。

「簡単にですが、話し合いの結果をお話します」

まだ決定ではないがアイドル達に話を行う。変更点は、大きい物はないが逆に言えば急に変更したことにより本番で間違える可能性があるような物ばかりだ。別に問題になるような物はないが、だからといっていいわけではない。間違いはステージの質を悪くし、与える印象もその分悪くなる。今回のライブには多くの意味がある。それを考えれば間違えてはいけない。

「撮ったのは見たけど、プロデューサーから見えてどうだった？」

「私も気になるな」

休憩中にリハーサル内容を彼女達は見ていた。他の人間の意見も気になるが、近くで共に道を歩んだ武内の評価が一番気になるのだろう。全員から視線が集まる。

「何人かに関しては、問題はないと思います。ただ、今回新たに加わる修正点を含めて考えるのなら安心はできません。それ以外の方に関しては、おそらく自分自身が一番わかっていると思います。後は、その部分を直すだけだと思います」

武内は、話の途中で加蓮と目が合う。それ以外の人間は、他でもない加蓮だ。

「まだ時間は残っています。休憩の後、個別で行っていきますので呼ばれたらお願いします」

◇◇◇◇◇

残りの時間は修正点が見直された順番で行われる。全員で行うものから先に話し合われ、次に複数のユニット。最後はソロになる。一度で決まれば幸運。数度で決まれば上出来。今回で決まれば普通と言ったところだ。

「ねえ、どんな感じなの?」

既に見直しを含めて終わっている凜が隣に来る。

「修正点に関しては試している部分があります。再度持ち帰り検討が行われると思いますが、概ね順調だと思います」

「じゃあ、私はどうだった?」

「渋谷さんに関しては、特に不安に思う所はありません。ニュージエネレーションとの掛け持ちでここまで安定して結果が出せれば十分過ぎる物だと思います」

「ふーん。そっか」

凜の表情には自信が満ちている。話し合いの時でも凜に関しては良い意味で話題に

は上がらなかった。

「でも、ちゃんと見てよね？ 私のプロデューサーなんだから」

「わかっていきます」

二人はそれだけ言葉を交わし、今も行われているステージに目を向ける。

「聞いてみていい？」

「なんででしょうか？」

「加蓮はどうなの？ 最近、力を入れているみたいだけど？」

凜は、今も行われている加蓮のステージを見ている。その言葉にはどんな思いが含まれているのだろうか？

「予想よりも素質のある方だと思えます。もう少し早くレッスンを受けられていたら渋谷さんと同じだったかもしれない」

「やっぱりそうか」

凜も気づいているのだろう。加蓮が成長している事に。それこそ自分と変わらない程に。

「これでまだなんだよね？」

「そうですね」

二人の目に映るアイドル北条加蓮のステージ。まだ完成ではないが、それでも今まで

のステージでなら十分通用するだけの輝きがそこにはある。だが、まだ輝けるのはわかつている。だからこそ今は加蓮に時間を割きたいと思う。

「加蓮はさ、私をライバルだと思ってくれてるんだよね？ でも、今は私も思うよ。もちろん、他にも居るけどね。ただ——」

視線だけがこちらを見る。

「プロデューサーが気に掛けてるのが嫌かな？ 最近、加蓮しか見てないでしょう？」

心を見透かされた気がする。思わず息をのむ。

「私も見てよね？ 私は、プロデューサーのアイドルなんだから」

凜はそれだけ言うとは処かへ行ってしまふ。

「……気を付けないといけませんね」

自分は、北条加蓮だけの担当ではない。他にも多くのアイドルを担当している。昔の記憶を思い出す。忘れる事の出来ない記憶だ。

「今度は、見失いたくはないですね」

目の前のステージに居るアイドルも。別の場所に居るアイドルも。自分の担当するアイドルだ。それを忘れては昔の二の舞になる。自分の思うものと、彼女達が思うものは違うのだと知ったはずだ。

◇◇◇◇◇

リハーサルが終わったので、現場からそれぞれ家に帰した。今日は、レッスンはじめの仕事なども入れていない。今は、オフィスで今後について考えている。リハーサルを見る限り、及第点は超えるだろう。そうなると忙しくなるはずだ。何人が、幾つのユニットが曲を得るかはわからないがその辺りも考えなければいけない。それこそシンデレラ・プロジェクトの方も合わせて。

(人員が必要ですね)

今のスタッフの数だけでは足らなくなるだろう。美城常務に要請を出しておかなければいけないが、それだけで問題にはならないだろう。問題があるとすれば――

「――時間ですか」

関わりが減るのではできれば避けたい。ここまで信頼のある関係を築けているのだ。もう失敗はしたくない。

「――プロデューサーさん。今、大丈夫ですか？」

扉が叩かれ、島村卯月が顔を出す。

「どうかされましたか？」

頭の中身を切り替えて対応する。

「えっと、これ……みんなで作ったんですけどプロデューサーさんにも食べてほしくて」
卯月の手には、小さな包みがある。可愛らしい包装紙で作られ、丁寧にリボンが付
けられている。

「私にですか？」

「はい！ いつも私達の為に頑張ってくれているので」

卯月がこちらまで来て渡してくれる。

「ありがとうございます」

「感謝するのは私の方です。じゃあ、邪魔しちゃうといけなから帰りますね」

卯月はそれだけ言うと部屋から出て行こうとする。

「——つだけいいですか？」

部屋から出るところで立ち止まり振り返り向く。

「これからもよろしくお願いしますね、プロデューサーさん！」

卯月は最後にその言葉を残して部屋を去る。

「……………」

卯月の言葉にすぐに返せない自分が居る。

手には、卯月の気持ちに籠った物があるにも関わらず。

「……………私も前に進みたい」

考えていた内容を全て消す。

「彼女達の思いを、願いを叶える為に」

卯月から貰った物を大切に目の見える所に置き、改めて作業を行う。シンデレラ・プロジェクトのプロデューサーであり、プロジェクト・クローネのプロデューサーとして。

第35話

本当なら他にもする事はある。だが、それでも今の気持ちに嘘はつけない。全員ではないが、シンデレラ・プロジェクトのアイドル達のレッスンをみる。別に今までも見ていなかったわけではないが、どこか心は別の所にあつたのかもしれない。

「もう疲れたー」

「私も……もうダメです」

「レッスんってこんなキツイもんだつた？」

「みんな、ふがないにゃ！」

本田未央、島村卯月、多田李衣菜、前川みく。この4人のレッスンをしている訳だが普段の物とは少し内容を変えてある。主に実験で試している物を加えてみたが結果は一目瞭然だ。みく以外の3人は、疲労により床に座り込んでいる。

「やっぱりレッスンの違いなのかな？ 身体よりも頭が疲れた感じがする」

未央は、座り込んではいるが体力的には余力が残っているのだろう。気分転換に身体を動かしている。

「私は、身体も疲れました」

「私も同じ」

未央は、体力だけなら十分ある。それこそ個人で追加してやっている物がなければ実験にも参加できるほどに。それに比べ、卯月と李衣菜は体力方面に関しては普通ぐらいだ。

「さすが、Pちゃん！ みく達がやって来た事は無駄じゃなかったんだね！」

普段は、プロジェクト・クローネと比べていた為に実感が湧きにくかったのだろう。それに比べると共に歩んでいた者達だからこそ実感も湧きやすい。少しだけ他からの視線が冷たい気がするけど。

「普段行っている物よりも意識的に動作を行いました。それにより慣れるまでは上手く身体を動かさずにいつも以上に疲れるはずです。ただ、これが自然に行えるようになれば更上の段階へと行くことができます」

今行ったレッスンはダンスだけだが、本来なら歌を歌い、尚且つステージでのパフォーマンスも追加される。身体に覚えさせることは回数をこなせばできるようになるだろう。だが、質を高めたまま行うにはそれだけでは足りない。

「シンデレラ・プロジェクトのレッスンは、皆さんの個性に合わせて行われています。言い換えれば、長所を伸ばす物です。ですが、上に行くためには苦手な物もできるようにする必要があります。今までは、長所を伸ばす過程で短所も行ってきましたが、今日か

らは短所を重点的に行つていきます」

「ここまでは、これから全員で行うもの。ここからは、個別に考えた物をやつていく事にする。」

「本田さんは、動きの一つ一つを見直す形で行つていきます。元々ダンスに関しては適正があると思いますが、それ故に感覚に頼るところがあります。才能と呼べるものが、複数で行う場合にはズレになります」

「前から言われてるから気を付けてはいるけど、今日みたいのだとやっぱり周りが見えなくなるな」

未央は、個人でなら問題なくダンスを踊れる。才能とも呼べる感覚を持つ彼女はダンスに自分の色を付ける事が出来る。ただ、他の人と組んで行くと未央の色で相手側の色を邪魔してしまう。上手く混ざり新たな色を生む必要がある。

「島村さんは、考えている事と身体に差があると思います。その差を埋められるように特別な物を用意しました」

「特別な物ですか？」

「主にスポーツ選手が行うものです。詳しくは改めて説明します」

「頑張ります！ 頑張つて、プロデューサーさんの期待に応えます！」

卯月に関しては、おそらく普通だろう。特別ダメと言う訳ではないが、より高度な物

になると身体が付いていけなくなる。別にダンス以外に重点を置けばいいだけの話ではあるが、ニュージエネレーションの未央と渋谷凪はダンスの才能がある。二人の長所を卯月のために潰す事はできない。だからと言って、卯月はニュージエネレーションには必要な人間である。どうかして二人に追いついてもらいたい。

「最後に多田さんですが……」

正直、どう言えばいいか困る。

「……あれっ？　もしかして、私って酷いの？　嘘だよね？」

武内が言葉を詰まらせたことにより李衣菜の表情が不安からか青くなる。

「いえ、その……多田さんは、別のレッスンも行っていますのでどうしても他の方と差が出てしまいます」

最近、アイドルである木村夏樹と共にギターのレッスンを受けている。李衣菜は、ロックが好きなので楽器の演奏がしたいと要望があった。そのため他のアイドル達とは違い演奏のレッスンも組み込まれている。ただそうなると必然的に通常のレッスンの量が減り差を生んでしまう。

「最近、リーナちゃんレッスンに身が入ってないにや。ずっと一緒にやってるからみくにはわかるよ」

武内の言葉よりも一緒にレッスンを受けているみくの言葉の方が李衣菜には重いだ

ろう。落ち込み過ぎて今にも泣きだしそうだ。

「どうすればいいんですか、プロデューサー」

李衣菜にその気がなくても他にやる事が増えればその分意識も分散する。今回は、それを自覚するいい機会になったのかもしれない。

「木村さんと行っているレッスンは重要ですので今のままでいいと思います。ただ、やる事が増えればそれだけ意識が分散しやすいものです。その事に気を付けてみてください。多田さんは、とても良い耳を持っています。リズム感に関してはとても素晴らしい物を持っています」

「本当ですか?」

縫うような目で見られる。

「はい。これからも前川さんと一緒に頑張ってください。量が減ったとしても意識を強く持つて行えば結果に繋がりますから」

「リーナちゃん。みくと一緒に頑張ろう?」

「うん。頑張る」

落ち込んでいた李衣菜を励ますようにみくが優しく抱きしめ頭を撫でる。ケンカもよくするが、なんだかんだ仲の良い二人で安心する。



レッスンを見終わり、北条加蓮のレッスンに付き合おうと部屋を出ると途中で加蓮と出会う。どうやら待っていたようだ。

「お疲れさま」

そう言うと、加蓮は買っておいいた缶コーヒーを武内に渡す。

「ありがとうございます」

「うん、いいよ。いつもお世話になってるから。それよりもどうだった？ シンデレラ・プロジェクトの方は？」

「そうですね。少しずつですが前に進んでいると思います」

「そっか。まあ、聞かなくてもわかるけどね。プロデューサーが担当してるんだもん。でも、これからはアタシを見てよね？ 新しくいろいろと増えたから大変なんだよ？」

結局、加蓮にも追加や変更があった。最終的には、本番前日で改めて確認することになるがそれまでには仕上げておきたい。

「では、早速行こうとしましょう」

「うん、一緒に行こう」

加蓮は、武内の横に付いて共に足を進める。その表情は、これから厳しいレッスンを

受ける者とは思えないほどに華やかな物だ。

◇◇◇◇◇

《裏設定①》

この作品の設定の紹介を一つ。

既にわかっている方もいると思いますが、武内Pは楓達が行っていたステージである最初の舞踏会を創った内の一人です。

今西部長の下で行われた『終わらない舞踏会』と呼ばれるプロジェクトに担当であったアイドル高垣楓と共に参加する所から物語は始まります。

そこは、誰もが主役になれる場所。誰もが物語のシンデレラとして、王子として夢のような舞踏会に参加できる場所。決して終わる事の無い夢のような世界を創るプロジェクトが今のアイドル事業部の基になっています。実際、現在の346プロダクションの主なアイドル達はこのプロジェクトの参加者になります。

武内Pは、そのプロジェクトの一員として結果を出していきます。ただ、その過程で彼は必然的にただのプロデューサーではなくなります。部下を持ち、役割も増え、アイドルと共に歩くだけのプロデューサーではいられなくなります。

そして、失敗を犯し表舞台から消えます。

その後は、裏方として現場を支えながら過ごしていくのですが、今西部長からも一度プロデューサーとしてアイドルを導いてみないかと誘われます。

その後は、アニメ本編に繋がる形です。

元々は、前作を書いてから書く予定の物だったので少し内容に変更はありますが概ねこんな感じですよ。あくまでも二次創作ですので多少は目をつぶって下さい。

第36話

本番に向けてすべての者達が動いている。既に会場には必要な機材や備品などが運び込まれている。飾りつけなども落ちたり倒れたりして危険かもしれない物以外は既に設置されている。アイドル達が着る衣装なども点検は済んでいる。これから本番が終わるまでは気を抜けない時間になる。

「——どうですか？」

武内は、会場内の確認から戻るとマスタートレーナーにアイドル達の状況を聞く。

「予想通りと言えるだろうな。北条の仕上がりは正直なところ完全とは言えない。だが、代わりに華と自信を手に入れたようだ。どうやって手に入れたかは知らないがステージでの見栄えは問題ないだろう。鷺沢に関しては、本番になってみないとわからないな」

会場内の確認のために最終リハーサルには参加できなかった。仕方がないとはいえず、苦しい思いだ。

「そんな顔はするな。今日は早めに帰した。明日、本番までの時間で見ればいい」
「そうですね」

マストレの言葉に中身はない。本番前もおそらくは参加できない。それは、マストレもわかっているのだろう。だが、それでも可能性がある以上は参加してみせろと暗に言われている。

「私は、他のスタッフ達と話があるから失礼する。お互いに頑張ろう」

マストレは、そう言い残すと演出家達の居る所へと向かう。

「私も自分の仕事を」

現場の事はスタッフの方に任せておけばいい。何かあればこちらに連絡があるはずだ。後は関係者などとの連絡などだろう。特に今回はメディアやスポンサー関係の人間が大勢来る。それに伴い、346プロダクションからもそれなりの人間が来る事になっている。やる事は山のようにある。

◇◇◇◇◇

公演は、夕方から行われる。会場の出入り口には、一般用と関係者用の二つがある訳だが武内は美城常務と共に関係者用の方で要人を迎えている。本当なら本番の直前までアイドル達の傍に居たいが常務からの命令では従う以外にない。

「これで最後のようです」

招待客リストの最後の名前にチェックを入れる。

「では、私は上の方に行くとする。現場の事は君に任せていいな？」

「お任せ下さい」

「君が手掛けたプロジェクト・クローネの今を見せてもらおうとしよう」

美城常務は、部下を伴い関係者用のVIP席へと向かう。ここでは、武内では与り知らぬ話が行われるはずだ。

（急ぎましょう）

美城常務の姿が見えなくなったのを確認すると急いで楽屋まで移動する。既に時間は残り僅か。今日はまだ挨拶程度しか話せていない。

◇◇◇◇◇

楽屋では既に着替えを済ませたアイドル達の姿がある。

「プロデューサー」

最初に渋谷凧が気づき、他のアイドル達も武内の方を見る。

「申し訳ありません。最後に見る事が出来なくて」

最終リハーサルもそうだが、本番前の確認にも参加できなかつた。美城常務の下で要

人の対応をしていたからだが。

「別に大丈夫じゃない？ それとも不安なの？ 少なくとも私は、そんな甘い物をやってきた記憶はないんだけど？」

「そうそう。あれだけやったんだからさー、十分でしょー？ シューコちゃんの事を信用してよね？」

「プロデューサーは、心配性なんだよな。まあ、そこがいいところでもあるんだけどさ」

「プロデューサーさんから教えて頂いた物は私の中にあります。たとえば傍に居なくても支えはここにあります。ねえ、ありすちゃん？」

「そうです。私が失敗なんてするわけがありません。プロデューサーさんにあんなに教えてもらったんですから」

「Держите Глаза。見ていて下さい、プロデューサー。今の私の全てを」

アイドル達の言葉に焦っていた気持ちが癒されていくのを感じる。自分と違い、彼女は既にステージの事を見ている。

「プロデューサー」

北条加蓮が武内の前に歩いて来る。既に着替えを済ませている加蓮は、物語の登場人物のような美しきがある。

「本番で成功させるから。絶対にプロデューサーに恥をかかせないから」

未だに成功はしていない。ただ、今の加蓮ならやってくれる気がする。それだけ強い意志を瞳に宿している。

「期待しています。北条さんも、他の皆さんも」

彼女達は成長している。それを自分が信じなくてどうする。

「最後に何か言ってほしいかな？ 心に響くのを頂戴、プロデューサー」

凜の言葉で他からも期待の目で見られる。

「……特別な言葉はいりません。皆さんにとっては、当たり前前の場所ですから。アイドルとして、ステージに立つ。ただそれだけです。ただ一つだけ言わせてもらえるのなら、今の皆さんは他の誰よりも輝いています。私も皆さんのステージを一人のファンとして楽しみにして見る事にします」

「……悪くないかな？ でも、プロデューサーだつて事は忘れないでね？」

上手く言えたかはわからないが時間が来る。ここからは、彼女達だけが行く事の許される場所。自分は、その姿を見守る事しかできない。ただ、そこに不安などはない。今は、彼女達が最高のステージを創りあげる事を期待して見守る事にする。



「なんだか人が少ないねー」

「なんでなのかな？ カナデちゃん、わかるー？」

「話したはずだけど？」

大槻唯、宮本フレデリカ、速水奏は関係者席から今日のステージを見る事になっている。これは、美城常務から直接伝えられたことだ。

「今日は、関係者向けの物だから人は少ないのよ。客層の半分は、そうじゃないかしら？」

奏達が居るのは会場の前の方だが後ろの方まで関係者席は続いている。これは、見る場所が違う景色を見せる為にわざと距離を取るように設けられている。上に居るVIP席の者達が最終的な判断を下すが、下に居る生のライブを体験した者達はその判断材料を集めるからだ。もちろん、こんな面倒な事するのは自信の表れでもある。本来なら関係者たちを一か所に集めて、そこだけに最高のステージを提供すればいいのだから。

「ふーん、そんなんだっけ？」

「それよりもいつ始まるのかな？ 楽しみだね！」

唯とフレデリカは、関係者に配られたパンフレットなどを見始める。そこには、アイドル達のプロフィールやライブの順番などいろいろな物が書かれている。

「すぐに始まると思うわ」

奏は、今もまだ浮かれている二人に冷ややかな視線を送る。楽しむこと自体は良い事だ。ただ、美城常務がわざわざ直接自分達にこのステージを見せる意味を考えればそんな気分にはなれない。

「見せてね、プロデューサーさん。貴方の魔法を」

奏は、此処に居ない者へ言葉を送る。

◇◇◇◇◇

いよいよライブが始まる。ステージは、プロジェクト・クローネの気品を表すために青や紫、黒などの落ち着いた色を基調として創り上げられており、それぞれに合わせた衣装を身に着けたアイドル達がステージの上に現れ歌やダンスなどを披露する。

初めは、参加するアイドル達全員が一齐に自分達の持つ魅力を集まった者達へと見せる。曲は、まだ持ち歌が少ない為に既存の物を使用している。但し、プロジェクト・クローネに合わせてアレンジされており、音と共に色が変わる世界で彼女達は唯一つの自分だけの色を表に曝け出す。創られた色の中で、それぞれのアイドルとしての色が合わさり別の世界を見せてくれる。その衝撃に会場中の者達があてられるわけだが、その中

「で二人だけは別の形で受け取る。」

「……知らない……ゆい、これ知らないよ……」

「……楽しそう……」

唯とフレデリカは、ステージが始まってからしばらくはそれをただ見ていた。否、見る事しかできなかった。知らなかったわけではない。彼女達が何をしていたかは知っている。でも、今ステージの上に居る彼女達は自分の知る者とは別人のように思える。(当然といえばそれまでよね)

落ち着きのない普段と違って、今の二人は大人しく目の前で行われている物を見ている。二人とも、アイドルを楽しんでやっている。でも、本気ではやっていない。だからこそ、二人には声が掛からなかった。いくら才能があろうともやる気を出すかどうかは本人次第だ。

(どうなるのかしら?)

美城常務が彼女達をこの場に呼んだ理由は一つだけ。共に道を歩んでいた者達が遥か遠くへと行く様を見て何を思うのか? 二人の中にもあるであろう感情を表に出す為だけに此処に呼んだのだから。ただ、それは別に二人だけに限った話ではない。

「悔しいわね……」

奏もこのステージを見て何も思わないわけではない。奏も元は読者モデルからアイ

ドルへとスカウトされただけだ。だからと言って二人とは違い真面目にアイドルをやっていた。奏にとつては良くも悪くもアイドルとはその程度のものだった。きつかけは偶然でもやるからにはやる。それだけのもの。だが今は違う。共に歩んでいた者達が自分よりも前に行く度に悔しい思いがあつた。それからはレッスンも今まで以上に行つてきた。それでも差は縮まる事もなく広がつていった。悔しい。ただ悔しい。でも——自分もあの場所に行ける方法を知っている。その方法を手に入れる事が出来る。あと少しで。

(今は耐えましょう。これからの為に)

奏は、おそらくこの会場でただ一人。楽しむのではなく、先を歩くためにステージを心に刻んでいく。これからの糧とするために。

◇◇◇◇◇

「鷺沢さん、これから一人でステージに立つことになりますが大丈夫ですか？」

ライブは順調に進んでいる。次は、一つの懸念である鷺沢文香のソロの番だ。

「大丈夫です。私にできる事をしてきます」

文香の表情は落ち着いている。少し前までは、失敗による恐れにより消えかけていた

光が、今では前以上に輝いている。

「頑張ってください！ 此処で応援しています！」

「ありがとう、ありすちゃん」

そんな彼女の支えとなった橘ありすが今もこうして傍に居る。

「それでは、行ってきますね。プロデューサーさん」

「此処で見させていただきます」

文香は二人の思いを受けてステージへと向かう。ただ、最後に一度だけこちらを振り向き何かを口にしたように唇が動く。何を口にしたかは彼女以外知る者は居ない。

◇◇◇◇

文香のソロも終わり、最後の問題へと順番が回ってくる。最後のリハーサルでも成功はしなかった。マスタートレーナーの評価では他の物と合わせれば及第点だが本人は満足しないだろう。

「体調の方は大丈夫ですか？」

「もち、大丈夫だよ！ これだけプロデューサーに心配されたら風邪をひく暇もないつて」

既にステージを何度も踏んでいるが北条加蓮の調子に影響はない。むしろ、この時間
が来るにつれ上がっているようにも見える。

「北条さんならできるはずです」

「わかっている。言われなくてもね」

今まで成功したことはない。ただ、だからと言って失敗する気もない。

「プロデューサーがここまでアタシを歩かせてくれたんだもん。ここからは、自分で歩
かないとね」

加蓮は息を整えステージへと心を向ける。

「……ねえ、一つだけ約束してもいい？」

「約束ですか？」

「他のみんなには悪いけどさ、上手く行ったら二人だけでお祝いしようよ。場所は、前に
話してたプロデューサーのオススメのお店で」

「わかりました。予定は空けておきます」

武内の言葉を聞くと加蓮は前に踏み出す。

「絶対に守ってもらうからね！」



此処は、会場に設けられているVIP席。一般とは別に隔離された世界で選ばれた者達が見下ろすようにステージを見ている。

「悪くはないんじゃないかな？」

「どれも粒は揃っているように見える。特にソロでやっている子達はいんじゃないかな？」

「好みは分かれるでしょうが、誰を推しても問題はないのでは？」

「この渋谷凜は確定として他は難しい」

ライブも殆どが終わり残るは最後に行われる締めだけだ。既にアイドル達の査定も終わり、今後について話し合われている。

「しかし、久しぶりに見る顔があったな。彼は、一線を退いたと聞いていたが？」

関係者の一人が美城常務へと問う。

「再び表舞台に上がる覚悟ができただけの事です」

「……なるほど」

事情は分からないが理由がわかればそれでいい。

「今回の物に関しては機会を改めて話すことになる。結果は期待してもらってかまわない」

「そうですか。皆様の御目に適って光栄です」

特に頭を下げたりはしない。結果だけが全ての意味を持っている。

「君の見せた魔法がどうなるのか楽しみだ」

このライブが今後にどのような意味を与えるか。それは誰も知らない。

第37話

武内が担当するプロジェクト・クローネのアイドル達のライブは無事に終わった。結果に関してはいろいろな見方があるがいろいろと忙しい日々を送る事になった。

「ゆいも一緒にやりたーいー!」

「フレちゃんもー!」

ライブの次の日に大槻唯と宮本フレデリカの二人が武内のオフィスへとやって来た。心配して付いて来た速水奏に話を聞くとライブを見てからこんな感じなのだと言う。どうやら見ている羨ましくなったようだ。

「ゆいもみんなとLIVEがしたい!」

「したい! したい! やらせろー!」

二人が会場に見に来ていたことは知っているが武内もアイドル達もライブが終わった後も忙しくて詳しい事は知らなかった。

「お二人のお気持ちは素晴らしいと思います。ただ、すみませんが今は忙しいので当分の間はないと思います」

「えー、なんでなんで!」

「アタシもLIVEに出してよー！ みんなだけズルい！」

二人からブーイングの嵐が来るが今は事後処理でそれどころではない。

「未確定の部分がありますが当分は事後処理の方を行います。参加されたアイドルの方達にはいろいろとお話が来ておりまして」

二人に説明するが状況はよくならない。とりあえずレッスンに参加する形で話をまとめて帰ってもらった。ただ、この後も同じような事を繰り返すが気が済んだようではは落ち着いた。あくまでも落ち着いただけでオフィスには顔を出すか。

◇◇◇◇◇

ライブから数日が経ち渋谷凪に話をする事になった。内容は、当初から決まっていたものだ。

「ふーん。新曲ね」

「はい。ライブの内容を見た結果、渋谷さんには3つの選択肢が与えられました。一つ目は、ソロで行う物。これに関しては、上の方で最も有力な物となっています。二つ目は、トライアドプリムとしてですが、これはソロの次に話が上がっています。最後にトライアドプリムとニュージエネレーションの両方で出す場合ですが、これに関しては条

件付きです」

「条件?」

「同時期に出す形になりますのでどうしても比べられる形になります。残念ながら現在の状況では、ニュージエネレーションの評価が下がる結果になると思います。そのため時機を延期してニュージエネレーションの方が実力を付けるまで待つ形になります」

凜は少し考えてから口を開く。

「最後のヤツつてさ、プロデューサーの考え?」

「はい。正直なところをお話しますと、上の考えは最初の2つだけです。ただ、私は両方で出す道を考えています。トライアドプリムとニュージエネレーション。渋谷さんの場合は、それぞれで魅力が違っていると私は思います。トライアドプリムの方は、アイドル渋谷凜としての魅力が強く出ています。上が認めるだけの才能を感じさせる力を持った魅力が。ただ、ニュージエネレーションの方には等身大の渋谷凜の魅力があります。自然体で居る渋谷さんの魅力もまた人を惹きつける物だと思えます」

これに関しては、判断が難しい。おそらくどれを選択してもアイドル渋谷凜は道を進む事が出来る。ただ、その先が何処まで続くかはどれを選択したかによって変わるだろう。今まさに運命の分かれ道に立っている。

「じゃあ、最後で。顔も知らない人よりもプロデューサーの方が信用できるから」

「それでいいのですか？」

「うん、いいよ」

凧はあつさりと選択肢を決める。重要なはずの選択を。

「これは、これからの渋谷さんのアイドルとしての道を決める重要な物です。すぐに答えを出す必要はありません」

「言いたいことはわかるけど変わらないうよ。私は、プロデューサーを信じてるから。それとも、いい加減な気持ちで考えてたの？」

「いえ、それはありません」

「だったら大丈夫だよ。プロデューサーが私の為に考えてくれたんだから。それで、他の人はどうなの？」

「どうやら凧の中で、この話はすでに終わったようだ。」

「わかりました」

本当なら会議で決められた物を下に話していこうと思ったが、どうやらこれらは必要ないようだ。気持ちを切り替える。

「ソコを勧められたのは渋谷さん、アナスタシアさん、北条さんの3人になります。渋谷さんに関しては、先ほどの内容で進めますので他の方の話をしますと既にアナスタシアさんは、ラブライカの方で曲を出すことに決めています。これに関しては、既に新田さ

んも知っています」

アナスタシアと新田美波には、話が決まってすぐに連絡した。事前に話をしていた事もあり、一刻も早く知らせたかったからだ。

「加蓮もなんだ」

「はい。ただ、北条さんは断られました」

ライブとして見れば成功だった。ただ、北条加蓮だけは違った。加蓮がライブで見せた物は、それまでの物の中で最高の物ではあった。だが、加蓮自身は納得ができなかつたようだ。だからソロの話は断り、自分の間はレッスンに励むことになった。

「そっか。まあ、納得してなかったからね。他の人はないの？」

「他の方は少しだけ事情が変わります。鷺沢さん、神谷さん、塩見さんの3人はユニットで出すことになります。と言いますのも、歌とは違う方向で話が動いています。鷺沢さんの件で話せば、本に関する仕事を探していました。その内の一つに今回ライブを見られた方の所があるのですが鷺沢さんを気に入られました。仕事へと繋がりました」

鷺沢文香は、本を扱うテレビ番組の話が来ている。神谷奈緒、塩見周子も別の所から似た様な話が来ている。どれも話だけはしていたが今回の件で決めると予め言われていた。それで、結果を受けて仕事へと繋がったわけだ。

「それで、ユニットなの？」

「はい。鷺沢さんを中央に神谷さんと塩見さんが脇を固める形になります」

「ふーん。それで、橘さんは？」

「ありすさんは、皆さんとの差を埋める為に北条さんとレッスンを行ってもらいます。ありすさんにとっては大事な時期ですのでレッスンで実力を高める方を優先します」

しばらくは他の事で忙しくなるが、その処理が終われば再びライブが行われる。今度は、橘ありすもソロを考えている。それに唯やフレデリカも一緒にレッスンをを行う事になった。速水奏に関しては、担当にもなるので時機を見て話してから決める。

「そっか。なんだか安心した。みんな前に進んでるんだね」

「そうですね。ただ、しばらくの間は皆さん忙しくなりますのでレッスンなども回数が減ると思います。できる事なら今を維持したまま再びライブを目指したいと思います」

「そんなに忙しくなるんだ」

「未確定の物ばかりですので時間は掛かりますが、すぐに皆さんにも伝わると思います。特に渋谷さんは、シンデレラ・プロジェクトのライブにも参加して頂きますので」

「……やるの？ シンデレラ・プロジェクトで？」

今までの話の中で初めて凛の表情に変化があった。彼女にとっては、それだけ価値のある話だったのだろう。

「今、企画書を通しています。正式に通りましたらシンデレラ・プロジェクトの皆さんに

はライブに向けてのレッスンを始めて頂きます。アナスタシアさんも忙しくなりませんが、渋谷さんの方が負担は多くなる見通しです」

「別にいいよ、それぐらいは。でも、そっか。また皆で出来るんだね」

未確定ではあるが凛のスケジュールは大変な物になるだろう。それでも、凛にとっては共に歩いた仲間達とのステージの方が気になるようだ。

「卯月と未央に話していい?」

「はい。かまいません」

「ありがとう、プロデューサー。もう、他に話はない?」

「お二人の下に行つてあげて下さい」

「うん、行つてくるね」

凛は、急ぐように隣の部屋に居る島村卯月と本田未央の下へと向かう。今の彼女の表情こそがアイドル渋谷凛とは別の魅力を持つ本当の渋谷凛の魅力だろう。自然に溢れ出る笑顔に勝てるものがあるとは思えない。

第38話

やる事は山積みだが約束を果たさなければいけない。速水奏をオフィスに呼び話を始める。

「今日から速水さんは、私の担当となります。それで、よろしいですね？」
「もちろん。今日と言う日をずっと待っていたから」

奏は、必要な書類にサインを書いていく。これで正式に速水奏は武内の担当になる。

「やる事に関してなんですが、速水さんにはシンデレラ・プロジェクトの方でレッスンを受けて頂くこうと思います」

「シンデレラ・プロジェクト？ プロジェクト・クローネではなくて？」

「はい。プロジェクト・クローネの方は、北条さんとありすさんに合わせて今も行われています。それに加え、大槻さんに宮本さんも合流しましたので速水さんが満足する内容は提供できないと思います。今日から速水さんは、私の担当ですのでシンデレラ・プロジェクトの方に私の判断で参加させる事が出来ます」

北条加蓮は、更なる高みを目指して個人レッスンを受ける道を選んだ。橘ありすも今後を見越してレッスンを行っている。大槻唯と宮本フレデリカの二人は、基礎からレッ

スンを行っており奏の望むような物ではない。鷺沢文香、神谷奈緒、塩見周子はユニツトでのレッスンがある。今の状況だと、誰かと共に奏にレッスンを受けさせる事はできない。

「それがかまわないわ。全て、プロデューサーさんに委ねるから」

奏の考えは決まっている。意見は言うが、判断に関しては武内の考えに従う。

「そうですか。シンデレラ・プロジェクトには、渋谷さんやアナスタシアさんも居ます。それに既にシンデレラ・プロジェクトの方々とは交友があると聞いています」

最近では、奏も気軽にシンデレラ・プロジェクトの待機場所に入入りしている。それもあり、今回のような話もできる。

「レッスンに関してはわかったけど、他には何かあるかしら?」

「特にはありません。ただ、シンデレラ・プロジェクトの方でも少しだけ分けて行います。そのため、初めのうちは速水さんの実力を見せて頂く事になります」

「それって、実験をしている人達とそうでない人達に分けるのかしら?」

「はい。新田さん、諸星さん、前川さんに関しては何で行います。ただ、他にも参加する方はいます。渋谷さん、アナスタシアさんもこちらでやって頂きます。それに本田さんも体面だけで見れば十分参加できると思います」

「いいわ。先ずは、そこに入れるようにすればいいのね?」

明確な目標ができてやる気が湧いて来る。

「そうなります。ただ、基準はあくまでもクローネからの二人に合わせます。それだけは忘れないでください」

◇◇◇◇◇

シンデレラ・プロジェクトのライブの件に関しては話が済んでいたので簡単に通った。そのため早速レッスンが始まる。基本的に2つに分けて行われるわけだが、場合によっては入れ替えも考えている。このレッスンでライブでの出番や役割を考えていきたい。

「今日から、渋谷さん、アナスタシアさんが参加します。それに本田さん、速水さんも参加されますが私の判断で別の方へ異動してもらった場合もあります」

武内の言葉に参加するアイドル達の表情が引き締る。早い話が降格であるからだ。言い方は悪いが、こちらが一軍で、もう一つが2軍である。下からの異動ならいいが、上からの異動など嫌に決まっている。

「それでは、渋谷さんとアナスタシアさんが前に。次に新田さん、諸星さん、前川さん。最後に本田さん、速水さんでお願いします」

武内に言われた通りにアイドル達は並ぶ。これが今のこの場所での立場だ。

「行う内容に関しては、新しく用意した物になります。既に実験に参加されている方は、半分ほどは知っていると思いますが、残りの半分は別の物になりますので気を付けて下さい」

今回は特別にプロジェクト・クローネのマスタートレーナーからも意見を貰い新しくプログラムを組み直した。どうやらライブの結果を見た上で協力してくれるとの事だ。もちろん、プロジェクト・クローネのアイドルが参加するからと言う理由もある。

「それでは、レッスンを開始します」

武内の開始の言葉により速水奏を加えたシンデレラ・プロジェクトのレッスンが始まる。

◇◇◇◇◇

シンデレラ・プロジェクトの担当であるベテラントレーナーには、もう一方のグループを見てもうらうために武内が一人で担当する形で行われている。内容に関しては、常時撮影されておりその内容をトレーナーが見た上で見直されたりもする。当然、トレーナーが居ない時は武内の判断で行われるのだが早速問題が起こる。

「大丈夫ですか？」

レッスンを開始してからしばらくすると本田未央と速水奏に変化が表れる。特に奏の方は、息が荒れ、動きに余裕がなくなってきたている。

「だ、だいじょうぶ……もんだい、ない……わ」

立っているだけでもやつとだろう。今行っているのは実験で行われていた物よりも上だ。なにせ、渋谷凧やアナスタシアが参加する以上は質を上げる必要があるからだ。

「本田さんは、どうですか？」

「私は、まだ、大丈夫だよ」

息を切らしているが未央の様子はまだ平気だろう。ダンスを中心とした個別レッスンを行っている未央ならまだ耐えられるはずだ。

（他は……）

凧とアナスタシアは問題ない。今までやってきた物から見ればまだ余裕がある内容だ。新田美波、諸星きらり、前川みくの3人は未央と同じぐらいか、少しはマシな程度だろう。

「申し訳ありません。一度、速水さんには外れてもらいます。様子を見て参加してもらいますので休んでいてください」

「……わかった」

奏は悔しそうに端へと寄る。

(予想以上に辛いわ……)

頭の中で何度も想像していた。実験内容も見た事もある。話だつて聞いたことはある。でも、実際にやってみると厳しいものがある。

奏は、壁に身体を預けるようにして座り込むと視線だけは目標へと向ける。自分と違い、他の人間。特に凜とアナスタシアの余裕を感じさせる表情が気に入らない。

(私と何が違うの?)

今の惨めな自分と彼女達の違い。レッスンは真面目にやって来た。量も増やした。それでも差がある。その理由は、一つしか考えられない。

(ここから始めましょう)

奏は、ただ静かに目の前で行われている光景を見る。一人の男の下にレッスンに励むアイドル達の姿を。

◇◇◇◇◇

《おまけパート⑥ 輿水幸子ヤンデレ風味》ありすの時と同じで設定とか関係ないヤツです。

今日は、興水幸子と346プロダクション内にあるカフェで過ごしている。「——という事がありましたね」

武内は、幸子の話を聞いているが正直なところ苦痛でしかない。もちろん、幸子の話を聞くのが嫌と言う訳ではない。むしろ、楽しそうに話す幸子を見るのは好きだ。ただ

「聞いてますか、プロデューサーさん？」

「はい。聞いています」

「そうですか。まだまだ話すことはありますからね。えーつと、どこまで話しましたっけ？」

幸子は、ノートに視線を移す。そこには、今日の為に幸子が考えた話の数々が載っている。どうも話す内容をノートにまとめたらしい。3冊分。

「ここまでですね。いいですか、プロデューサーさん。この時はですね——」

再び幸子の話が始まる。既に1時間は経っているはずだ。はずと言うのは、時計を見るだけでも幸子に怒られるので一度しか見ていない。今は、幸子の目を見ながら話を聞いている。こうしていないと話が先に進んでくれない。

「興水さん」

「なんですか？」

「今日は、予定などはないのですか？」

「予定ですか？ 当然空けてあります！ 今日、プロデューサーさんとお話するため準備してきましたからね！ 褒めてもいいんですよ！ さあ、褒めて下さい！」

ずっと話しているはずなのに幸子に疲れは見えない。

「私の為に時間を作って頂きありがとうございます。嬉しいです」

「そうでしょう！ ボクも楽しみにしていましたからね！ この前は、輝子ちゃんと小梅ちゃんと3人だったのでそんなに話せませんでした、今日はボクだけなのでたくさん話せます。時間はたくさんありますからね」

こうして幸子の話は、続くことになる。ちなみにまだ一冊目の半分ぐらいだ。

第39話

速水奏を加えて行われたシンデレラ・プロジェクトのレッスンは、一先ず終わりを迎える。結果だけ見れば予想通りのものだ。

「どうだった、プロデューサー？」

「どうでしたか？」

レッスンを最後まで成し遂げた、渋谷凜とアナスタシアの二人に内容を聞かれる。

「お二人に関しては問題ないと思います。ただ、プロジェクト・クローネの方での仕事なども増えますのでこれを基準で考えていきます」

もちろん二人も平気と言う訳ではない。疲れもするし、無理をすれば怪我などもするだろう。ただ、今までの努力で得た物は彼女達に余裕を持たせている。

「新田さん、諸星さん、前川さん。身体の方は大丈夫ですか？」

「私は、少し無理をしたかもしれませんが」

新田美波は、この3人の中で最後まで凜とアナスタシアに付いて行った。彼女の目が時々アナスタシアの方を見ていたので、彼女の負けず嫌いの性格が出たのだろう。できる限り意思を尊重したが最後にはこちらの判断で止めた。

「きらりんは、大丈夫だよ。Pちゃんから見ても、どうだったあ?」

「諸星さんは、体力に関しては問題ありません。ただ、動きに繊細さが足りない所があります。身体を大きく使つて行うパフォーマンスは大変素晴らしいですが、身体にも負担が掛かりますし、次への動きにも影響が出てきます」

「反省するにいい」

諸星きらりの欠点は、良くも悪くも動きの大きさにある。ステージで見れば最高のパフォーマンスを行える物ではあるが、身体に対する負担が大きく体力のある彼女でも美波に負けてしまう。それにダンスの種類によつては、動作が遅れて一人だけズレる時がある。

「みくも平気だけど、どうかな?」

「前川さんは、バランスがとても良いです。日頃のレッスンの頑張りが伝わってきます」
「やっぱり、みくは体力になるんだね」

前川みくは、全体的にバランスが良い。シンデレラ・プロジェクトの中でも努力家なのでレッスンに対する姿勢が違う。ただ、パフォーマンスの質を維持するだけの体力が足りない。三人の中だと最初にレッスンから脱落した。

「私は、いつも通りだよね?」

本田未央は、武内に言われる前からわかっているようだ。

「本田さんも内容は良くなってきました。慣れさえすればできるようになると思いますが。」

未央の場合は、やればできる。時間を掛けてしつかりとやれば結果を出す事が出来る。今回は、何度も休んでのレッスンになったが回数をこなす度に形が見え始めてきた。

「速水さんは……」

最後に速水奏の番になるのだが、そこには普段の奏の姿はない。

「今日は、速水さんの気持ちを汲み取る形で行いました。ただ、無理をしても結果には繋がりません」

奏は、何度もレッスンに挑戦した。休んでは、何度も何度も。

「覚悟はしていたけど……」

既に言葉を口にする気力もないのだろう。普段の余裕のある大人びた速水奏の姿はそこにはない。髪は乱れて汗で額に張り付き、だらしなく仰向けに倒れている。

「此処が、速水さんの新たな始まりの場所になればと私は考えています。どうされますか？」

武内の言葉の意味は一つだけだ。

「此処でやらせて……お願い……」

奏にとって、此処は目指す場所に最も近い場所。そこから少しでも離れたくない。たとえ無様な姿を晒しても。

「わかりました。但し、これだけは忘れないでください。危険だと判断したら異動してもらいます。無理してまで、焦る必要はありませんから」

武内の言葉を自分の中で何度も繰り返し返す。それでも答えは決まっている。

「私は、前に進みたい。だから——」

疲れが限界まで来たのだろう。身体が求める眠気により今日が終わる。言葉すら最後まで言わせてもらえない自分が嫌いになりそうだ。

◇◇◇◇◇

「——(うん)は？」

奏は何処かで目を覚ます。見た事のあるような景色がそこにあるが——天井だろうか？

「起きられましたか？」

声のした方を見る。否、見ようとした。

(……上手く動かないわね)

自分の意思と違つて身体が動こうとしない。まだ疲れを癒したがっている。

「今日は、私を送りますのでお休みください。家の方には連絡してありますので」

「……ありがとう」

奏は再び身体を休める。どうやら武内のオフィスのソファで横になっているようだ。ご丁寧タオルケットまで掛けられている。

(情けないな……)

ここまで何もできない自分は初めてだ。どんなこともそれとなくこなしてきた。でも、今は誰よりも惨めで情けない気がする。

奏は、今も叩かれるキーボードの音や紙の擦れる音を聞きながら、その音を出す人物へと視線を移す。自分以外の女性達をアイドルへと変えた人物がそこに居る。今も彼女達の事を、自分の事も考えているのだろう。

(こんな人も居るのね)

この仕事をしていれば声を掛けて来る者は多い。心配しているように見えても下心がそこにある。力になると言つても、それは自分の欲の為。でも、今傍に居る人は、本当にプロデューサーとしてアイドルを見ている。それこそ速水奏自身よりも。彼は、自分よりも、自分の事よりもアイドルを優先している。

「ねえ、プロデューサーさん」

「……なんでしょうか?」

声と共に彼と目が合う。

「私は、アイドルになれると思う?」

彼の口から聞いてみたい。他の女性をアイドルに変えた人の言葉で。

「速水さんがそれを望んでいるのならなれると思います。もしそうであるならば、私は最後まで速水さんを支えます」

望み通りの言葉が心に届く。わかりきってはいたが悪くない気分だ。

「だったら、お願いするわ。今はこんなものだけど、私も他の人達のようになりたから」
始まりは偶然だった。でも、今は本当になりたい。彼が魔法を掛けてアイドルにした彼女達のように。

「少しだけ今は——休ませて……」

此処は、どこよりも安心できる場所だ。そう思うと再び夢の中へと導かれる。仮に夢から覚めても、初めて出来た夢の世界へと戻るだけだ。

◇◇◇◇◇

《おまけパート⑦》切りはいいけど短いので緊急で。

「昼ご飯を食べに346プロダクション内にあるカフェに来たのだが、そこで城ヶ崎美嘉に出会う。」

「あれっ？ アンタも食べに来たの？」

「はい。城ヶ崎さんもですか？」

「時間は少し昼には遅い。その為、知り合いに会うとは思っていなかった。」

「……もしよかったら、一緒に食べる？ 知ってる人が居るのに別々で食べるのも、ねっ？」

「そうですね」

二人は、同席することになる。

「あれあれ？ 二人で来るなんて珍しいですね？」

「今日もカフェで手伝いをしていた安部菜々が二人の下に来る。」

「ああ、うん。そこで会ったんだー、たまたまね」

「安部さんは、今日もお手伝いですか？」

「はい！ 初心忘るべからず！ アイドルにはなれましたけど、ハングリー精神は持つておかないとー！」

昔、安部菜々は此処のカフェで生活費を稼いでいた。今はアイドルとして稼げるようにはなったがその時の事を思い出すために手伝っている。菜々のアイドルとしてのハ

ングリー精神は、他のアイドルにも引き継がれている。主に輿水幸子にだが。

「菜々ちゃんは、偉いよね。尊敬しちゃうよ」

「美嘉ちゃんに言ってもらえると嬉しいですけど、ナナ的には美嘉ちゃんの方が尊敬しますよ。美嘉ちゃんが頑張っているのを、ナナは知っていますから」

二人は、ある意味では同期と言える。先に道を歩み出したのは菜々だが、先にアイドルになったのは美嘉の方が先だ。その二人が昔は同じ場所に居た。そして、自分も。

「なんだか懐かしいね。昔は、こうして3人で……ううん、他にもたくさん仲間達と一緒に居たんだよね」

「そうですね。今は少し離れてしまいましたけど、会うと昔のようになれますから」

言葉が誰も出なくなる。同じ道を歩んでいた。しかし、その道は分かれる事になった。それを思うと、言葉が出ない。

「——菜々ちゃん！ 注文お願いね！」

「——はっ、はい！」

急に聞こえてきた店長の声で時間が動き出す。

「えっと、ご注文は何にしますか？」

「……ランチでお願いします」

「じゃあ、アタシも」

少し気まずいが注文を済ませる。

「待っていてくださいね！ ウサミンダッシュですぐに持ってきますから！」

「気を付けてね、菜々ちゃん」

菜々は、その場から離れるように小走りで厨房の方へと向かう。少しだけこけそうに見えたが大丈夫そうだ。

「ねえ、プ……武内さん」

思わず言葉を間違えそうになる。ただ、代わりに出る言葉も言い慣れていないものだ。

「まだ忘れられない？」

ずつと言いたかった言葉。それを口にする。

「……忘れる事はないと思います。これからも」

「そうだよね……」

わかりきっていた答えが返ってくる。なんで聞いてしまったのだろう。

「ですが、今は前を向いて行こうと思います」

美嘉は武内の姿を見る。その言葉を言う彼の表情は――

おまけなのでここまで。前作知らない人には意味がわからないね。知ってても途中で終わったからわからないと思うけど。緊急で書いたからメモ書き程度に思っして下さい

い。

第40話

《おまけパート⑧》物語の都合上、出番が少ないキャラを書くための物なので書きます。基本おまけは即興何で内容は許して。

《諸星きらり》

「ねえねえ、Pちゃん」

「なんででしょうか？」

「一つ聞いてみていいにいい？」

今、武内はきらりと共にシンデレラ・プロジェクトのアイドル達が出ている雑誌や写真などを確認している。普段から二人で行っているわけではなく、武内がやっていた所に偶然きらりが遊びに来た。

「きらりん、モデルのお仕事とかいっっぱいさせてもらってるけどお……きらりんで大丈夫なのかなってえ」

きらりは、主に自分が出ている物を見ているが、他のアイドル達の物を見ると度々手が止まる時がある。

「気になりますか？」

きらりをスカウトした時の事を思い出す。彼女は背が大きい事を気にしている。小さい頃か背が大きかった少女は、自分の事を嫌っていた。自分も他の子のように可愛い服を着て普通の女の子のように過ごしたいと。

「うにゆ……Pちゃんには隠せないにい。みんなのカワイイ姿とか見るとね、そう思う時があるんだあ。きらりんじゃなくて、他の子の方がいいんじゃないかなって」

スカウトした時も似た様な会話をした。自分よりも他の子の方が相応しいと。

「ちよつと、待つていてください」

武内は、部屋の隅に行く積まれている箱の一つをきらりの前に持つて来る。

「これは、後で皆さんにお渡しするファンレターになります。この中には、諸星さんへ送られた物もあります。もちろん、これまで諸星さんへお渡しした物もあります。それでもそう思いますか？」

少しずつだが仕事も増えている。それに比例するようにファンからの贈り物も増えてきている。

「……でも、不安になる……よ」

アイドル諸星きらりではなく。初めて会った頃の諸星きらりが顔を出す。本当の彼女は、とても真面目で大人しい子だ。

「みんな、本当にカワイイ。私とは違って……本当に。私は、こんなに大きい。これから

もずっと」

誰よりも可愛い物が好きな少女は、可愛くない自分を隠すために魔法を掛けた。服を、飾りを、言葉を……ただ、それでも隠しきれれることはなかった。むしろ、魔法で隠したことにより、本当の自分を表に出すことを恐れてしまうようになってしまった

「諸星さん。私が諸星さんをスカウトした時の事を憶えていますか？」

「あれは、街中でシンデレラ・プロジェクトのアイドルを探していた時の事だ。」

「私は、アイドルとして輝ける人を探していました。その時に諸星さんに出会いました」
あの時のきらりの事は忘れない。

「諸星さんが泣いている子供を思い必死になって泣き止まそうとしていた時に見せた笑顔
顔を私は憶えています」

親とはぐれ一人で泣いている少女にきらりは声を掛けた。人目も気にすることなく、
できる限り身体を小さくして少女の目線に合わせいろいろと話をしていた。

「あの時は、ごめんね」

その様子を見ていた武内も何かしようとして声を掛けたが逆に泣き止んだ少女を再び泣かすことになった。それで、きらりに怒られた。

「かまいません。あれは、私が悪かったですから」

結局、子供を探していた親が背の大きい二人の騒ぎに気づいて無事に子供を見つける

事が出来た。

「でも、あの時にアイドルとしてスカウトされるとは思わなかったなー」
「断られてしまいましたけどね」

子供の涙を止めようとするきらりを見た時にスカウトしようと思った。結果は、相手を余計に怒らせ、呆れさせるだけだった。

「でも、Pちゃんは諦めなかったんだよね？」

「はい」

それでも諦めきれなかった。もう一度、彼女の笑顔を見たいと思った。

「次に諸星さんに出会ったのは、女性向けのアイテムを扱うお店の前でした」

「……うん、憶えてるよ」

あの時のきらりは、その店を外から眺めていた。

「あのお店はね。私の好きなお店なんだ。でも、私に合う物は小物とかそういうのしかない」

きらりが見ていたのは、店の前を通る人に向けられて飾られている服。少女たちが好んで着そうな可愛い服。きらりには小さい服。

「私は、子供に向ける諸星さんの笑顔に惹かれました。ただ、貴女を心からスカウトしようと思った時は、あの時のものです」

憧れの服を見ているきらりの表情は少女だけが持つ純粹で綺麗な笑顔だった。子供の為に向けた優しい笑顔も素敵だったが、心から溢れ出す笑顔には勝てなかった。

「あの時の諸星さんの笑顔は忘れられません。誰よりも、他の誰よりも可愛い物が好きで憧れている少女の笑顔を」

きらりは、武内の言葉を受けて胸を抑える。

「憶えてるよ。Pちゃんが言ってくれた言葉」

まだ名前も知らない。それこそあつた時は、怒りもした関係だ。

『貴女の望む世界で、貴女の望む物を着させます。貴女がその笑顔でいられるのなら』

何故、そんな事を言ったのかはわからない。ただ、自然とその言葉が出ていた。

「あの時は、ビックリしたんだよ？ いきなり声を掛けられるし、知らない人だし」

「すみません」

「でもね、きらりんは嬉しかったんだよお？ こんなきらりんでもカワイイ服を着ていんだって思えたにいい」

あの時のきらりの返事は、「私でも着られるの？」と言うものだった。

「Pちゃんは、あの時の約束を守ってくれてるんだよねえ？ こんなにたくさんカワイイ服を着させてくれてるもん」

きらりの前には、憧れていた服を着ている自分の姿がある。

「この写真の一つ一つにあの時の諸星さんがいると思います。他の誰よりも可愛い物が好きな少女が。それでも、他の方がいいと思いますか?」

「……ううん、思えないに……写真のきらりんはとーつてもハピハピしてるよおー、誰にも負けないぐらいに幸せそうだに」

「私もそう思います」

誰よりも可愛いものが好きな少女が掛けた魔法。それが解け、代わりに新たな魔法を掛ける。自分を隠さずに、本当の自分を好きになれるように。今の彼女は――

「Pちゃん、これからもきらりんにかワイー服をたくさん着させてほしいに☆」

——とても輝いているのだから。

第41話

「——また、この景色……」

速水奏は、見慣れた景色になりつつある場所を見ると嫌気が差してくる。奏が参加して行われているシンデレラ・プロジェクトのレッスンは、毎回同じ結果で終わる。勝者のように君臨する渋谷凜とアナスタシア。その後を追いかける、新田美波、諸星きらり、前川みく。そして、共に同じ場所から始めた本田未央は、すでに自分の傍にはいない。

「ねえ、プロデューサーさん」

奏は身体を起こし、今も仕事をしている武内の方を見る。

「今日は、どうだった？」

内容はあまり期待していない。そんな簡単に変われるとは思っていない。ただ、彼の目から見る物を知りたい。

「そうですね。速水さんは、物覚えの早い方だと思います。予想よりも早く動きを覚えていたと思います」

「——そう……ありがとう」

思いがけない言葉に気恥ずかしくなる。今日も無様な姿を晒したのに。

「一つ聞きますが、頭の中に他の方の動きはありますか？」

「そうですね……」

思い出すとすぐに浮かぶ二つの顔がある。

「あると思う……合っているかは、わからないけど」

自信はない。ただ、常に凜とアナスタシアの事を意識してやっていた。だから動きはわかると思う。ただ、最後までやろうとしているからか途中から記憶が曖昧になる。

「速水さんの長所を上げるとするならばそこだと思います。ただ、長所は短所に繋がります。自分の理想と現実での差が今の速水さんには辛いのではないですか？」

「理想と現実……」

目指すべき場所と今居る場所。

「上を目指す者が持つ感覚だと思えます。ただ、そこに辿り着くまでは他の方よりも辛く苦しいものになるものです。下手に見えるのと知らなくていいものまで知ってしまえますから」

「だったらどうすればいいの？ 前に居る人達は、私が進むよりも早く先に行く。一緒に始めた人だって」

自分でも焦っているのはわかる。でも、置いて行かれたくない。負けたくはない。

武内は、奏の言葉にどう返すか悩む。

「明日、少し皆さんよりも先にレッスン場に来てください。言葉で語るよりも見た方がいいかもしれません」

今の奏に言葉は届かない。そう思うと他に方法もない。

◇◇◇◇◇

「体調の方は大丈夫ですか？」

先にレッスン場で準備をしていた武内の下に奏はやって来る。

「……少しだけ、気怠いわね」

隠さずに言う。自分よりも知っている人に隠しても意味がない。

「そうですか。では、速水さんの準備をしてから始めます」

レッスンを始める前に身体を念入りに解す。基本は、奏一人でやってもらうが二人で行わないとできないものもあるのでそれは武内が手伝う。

「速水さんには、実験で行われていた物をやって頂きます。内容に関しては、今行っているものと半分近くは似ていますのでその部分をお願いします」

「それをやればいいの？」

「奏さんは、実験の内容も知っています。参加者で行われた視聴会にも参加されていま

したから。今日は、実際にやってみてください」

武内は通しでやる前に奏に確認のために教えていく。物覚えがいいからか、今行っている物が実験で行われている物を参考にしているとはいえ奏は少しの確認だけで覚える。仮に見ていた物を憶えていたとしても早い。それだけ執着していたのかもしれない。

「それでは、実際にやってみます。準備は大丈夫ですね？」

「お願い」

奏に確認をしてから実験で行われた物と同じものをやっていく。

◇ ◇ ◇ ◇

結果を、おそらく奏は理解していないだろう。

「どうですか？」

奏は、半分とは言え実験と同じ内容を行った。やり方を間違えたわけではない。それは、実際にやった奏自身がわかっているはずだ。

「……もう終わりなの？」

息は切れている。心臓も激しく動き、肩も大きく揺れている。でも、意識ははっきり

しているし、まだやれる自信がある。

「最初に話した事を憶えていますか？ 私は、最初に言ったと思います。渋谷さん、アナスタシアさんに合わせて行くと。その意味がわかって頂けましたか？」

武内の言葉を上手く呑み込めない。

「今行っている物は、実験の内容よりも上になります。それこそプロジェクト・クローネのマスタートレーナーの意見を取り入れていますので、本当の意味で渋谷さん達に合わせたものになっています。速水さんがステージで見たアイドルと変わらない物を既にやっています」

別に隠していたわけではない。元々、シンデレラ・プロジェクトのアイドル達をプロジェクト・クローネと同じ場所まで連れて行くのが今回の目的だ。次に行われるライブでは、ニューージェネレーションとラブライカの新曲を発表したい。その為にも同じ場所に立つ必要がある。

「速水さんは、上を見ていたから気づかなかったと思いますが、既に多くの階段を上っています。上を見る事は良い事です。しかし、今自分が何処に居るかを知る事は、それ以上に大切な事です。もし目標を見失えば、自分が何処でなんのために歩いて来たかわからなくなりますから」

「でも……凛たちはまだ先に……」

言いたいことはわかる。でも、凜やアナスタシアの場所は遠い。

「二人は、今は必要な分だけしか行っていないません。速水さんとは違い身体に負担を掛けない程度に抑えています。これは、他の方々にも言えます。二人以外は、他にもやっています。今の速水さんと同じように。身体に負担があれば、動きなどに影響があるのは言わなくてもわかりますね？」

今も身体に違和感がある。筋肉痛とまではいれないが疲労感はある。それは、始まる前からわかっていた。

「万全の状態である人間とそうでない人間では結果は明確に表れます。確かにまだ距離はあります。ただ、それは速水さんが考えて居る程は遠くありません。速水さんは、良い目を持っています。今日行われる物で、もう一度見て下さい。先に行く者と自分の居る場所を。その目で」

◇◇◇◇◇

武内の指示で、今日は休みを細かく入れてレッスンを受けた。どちらかと言うと、やるのではなく、見るレッスンだった。だからだろうか？ 今まで見えなかったものが見える気がした。

「どうでしたか？」

武内は、奏が一人だけ残るレッスン場で声を掛ける。他のアイドル達は既にこの場から去っている。

「見えるわ」

奏は、レッスンが終わった後も一人で見ていた。いつもは途中から疲れて意識が薄れる。それこそ最後には、疲労に負けて眠りに落ちるほどに。でも、今日は最後まで意識をもつてこの場所に居た。今も普段とは違う景色を見ている。

「遠くに居たわ。まだ遠くに。でも……」

凜もアナスタシアも。それ以外のアイドル達も自分よりも前に居た。ただ、思っていたよりも遠くに居るとは思えなかった。凜とアナスタシアは、最後まで立っていた。いつもは余裕に見える表情。それこそ勝者として居た彼女達もレッスン中は必死に行っていた。他のアイドル達も何度も立ち上がり、必死に追いつこうとしていた。皆、自分と同じで必死にこの場所に居た。

「差は確かにあります。明確にわかる程に。しかし、速水さんはこの場所に居る事が出来ます。速水さんが目標にしている者と同じ場所に。私は、言いました。危険だと思えば他への異動もあると。しかし、速水さんの頑張りが今もこの場所に居る事を可能にしています。その事だけは忘れないでください」

「近くで見る事の出来る場所に居たのね……私は……」

氣づけばそれだけの話。確かに無様な姿を晒していたかもしれない。でも、この場所に居られる。もしそうでないなら他へ行っているはずだから。用意されているもう一つの場所に。それこそ、プロジェクト・クローネの方でも大槻唯と宮本フレデリカの二人が皆に追いつくために行っている場所もある。

「まだ、道は始まったばかりです。焦るなどは言いません。ただ、自分の事を知りながら歩いて下さい。そうしないと大切なものに氣づくこともできません」

「そうね。歩いている事を忘れていたものね。皆も歩いているけど、私も歩いている。なんで、忘れていたのかしら」

「今日は、このまま家まで送ります」

一晩考える時間があれば次に見る時には変わるだろう。速水奏なら。

◇◇◇◇◇

次の日に行われたレッスンから奏は無茶をしなくなった。自分のペースで休みながら最後までレッスンを終えるようになった。もちろん休んでいる時は、他のアイドル達の記事を見る事を忘れてはいない。

「ねえ、プロデューサーさん。ここの動きなんだけど——」

ただ、その代わりにやる事が増えた。奏は、レッススが終わると撮られていた物を見ながら自分が気になった所を武内に聞く癖がついた。

「そうですね。ここはですね——」

奏の目は予想よりも良いらしく、他のアイドル達の良い所と悪い所を正確に見られるようだ。おかげで、それを自分に活かせないかと質問攻めにされる。体力はすぐには得られないが、知識や技術なら少しは違ってくる。

「——と言った感じですよ」

「ありがとう」

奏は、武内が言った事をノートに記録する。できる限り自分がわかる書き方で。わからなければ、もう一度聞き直して。

「速水さん、そろそろ帰られませんか？」

レッススも終わり、こうして確認をしているといい時間になる。

「迷惑だった？」

書いている手が止まる。彼女も気にしていないわけではない。

「私がかまいませんが、あまり遅くなると御家族の方が心配されます。私としては、親御さんから速水さんを預からせて頂いている身ですから」

「……そう」

奏は、書いていた物を置くと武内に近づく。元々話しやすいように隣に座っていたが、今はすぐ近くに顔がある。

「私は、自分の身を気にした方がいいのかしら？」

目を見て言われる。更に距離が近くなる。

「——いえ、そんな事はありません」

思わず顔を背ける。

「だったら、大丈夫よね？」

奏は楽しそうに笑う。口元を手で押さえて。

「……あまりからかわないでください」

相手は自分よりも年下。大人の言葉にしては酷く情けない。

「ごめんなさい。でも——」

奏の方に向き直すと、目が合う。

「そういうところはまた見たいかも」

年相応な少女の笑顔と不相応な大人の魅力を持つ彼女の笑みは、今は一人の男にだけ向けられる。

第42話

《おまけパート⑨》今回は、少し練習も兼ねています。好きだけど書くのが大変なアイドル達なんで。

《邂逅編》

「我が友が選びし至宝の供物。禁断の果実に真紅の秘薬を加え……食べてもいい？」
「どうぞ」

今日は、346プロダクションにある噴水広場で神崎蘭子と昼ご飯を食べることになった。普段から一人で頑張る事の多い蘭子への御褒美になるわけだが、丁度外回りの途中にお気に入りのハンバーグ屋があり、ハンバーガーを持ち帰りで買ってきた。今日は、蘭子のお気に入りのこの場所で食べる。

「……やつぱり、美味しい」

食べるのは今回が初めてではない。お互いにハンバーグが好きなのでたまに一緒に食べている。

「今日は、ケチャップとハンバーグソースの二つを用意してあります」

「わがとも……」

蘭子の目がキラキラする。

「他にポテトも買ってあります」

「欲深き者には神罰が下る……」

「神崎さんは、レツスンも受けられています。この程度なら問題ないと思います」
「我が友が言うのであるならば……」

彼女も女性なので気になるのだろう。武内から見れば成長期であり、運動もしている
ので気にする必要はないと思う。

「太古から地に根付きし黄金の息吹も甘美なり」

「此処のは、ハンバーグに合う物を選んでいるそうですね。ハンバーガーに使われ
ているソースを付けると美味しいですよ」

「破滅への誘いの音が聞こえる……」

悩みながらも蘭子はハンバーガーとポテトを口に運ぶ。

「——ふっ、瞳を持つ者も所詮はその程度のものか」

何処からか声が聞こえる。

「プ、プロデューサー……」

蘭子は、何処からか聞こえてきた声に怯え、武内の服の袖を掴む。

「落ち着いて下さい」

とりあえず状況を確認する。昼間から幽霊が出るとは思えない。今日は雲一つない晴天だ。

「ボクを探しているのかい？」

再び声が聞こえ、そちらの方を見る。そこには、蘭子とあまり変わらないぐらいの少女がいる。

「貴女は？」

「ふつ、名前なんて大した意味はないさ。この世界で生きていく上で必要ではあるが、それだけではボクを表す事はできないからね」

状況はわからないが幽霊ではないようだ。

「神崎さん。幽霊などではないようです」

武内に言われ、武内を盾にするように覗き見る。

「本当だ……：汝は、何処の世界から参られし者か？」

「君ならわかると思っただけど、ボクと同じ世界が見える君なら。それとも、既に君はこの世界に囚われてしまったのかい？」

何者かはわからないが蘭子を挑発しているようだ。

「我が名は魔王ブリュンヒルデ。何人たりとも我が魂を縛る事などできぬ」

「本当にそうかい？ その口に付いている証を見てもそう言えるかな？」

蘭子は、指で自分の口元を拭う。

「その刻印が全てを物語っている」

蘭子の指には、食べた時に付いたケチャップが付いている。

「真紅の秘薬!？」

「君ともあろうものが世界の目があると云うのにそんな醜態を晒すとはね」

「くっ……汝は何者だ、答えろ!」

「二宮飛鳥。もし君とボクの道が交わればまた出会う事もあるだろう。もつとも、魂がそうさせるだろうけどね」

そう言うと、二宮飛鳥は立ち去る。

「我が力にも匹敵するだけの存在がこの世界に……異世界からの旅人よ、また相見えようぞ!」

よくわからないが時間もないので残りを口に運ぶ。

次回予告（嘘）。

運命に導かれし少女たちは再び交差する。次回、「ボクは、君と運命を共にする者さ」を御期待ください!

◇◇◇◇◇

《LIPPS①》

プロジェクト・クローネのプロデューサーも兼任してからしばらくすると美城専務から新たなユニットを担当するように言われた。内容は、プロジェクト・クローネのアイドルに新しく選んだアイドルを加えて新しいものを創り出すプロジェクト。ユニットの名前は、『LIPPS』。クローネからは、速水奏、塩見周子、宮本フレデリカの3人。346プロダクションでも指折りの人気を誇る城ヶ崎美嘉。そして、新人アイドル一ノ瀬志希を加えて作られることになった。

武内がおフィスに出勤すると志希がソファで寝ている。武内の予備の上着を布団代わりにして。志希の担当になってからはよく見る光景だ。

「起きて下さい、一ノ瀬さん」

寝ていても起きていてもかまわないので声だけ掛けて自分のデスクへと向かう。

「ふわあ、よく寝たー」

わざとらしい欠伸をして志希は身体を起こす。

「ちゃんと起こしてよー」

志希から苦情の声上がるが応える事はできない。狸寝入りをしている時に起こすと抱きつかれるからだ。たまに本気で寝ている時もあるが無害なので先ほどのような

対応をしている。

「今日も早いですね」

「うん、早いよー。今日は、4時には来たかな？ 暇だったから此処で遊んでたんだよー」

「あまり上手くはいかなかったのですか？」

志希が此処に早くに来る理由は幾つかあるが暇な時は上手く行かなかった時が多い。彼女は、アイドルではあるが研究者でもある。その証に白衣を普段から身に着けている。

「そうなんだよねー、考えてたのとは違ったんだー。それでストレス解消でキミの上着をクンカクンカしてたの！ 今日もナイススメル！」

自分の上着を目の前で嗅がれるのも慣れてはきた。彼女は、おいに興味があるらしくその分野を研究している。どういうわけか自分のおいが好みらしく隙あらばにおいを嗅いでくる。

「今日は、LIPPSでレッスンがあります。それまでは、休んでいてください」

「だったらキミのおいを嗅がせてほしいな。そしたらコロってグウグウするから」

期待の目で見られるがいろいとまづい。本当に。前に抱きつかれている状態でおいを嗅がれている所を見られた時は一騒動あった。

「ダメです」

「もう、ケチだな。でも、キミのにおいが嗅げ無くなるのも嫌だし、志希ちゃんを虜にするなんて悪い男だね、コノコノ」

志希はそう言うのと寝転がり、上着に顔を埋めてにおいを嗅ぎ始める。

「クンカクンカ、いい匂い、いい匂い。なんでこんなにいいのかな。なんでかな」
楽しそうにしているので自分の仕事に――

「――これは？」

武内が仕事の支度をしていると小さな小瓶を見つめる。

「おっ!? 見つけちゃった? んふ、それはね! 志希ちゃん発明の香水だよ。ちよつと試してみてよ!」

「香水ですか?」

たまにだが試作品の実験に付き合う事もある。

「今日のは凄いよ! 『ネムネム君』って名前にしたんだけどどうかな?」

「ネムネム……もしかして、睡眠効果があるのですか?」

そうだとしたらまずい。会社に来て早々寝るとかはあつてはならない。

「残念だけど、ブツブツ。ネムネム君は、キミの代わりに寝てくれるんだよ。早い話が気つけ薬かな?」

「そうなんですか」

代わりに寝ると言うのはわからないが、眠気覚ましのようなものなのかもしれない。

「……一つだけ聞いていいですか？」

ある疑問が浮かぶ。

「なにかなく？ あたしのスリーサイズはもう知ってるよね？ もう、エッチなんだか

らー！」

話が進まなくなるので本題に入る。

「これは、嗅ぐだけで効果があるのですか？」

「そうだよ。なんてつたつて香水だからね、えっへん！ それがどうかしたの？」

「一ノ瀬さんも嗅がれたのですか？」

「それはそうだ……ああ、だから眠くないのか。テヘッ」

上着から顔を出す志希を見て、今日はレッスンが始まるまではこのままなんだなと思う。志希とのアイドルとプロデューサーの関係は始まったばかりだ。

第43話

本日は、トレーナーと入れ替わりでレッスンをしている。普段は、撮られた物でもう一方を確認している。ただ、実際に見るのとは違うので再度確認の為に行う。

「島村卯月！ 頑張ります！」

島村卯月が気合いを入れて横ステップを行う。昔から苦手な物ではあったが果敢に挑戦してきた。今は、少しアレンジを加えたものをやるようになったが――

「――どうですか？」

卯月はやり遂げて自信に満ちた笑みで武内に聞く。

「いいと思います。頑張りましたね」

「やりました！ やりましたよ、未央ちゃん！」

トレーナーが居ない時は、本田未央が一緒になつて練習していたそうだ。未央は、ダンスに関しては、シンデレラ・プロジェクトの中でもトップクラスの实力者だ。

「よくやった、卯月！ しかし、これもまだ始まりに過ぎない！」

「はい、老師！」

未央が無い髭に触れる動作をしている。それに卯月も合わせている。老師とは何だ

ろうか？

「ねー、Pくん」

「プロデューサー」

城ヶ崎莉嘉と赤城みりあの二人が近寄ってくる。

「どうかされましたか？」

「きらりちゃんのやつってるのって難しいの？」

「最近、一緒にレッスンできないから寂しいな」

凸レーシヨンの保護者役である諸星きらりと離ればなれで寂しいのだろう。凸レーシヨンでもレッスンは行っているが、今はできるだけ個人の實力の向上を考えている。そのため、一緒にやるレッスンは少なくなり、仕事ぐらいでしか会う機会がない。

「申し訳ありません。寂しい思いをさせてしまっているようで」

「ホントだよー！ 責任とって、今度みんな遊びに行こうよ！ もう場所は決めてあるんだからね！」

「近くにあるゲームセンターなんだよー！ 一緒に行こうよ、プロデューサー！」

少し困るが、莉嘉とみりあとは最近一緒に居る時間がない。二人共、あまり遅くまでアイドル活動をさせられないので時間に限りがある。仮に遅くても仕事やレッスンで会う事もあまりない。

「わかりました。今度、一緒に行きましよう」

「ホント!? やったー! Pくん大好き!」

「みんなで遊べるんだね!」

少し大変だが喜んでいる二人を見ると頑張るしかない。

「随分と甘いんだね」

緒方智絵里に膝枕をされている双葉杏から言葉を掛けられる。一通りレッススが終わったのでだらけているようだ。

「皆さんとの時間を作る事も大切ですので」

「ふーん。まあ、プロデューサーがいいんじゃないけどさ」

杏は、視野が広く勤も良い。こちらの事情もわかっているのだろう。

「そういえば、緒方さん」

「はっ、はい! なんてでしょうか?」

油断していたからか、智絵里の小さな身体がビクツと僅かに跳ねる。

「その、三村さんとの番組の方はどうですか?」

そろそろ三村かな子をメインとした料理番組の撮影が始まる頃だ。智絵里は、助手役として。杏は、マスコットキャラとして出演が決まっている。今日は、かな子は用事がありレッスンには参加していない。

「その……かな子ちゃんと杏ちゃんが居るので怖くはないです。でも、上手にできるかは不安です」

「大丈夫じゃない？ 最近、かな子ちゃんとレシピ貰ってやってるじゃん」

「かな子ちゃんのお家で作るのには慣れてるから。でも今度は、スタジオで作らないといけないから」

勝手が違うのは確かに不安だろう。

「編集などでやり直しもできます。あまり気にせず楽しんでみてください。私も撮影の時は一緒に行きますから」

「本当ですか？」

「私は、緒方さんのプロデューサーですから」

武内の言葉に智絵里は喜ぶが、その一方で杏からあきれ顔で見られる。

「あー疲れたー」

「もう……だめ……」

多田李衣菜と神崎蘭子の二人は、他のアイドル達よりも一生懸命レッスンをしていた。この二人は、他よりも体力などがない。その代わり、李衣菜はボーカルなどの音楽面が優秀。蘭子は、ヴィジュアル面などの方で活躍している。どちらも理由がある訳だが、それでももう少しできるようになってもらいたい。

「どうですか？」

「莉嘉ちゃんのみりあちゃんにも負けるのは情けないよね」

「無垢な妖精たちその……くやしい……」

内容は少し違うが、莉嘉とみりあは多めにレッスンを受けている。これは、プロジェクト・クローネの橘ありすにも言える事だが他との差を埋める必要があるからだ。そのため、純粋な身体能力では勝てないものの上手く身体を扱えるようになるために負担が少ない。体重も軽い事もあり意外と長く持つ。

「プロデューサー、私はこの後どうすればいいの？」

卯月との寸劇が終わり、遊んでいた未央がこちらへと来る。

「本田さんは、今日はこのまま終わりですね。明日は、ニュージェネレーションの方でやりますので今日は身体を休めて下さい」

「でも、なんだかウズウズするね。今もしぶりんは、レッスンしてると思うと」

「本田さんのお気持ちはわかりますが、その分を明日に回しておいてください。明日は、できたばかりの曲を皆さんに聞いてもらいます。その後は、新しい振付を試さないといけませんから」

「そうなんだよね。明日、私達に新しい曲が届くんだよね」

どうやら今の話は逆効果だったようだ。未央のやる気に火を点けてしまった。

「島村さん」

「はい、なんででしょうか？」

「申し訳ありませんが、今日は本田さんと早めに帰って頂けませんか？　どうも明日の事が気になるようで」

「明日の事ですか？　……そう言えば、新曲を聞くんですよね!?　どうしよう、未央ちゃん!？」

「落ち着くんだ、しまむー!」

「はい、落ち着きます!」

「どうやら卯月も同じように気になってしまったようだ。様子から察するに忘れていたのだろう。余計な事をしてしまった。」

「お二人共、着替えの方をお願いします。今日は、私が家まで送ります」

「このままだとレッスンを始めてしまう。気持ちはわかるが、明日は新しい振付をいろいろと試して決めないといけないので余裕を持たせておきたい。」

◇◇◇◇◇

卯月と未央を家に送り届けてから別のレッスン場にも顔を出す。少し遅れたが結果

だけ聞ければいい。

「おっ！ プロデューサー」

「あれれー、どっかしたのー?」

「お疲れ様です。プロデューサーさん」

神谷奈緒、塩見周子、鷲沢文香の3人の下に来る。こちらは、既にユニットとしてのレッスンを受けている。

「もう終わりましたか?」

既にトレーナーの姿はない。時計も終わりの予定時間を少し過ぎていている。

「とっくに終わったよ」

「プロデューサーが来るのを待つてあげてたんだよー。優しいシユーコちゃんに感謝してね、プロデューサー」

「……私も待つていました。プロデューサーさんの事を」

文香だけ少し間があった気がする。ただ、3人とも待たせてしまったようだ。

「特に問題などはありませんか?」

「うーん、どうだろう? っっていうか、それをプロデューサーが見てくれないと。あたしじゃわかんないんだからさ」

「そうそう。これは、責任問題だね。シユーコちゃんは甘い物で許してあげよー」

「私もプロデューサーさんに見てほしかったです」

「申し訳ありません」

今回は完全に非がこちら側にある。

「それでどうするんだ？ 話でもする？」

「そうですね。ただ場所は変えましょう」

「おつ？ もしかして、シユーコちゃんの提案が通るのかなー？」

「私は、何処でもかまいません」

「文香、ここは周子に乗るところ」

「そうだよ、ふみふみ。プロデューサーさんにご飯を食べに行こうよー」

「プロデューサーさんですか？」

ふと、文香と目が合う。

「……迷惑でなければ」

「よし！ 決まりつて事でよろしくな！ プロデューサーー！」

「あたしは何処でもいいよー。カフェじゃなければねー。手抜きはだけは許さないからね？」

「私も何処でもいいですよ。プロデューサーさんが決めた場所なら何処でも」

どうやら何処かに行く事は決まったようだ。

「わかりました。まだ用事が残っていますので着替えが終わりましたらプロジェクト・クローネの待機場所で待っていてください」

今日の分は少しだけにしておこう。レッスン内容を聞くのも仕事なのだから。

第44話

場所はできるだけ近い所を選んだ。塩見周子は、346プロダクション近くの女子寮になるのだが神谷奈緒と鷺沢文香の二人は家になる。周子を寮に降ろしてから奈緒、文香の順で送りたい。

「プロデューサーって、いろんな店知ってるよな」

今日選んだ店は、昔ながらのレストランだ。こじんまりとしている店だが落ち着くので仕事で利用している。

「此処は、昔に仕事で来たことがあります。それから、気に入って通っていますね」
「やっぱり、アイドルの仕事なのー？」

「はい。正確に言えば、食レポと言うヤツですね。雑誌のお仕事ですが飲食店を巡る物がありました。此処は、その中の一つになります」

「なにか、プロデューサーさんのオススメはありますか？」

「そうですね……」

文香の言葉で考えてみるが何がいいのだろうか？

「オムライスでしょうか？ ハヤシライスなども美味しいですよ。此処は、自家製のデ

ミグラスソースが評判のお店ですので」

「ふーん。じゃあ、私はオムライスにしようかな?」

「プロデュースーさんはどれにしますか?」

「私は、ハヤシライスにしようと思います」

「……だったら、私もそれにしてみます」

「なんでなのかな? ふみふみ?」

周子の問いかけに文香の顔が赤くなる。

「……初めてのお店ですので……知っている方と同じ方がいいと思うからです」

「なるほど。ふみふみは賢いな」

「おいおい、あんまりからかうなって。それよりも周子はどうすんだ?」

「あたし? んー、どれにしようかな? じゃあ、これにしようかな」

「ハンバーグ定食ですか?」

「そうだよ。ほら、プロデュースーってハンバーグ好きでしょ? このお店もそうな

のかなーって思ってたんだけど、違う?」

「確かに此処のハンバーグも美味しいですね。ただ、この前食べましたので今日は」

「んっ? ってことは、オススメなのか? じゃあ、本当はさっきのにハンバーグも入っ

てたのか?」

「そうなりますね」

「そっかー。そうなると悩むな。オムライスもいいけど、プロデューサーのオススメは期待できるしなー」

「オムライスにしちやいなよ。シューコちゃんやハートを描いてあげるから。奈緒ちゃんの好きな。きやあー、奈緒ちゃんラブリーー！」

「別に好きじゃねえよ！ 別にハートなんて……描かないし……」

「じゃあ、なに描くの？」

「それは、まあ——って何言わせようとしてんだよ！」

「あとちよつとだったんだけどなー。それで、奈緒ちゃんはどうするーん？ みんなは、

決まってるよ？」

「調子がいいな、周子は。でも、そうだな……」

奈緒はメニューに書かれているオムライスとハンバーグの所を指で行ったり来たりしながら動かして決めている。

「……なあ、周子。分けっこしないか？」

「決まらなかつたんだね。でも、その提案受けちゃうよー。一挙両得って言うしね。合ってる？」

「二つの事をする事によって二つの利益を収めることとあります。今回の事に關して

合っているかは難しいところですけど」

「まあ、なんでもいいじゃん。それよりも早く頼もう」

とりあえず頼む物も決まったのでまとめて注文する。

「それで、レッスンに関して聞かせて頂けますか？」

本題に入るわけだが反応は悪い。

「どうって言われてもな？」

「シューコちゃんに聞いてもダメだよ？」

「私も、自分の事を頑張るだけで……」

「そうですか。では、どこか不満などはありませんか？」

「それは、やっぱあれだろ？ プロデューサーが居ないぐらいだな。頼りきってるから居てくれないと正直不安だ」

「だよなー。プロデューサーに全部お任せフルコースだもんね。シューコちゃんとしては、プライベートもお任せしたいぐらいだしー」

「私も見ていてもらいたいです。まだ自信のない時がありますので」

「そうですか」

最近、プロジェクト・クローネは忙しくなってきた。ライブ後に多くの仕事が決まり、その合間にレッスンも行っている。シンデレラ・プロジェクトでも次のライブに向けて

動き始めている。美城常務にスタッフの増員を要請したので人手は足りているが、自分は一人しか居ない。

「今度でよければ私もレッスンを見学させて頂きます。報告でも特に問題がないようですが、実際に見るのは違いますので」

「本当か？ だったら、頑張らないとな！」

「あれあれ、普段は頑張つてないのかな？」

「いや、頑張つてるし!? ただほら……プロデューサーにみつともないことか見せられないじゃん」

「まあね。じゃあ、シューコちゃんもいつも以上に頑張っちゃおうかな。それで、御褒美をもらおうとしますか」

「御褒美ですか？」

「そつだよ、ふみふみ。頑張った子には御褒美があるもんだよ」

周子の言葉で文香は考え込む。

「あたしは、あれだな。普段からお世話になりっぱなしだから特にいらなかな？」

「これ以上は、さすがに悪いし」

「……私もやめておきます。これ以上何かを頂くわけには……すみません」

文香の声が徐々に小さくなる。

「そう言われると、困っちゃうな。あたしだってお世話になつてゐるからね。もう仕方ないな、プロデューサー？」

「なんででしょうか？」

「何かしてほしい事とかある？ 今なら可愛い女の子たちがご奉仕しちゃうよー」

「おい、なんだよ！ ご奉仕って！」

「おやおやく、なにをそんなに慌ててるのかな、奈緒ちゃんは？」

「そつ、それは……」

周子の言葉で奈緒の顔がみるみる赤くなる。それをニヤニヤと眺めている。

「奈緒ちゃんが何を想像したのは置いといて、何かないの？」

「特にはありませんね」

「可愛い女の子たちが日頃の恩返しをしようって言つてゐるのに欲がないねー。たとえば

さー、ふみふみに膝枕してもらつて本を読んでもらうとかは？」

「私ですか？」

「そうそう。前にレッスンで疲れてたありすちゃんを膝枕してるのを見たけど、居心地が良さそうだったからねー。あれなら疲れなんてどっかにポイポイでしょー」

「……私でよければ、頑張ります」

顔を赤くして俯く文香に言われるといけない事をさせている気分になる。

「鷺沢さんもお疲れだと思えます。それにこうして皆さんと過ごすのも十分息抜きになりますから」

「そういうもん？ 確かにアイドルと食事ならそうかもしれないけどさー」

「——お待たせしました」

食事を持ってきた店員がやって来る。

「話はここまでにして食事にしませう」

仕事に関する話はほとんどできなかつたが、それでも3人が上手く行ってそうで安心した。それにユニットのリーダーを周子に任せればいいのがわかったのも収穫の一つだろう。

◇◇◇◇◇

食事も終わり、周子を寮に。奈緒を家に送り届け、最後に文香の番になる。

「今日は、ありがとうございました」

鏡越しに文香がお礼を言う姿が見える。

「いえ、私の方こそ。本当ならレッスンを少しでも見る予定でしたのに」

「プロデューサーさんがお忙しいのは知っています。お身体は大丈夫ですか？」

「大丈夫です。鷺沢さんは？」

「私も大丈夫ですね。最近は、レッスンの後もそれほど疲れを感じませんので」

「鷺沢さんの努力の結果ですね」

「はい」

奈緒の家から、文香がお世話になつている叔父の家まではそう遠くない。少しの時間も文香には惜しい。

「プロデューサーさん。無理だけはしないでくださいね。プロデューサーさんを頼りにしている私が言うのもどうかとは思いますが、でも、無理をして倒れでもしたら……そう思うと……」

鏡越しに見る文香が心配そうに、不安そうにこちらを見ている。

「先ほども言いましたが問題はありません。人員も増やして頂きましたので。鷺沢さんは、鷺沢さんの事を考えていてください」

「そうですね……私と違ってプロデューサーさんなら」

「心配して頂いてありがとうございます」

双葉杏もそうだが、アイドル達の中にも気づいている者もいるようだ。それでも今を守りたい。彼女達を知る事の出来る今の距離をもう手放したくはない。

第45話

《おまけパート⑩七夕なので》本編も書かずにおまけばかり書いています（笑）

《アナスタシア》

アナスタシアの仕事の帰りに二人で街から少し離れた場所まで行く事になった。今日は、7月7日。空には星で作られた天の川が現れる日だ。

「わがまま言つて、ごめんなさい」

後部座席に座るアナスタシアは鏡越しに謝る。

「かまいませんよ。今日は、大変でしたからね」

プロジェクト・クローネでのアナスタシア一人での仕事。撮影があまり上手く進まずに夜遅くまで掛かった。

「それに今日は七夕になります。星が好きアナスタシアさんのお気持ちもわかりますから」

アナスタシアは星を見るのが好きだ。だからだろう、ふと星が見たいと言葉を口にした。

「Спасибо。ありがとうございます、プロデューサー」

鏡越しに見えるアナスタシアの笑顔を見られればこの程度の苦勞は問題にならない。「この先に有名な場所があります。そこでなら綺麗な星達が見られるはずです」

◇◇◇◇◇

着いた場所は、昔に仕事で来たことのある場所だ。此処は、星が見られることで有名な場所でも多くの人達が来ている。

「ДОВОЛЬНО」

アナスタシアは、満天の星空を見上げ言葉を零す。言葉はわからないが彼女の表情を見るに良い物だろう。

「あちらの方に行きましょう」

車から降り、場所を変える。既に他にも客が来ているので静かな場所を探す。

「プロデューサー。ここなんて、どうですか？」

アナスタシアが良さそうな場所を見つける。

「そうですね。此処にしましょう」

此処に来る途中で買ったピクニックシートを下に敷き、二人は並ぶようにして座る。

「コーヒーです。夏ですけど、夜風は冷えますからね」

「Теплый это。温かいですね」

二人は、コーヒーを飲みながら星を見る

「ロシアでは、天の川の事を Млечный Путь。彦星は、Альтаир。織姫は、Лира。星の川で二人は1年に一度しか会えないんですよね？」

「はい。実際は、常にそこにあるのでそうではないのですが、夏に天の川が見え易いということもありそうになっています」

「隠れて会えているんですね。Это не одиноко。それなら寂しくないです」

「そうですね」

二人は、微かに聞こえる人の声と、風が草木を揺らす音を聞きながら何も考えずに星を見る。

「こういう時間は好きです。ゆっくりと、流れる時間。なんだか、И спокойствие。安心します」

ここのとこ忙しくもなってきた。ラブライカのパートナーである新田美波ともレッスングらいでしか会う事もない。いや、二人は女子寮なのでそうではないのかな？

「新田さんとはどうですか？」

「美波ですか？　そうですね……どう言えばいいんでしょうか？」

アナスタシアはコーヒーを口にし考え込む。

「美波の傍は、とても落ち着きます。心もポカポカします」

「それは、よかったですね」

アナスタシアは、プロジェクト・クローネで一人だけで活動している。美波は、シンデレラ・プロジェクトのリーダーとしての立場がある。どちらも負担は大きいはずだ。心を休める場所が必要になる。

「でも、プロデューサーと一緒に居る時も、美波と傍に居る時のように感じます」

アナスタシアが優しく微笑む。夜空の星達の光を受けた彼女の姿は美しく、とても儂いものに見える。

「Пожалуйста, много остановитесь в это
М городе. Продеューсер」

最後になんと言ったのかはわからない。ただ、少しでもアナスタシアとの距離が近づいた気がした。

◇◇◇◇◇

《大人たちの飲み会③》

「遅いぞー!」

「すみません」

星を見終わり、アナスタシアを女子寮に届けた足で飲み会へと参加する。既に始まってから時間が経っているのだからいろいろと状況は悪い。

「もうダメです……許して下さい……うっぷ……」

最も重症なのは、荒木比奈だろう。場所が悪い。なんで彼女は、片桐早苗と姫川友紀の間に居るのだろうか？

「もう……ダメですよ……プロデューサーさん。そこは、ウサミンのヒミツがあ……うへへ……」

こっちは、茶色い長い瓶を抱きながら眠っている安部菜々が横になっている。フアンの人達には見せられない姿だ。

「ほらほら、武Pも飲んで飲んで!」

「そうだよー! ほらほらグラス持って!」

「私がお酌してあげますね!」

この状況でも、早苗、友紀、そして高垣楓はまだ生存している。この3人が二人を潰したのだろうか。

「やっと来てくれたわね」

「忙しいのはわかりますけど早く来てくださいよ、プロデューサーさん」

この3人と一緒に生存している所を見ると流石としか言いようがない。川島瑞樹と千川ちひろは、今もまだそこに健在だ。

「他の方はどうしましたか？」

「途中で帰ったわ。おかげで大変だったわよ。まあ、頑張つてね、武内君」

「でも、ここからはプロデューサーさんもいますから安心ですね！ 頼りにしていますよー！」

暗に3人の対応を任せられる。

「武内さん？」

横から楓がこちらを不思議そうに見ている。

「どうかしましたか？」

「飲まないんですか？」

手に持つグラスには、なみなみに注がれている。

「武Pのイッキが見て見たい！」

「応援するよ！ 武P！ 武P！」

「フレフレ〜！」

既に戦場に居る。

「わかりました」

来る前からわかっていた。この3人を満足させないと行軍は止まらない。

「きやあー！ かつこいいー！」

「決まってるね！ よし、あたしも負けないよー！」

「今度は、どれにしましょうか？」

飲み干す頃には、新しい物が用意されている。

「あまり無理しちゃダメよ？ どうせ、朝まではこうなんだから」

「私は、明日はお休みですけど……プロデューサーさんはどうでしたっけ？」

「——大丈夫です。この程度では負けませんから」

明日も仕事だ。

「よく言ったわ！ だったら、早苗さんも徹底的に付き合おうじゃない！ 友紀ちゃん、

あたしにもー！」

「OK！ じゃんじゃん注いじゃうよー！」

「かつこいいです！ 武内さん！ 私も負けてられませんね！」

次の日の結果は言うまでもないだろう。

第46話

本日は、いよいよニュージエネレーションの新曲のお披露目になる。渋谷凜、島村卯月、本田未央の3人はこれから通常のレッスンに加えてこちらの方もやっていく事になる。

「——どうでしょうか？」

先ずは、できたばかりの曲を3人に聴いてもらう。

「感動しました！」

「うーん、でもダンスに力を入れてみるんだよね？」

「未央じゃないけど、大変そうな気がする」

素直に曲を聴いていた卯月と違い、未央と凜は少し難しそうな顔をしている。

「そうなんですか？」

「歌いながら動くからね。リズムが良いといろいろとその辺りが難しいと思うよ」

「とりあえず内容を見て見ないとね」

未央は、ダンスをメインに個人レッスンをしているからわかるようになってきたのだろう。凜は、経験からくる勘かもしれない。

「本田さん、渋谷さんの言う通りです。予め言っておきましたが、今日はいろいろと試すことになります。皆さんは、今も成長しています。今までよりも内容の質が高い物に挑戦して行く段階になります。そこで、その段階に合わせて用意した物をやって頂きます」

「段階ですか？」

「はい。早い話が、下から順にやって頂きまして最終的にどれをやるか決めます。最初の物に関しては、流れを覚える程度の物と考えて下さい。最後の物に関しては、用意はしましたがおそらく難しいと思います。いずれはできるようになるとは思いますが、今の状況から考えると難しいと思います。これに関しては、今後の目標として見て下さい」

「そんなに難しいんですか？」

「未央ちゃんとしては、それをやってみたいんですけど？」

「私も同じ」

二人からはやる気を感じる。言葉では意味がない。

「レッスンを始める前に全て見てもらいます。言葉よりもその方がいいと思います」



今回は特別にトレーナーに頼んでダンスを段階で調整してもらった。内容に関しては、振付などが変わるだけなのだが、実際に演じてみればその大変さがわかる内容だ。なにせ、最終段階の物は、346プロダクションでも限られた者しかできない内容になっている。それこそ、運動能力が高いとされている日野茜、城ヶ崎美嘉などの選ばれたアイドル達だ。

「うん、無理だね」

「これは……未央ちゃんでも諦めるかな……あはは……」
「これって、できるんですか？」

一通り全部見たわけだが、最後に関しては諦めたようだ。むしろ、見ただけで内容を理解できるだけ成長したと言える。

「いずれは、この段階をお願いしたいです。もともと、ダンスに力を入れる場合ですが。他にも、ボーカルやヴィジュアルなどに重点を置く場合もありますので、これが全てではありません。特に島村さんの場合は、ダンスよりもヴィジュアルの方を考えています。小日向さんとの仕事もその一環です」

シンデレラ・プロジェクトとは違うが、アイドル小日向美穂と卯月は、限定的ではあるがユニットを組んでいた。ニュージエネレーションとは違い、可愛い女の子をイ

メージしたものだ。そのため、ダンスなどよりも自分の魅力を見せる為のものを重点的に行った。

「もしかして、足を引つ張ってますか……私……」

卯月が落ち込むが、それ以上に他の二人からの視線が痛い。

「それは違います。先ほども言いましたがダンスに力を入れた場合です。ユニットは、個性はもちろんです。先ほど重要になります。本田さんの明るく元気なダンス。渋谷さんの繊細で力強いボーカル。そして、島村さんの人を惹きつける笑顔があつてこそそのニュージエネレーションです。ですので、島村さんでなければ、ニュージエネレーションとは呼べない物になります」

「そうだよ、しまむー。しまむーが居ないとニュージエネじゃないって」

「そうだよ、卯月」

「未央ちゃん、凜ちゃん……私、頑張ります！ 頑張りますから絶対に！」

どうやら持ち直してくれたようだ。

「それでは、見終わりましたのでトレーナーの方を呼んできます。それまでに準備の方をお願います」

待機していたベテラントレーナーを呼んで、レッスンを始める。基本的に武内は傍観に徹する。今回は、ベテトレが全て行い、これからの工程を判断して行く。武内の仕事

は、その際に意見を言うのと他との調整だ。

「最初に行くものは、あくまでも流れを把握するための物だ。ただ、これが基になっている。ここで多くを学ばなければ先は短いものになると最後まで忘れるな」

それぞれが返事をして準備は整う。

「それでは、始める」

◇◇◇◇◇

今日のレッスンで最も長いのが最初の段階だ。ベテトレも言っていたがここである程度できていないと新しく加わる要素に対応できない。

(早く覚えたのは、渋谷さん。余裕があるのが本田さんですか)

この二人は、早く覚えそうだ。凛は、既に細かい所を確認している。未央は、動きの一つ一つに余裕を感じさせている。

「ここは、こうした方がいいですか?」

「いや、重心を意識してやってみろ」

卯月は、トレーナーの指導を受けている。流れは覚えているが、不安な個所があるようだ。ただ、ダンスのレッスンを多めにしているからか時間を掛ければできるようには

なっている。

(ボーカルレッスンはどうしますか……)

ダンスもそうだが、歌も当然のように必要だ。できれば並行してやりたいが時間を考えるかどうか？

(トライアドプリムスの方も考えて……)

トライアドプリムスの神谷奈緒も他でユニットを組んで既にレッスンを行っている。その為、トライアドプリムスのレッスンは後に回している。ただ、同時期の発表を考えているので凛の調整を第一に考えている。とはいえ、ニュージエネレーションの内容によつては変わってくる。

「できましたー！」

「まあ、いいだろう。合格だ」

「プロデューサーさん、やりましたー！」

卯月が笑顔でこちらを見ている。できた事が嬉しいのだろう、ぴよんぴよんと小さく気持ちと共に弾んでいる。

「おめでとうございませす」

「ありがとうございませす！ 頑張りましたー！」

彼女達がステージに立つためなら調整ぐらいやって見せるだけだ。



今日のレッスンは、途中で終わる事になった。時間もそうだが実際に踊った彼女達からの意見を検討したいとの事だ。後で、ベテトレと話し合う必要がある。

「おかえりなさい、プロデューサーさん」

「おかえりー、プロデューサー」

オフィスに戻ると、速水奏と北条加蓮が居た。

「何か用ですか？」

「いいえ、そうではないんですけど……邪魔かしら？」

「いえ、そんなことはありませんが」

「だったら、居ていい？ 最近、レッスンばかりで会ってなかったから遊びに来たんだー。邪魔しないからさ、ねっ？」

「そうですか。今日は、特に人が来る用もないのでゆっくりなさって下さい」
用がないようなので、デスクへと座る。

「……どうかされましたか？」

仕事の準備をしていたら、加蓮と目が合う。

「ううん、なんでもないよ。大変そうだなーって思っただけで」

「素直じゃないのね」

奏に言われ、加蓮が奏とじゃれ合い始める。

「……これは？」

デスクの上に小さな箱がある。丁寧にラッピングされているが見覚えはない。

「私からの贈り物。かな子さん達のように手作りではないけど、日頃の感謝の想いを籠めてね」

「そうですか。ありがとうございます」

「ズルい……」

「今度、持ってきたらいいじゃない」

奏からのプレゼントを貰えた。考えてもいなかったので嬉しい。とはいえ、先ほどの言葉だと食べ物なのだろうか？

「これは、食べ物ですか？」

「そうよ。甘い物は苦手？」

「いえ、好きです。ありがとうございます」

話は終わったが奏の視線がまだある。

「今、頂いても？」

「それは、貴方にあげたものだから。いつでもいいわよ」
「では、失礼して」

包装を解くと、中にはクッキーが入っていた。数は少ないが包装から見ても高そう
だ。

「頂きます」

一つ手に取り食べてみる。

「……美味しいですね。それに甘さはありますが、食べやすいです」

「そう？　口に合ってよかった。砂糖をあまり使っていないようにだけど、甘さはしつかりとあるでしょう？　甘い物が苦手な人でも食べやすいように作られているの」

初めからこちらの事を考えてくれたようだ。本当に気持ちがいい。

「——ねえ、プロデューサー！　今度、アタシがネイルやってあげる！　男の人も手元は
気にした方がいいよ、絶対！」

「そうですか？」

「そうだよ！　だから、今度やるからね！　約束だからね！」

「はい……」

加蓮の気迫に圧され返事をしてしまう。それを奏は楽しそうに見ている。



《大人の飲み会④》続き。

「——あたしとしたことが……」

片桐早苗は最後の一滴まで飲み干してから倒れる。

「残りは……」

武内は、相手を探す。

「もう、らめえ……えへへ……また、ほーふらんあ〜」

姫川友紀は、勝手に自分のペースで飲んで自爆した。もしそうでなければ、早苗には勝てなかっただろう。

「ううう……外のロケはイヤ……」

「きもひはるひ……」

川島瑞樹と千川ちひろも流れ弾が当たった。敵は、3人居る。

「次は、私とですね！」

最後の一人が武内の横に立ちふさがる。

「離れてください」

「いやですよー！」

高垣楓は、武内に寄りかかる。

「せっかくこうして飲めるようになったんですから」

その言葉には弱い。彼女達が悪かったわけではない。自分が離れたのだ。

「そういえば、今日は七夕だそうですね」

「そうですね。なにか、書きます?」

七夕という事もあり、小さいながらも竹が飾られている。その近くには、ご丁寧に短冊もある。

「せっかくですのので」

楓の分の短冊も取り、内容を考える。

「私は、もう決まっています」

酔っているとは思えないぐらいにスラスラと書いていく。

「こうして、皆でずつと一緒に飲めたらいいですね。これからはずつと」

「そうですね」

楓の願いは、ありきたりな物だ。ただ、それは叶う事が難しい物かもしれない。昔は、そう思っていたから。

「私も、同じことを書きます。そうすれば、より叶うはずですから」

武内も楓と同じように書く。

「武内……今だけは、プロデューサーさんでいいですか？ 他に誰もいませんし」

此処は個室で、他の人間は深い眠りの中に居る。

「此処だけでなら」

「やりました！ じゃあ、プロデューサーさんは、楓って呼んでくださいね。昔みたい
に。そうじゃないと不公平ですからね？」

楓の顔がすぐそこにある。昔と変わらずそこに。

「今は……わかりました。楓さん」

「なんですか？」

「少し離れて頂けませんか？」

「それは、ダメですよー」

より楓の重さを感じる。

「ですが、もうそろそろ皆さんを送らないといけません」

「いいじゃないですか、少しくらいなら……離れていた時間に比べれば少しだけです」

「そうですね……」

今だけは、このままで――。

第47話

「ニュージエネレーションのレッスンが始まった。予定とは少し違ったが、順調な始まりになったと思う。これも彼女達が日頃から努力をしてきた結果だろう。今日は、ニュージエネレーションの方はトレーナーに任せて、もう一つの方も始めていく。」

「緊張しますね」

「美波、私が傍に居ます」

新田美波、アナスタシア。今日は、ラブライカの新曲を初めて二人に聴かせる。

「今回の曲は、ボーカルに力を入れています。他にも動きの一つ一つに繊細な動きが求められます。どちらかと言えば、シンデレラ・プロジェクトよりもプロジェクト・クローネに近い物と思つて頂くといいかもしれません」

今回用意された曲は、プロジェクト・クローネの為に作られた物だ。ただ、ラブライカに関していえばプロジェクト・クローネに居たとしても違和感がありません。そのため、ソロはもちろんだがラブライカでも十分に使用できる物となっている。

「先ずは、聴いてみてください」

二人に歌詞を渡し、実際に曲を聴いてもらう。

「……曲だけ聴くと綺麗でいいですけど、歌うとなると大変そうですね」

「Красивая песня。早く美波と一緒に、歌いたいですね」

実際に曲を聴いてみて心配そうな美波と、純粋に美波とステージに立てるのが楽しみな二人の姿がある。不安と期待がそこにあるのだろう。

「新田さん、アナスタシアさんのお二人は、元々ボーカルに関してはかなり高い位置にあります。日頃のレッスンの内容から見ても特に心配はしていません」

アナスタシアに関しては、プロジェクト・クローネで受けたレッスンがある。美波に關しては、シンデレラ・プロジェクトで見れば、全体的に見てもトップクラスのバランスの良さを持っている。曲が二人の得意なボーカルを重視した物であるのも考えると不安に思う所はない。

「ですので、ラブライカでレッスンを行う際はほとんどが調整になります。新田さんには、シンデレラ・プロジェクトのリーダーとして他の方を引っ張って頂きます。アナスタシアさんは、いずれプロジェクト・クローネの方のライブの準備がありますので、それまでに満足のいくものにして頂きます」

「プロジェクト・クローネの方でもライブがあるんですか？」

「はい。シンデレラ・プロジェクトの後になりますが、公演までの期間は短いです。内容は前回とあまり変わりませんのでそこまで大変ではないと思います。あくまでも、

ニュージエネレーションとトライアドプリムスの曲が同時期に発表されるのですがその宣伝の為です」

「凜ちゃんも大変なんですネ。今でも大変そうなのに」

「凜は、クローネでも頑張っています。とても、Он светит。輝いています」

「そうですね。アナスタシアさんも大変だとは思いますが、渋谷さんはシンデレラ・プロジェクトのライブの前には、トライアドプリムスの方でのレッスンも行います。プロジェクト・クローネの方での仕事もありますので本当に大変だと思います」

渋谷凜は、島村卯月や本田未央とのステージの方を見ていたが、スケジュールに関していえば今の段階でも相当ハードなものだ。それでも、今の凜のやる気には僅かの影響も与えないだろう。今の凜は、武内の予想よりも上を行っている。

「私達も負けていられませんね。頑張りましょう、アーニヤちゃん!」

「美波となら、大丈夫です。一緒に、Давайте сделать наше дело
Мое Лучшее。頑張りましょう、美波!」

「では、今日は曲のイメージを掴んで頂きます。特に難しい事は考えずに曲と歌詞に心を向けて下さい」

レッスンと言うよりも顔合わせのような物だ。曲と向かい合い、曲に対しての自分なりの考えや気持ちを得る為に。

◇◇◇◇◇

美波とアナスタシアの歌声に耳を傾けながら仕事をする。時々二人の様子を見る為にノートパソコンから視線を外す。

「ココは、もう少し抑えた方がいいのかな？」

「どうなんでしょうか？」

二人は、歌を歌いながら自分達の好きなように曲のイメージを掴んでいく。聴いているだけだが、同じ曲、同じ人間が歌っているとは思えないぐらいに表情は豊かだ。

（イメージを掴むのは時間が掛かりますか）

二人の中でのイメージを合わせている訳だが良くも悪くも進んではいけない。どちらも深く考えているからこそすり合わせが上手く行かない。ただ、技術的な物は問題なさそうなので、それを踏まえて今後を考えていく。

「プロデューサーさん」

「なんででしょうか？」

「アーニヤちゃんと話してみたんですけど、ココの部分は少し抑えた方がいいと思いますか？」

「どうやら先ほど話していた部分のようだ。」

「新田さんはどう思いますか？」

「私は、ココは抑えて次に繋げた方がいいと思います。その方が気持ちを伝えられる気がします」

「アナスタシアさんは？」

「難しいです。でも、美波の言う事もわかる気がします。どうすればいいでしょうか？」

曲を合わせる際には、製作者側とすり合わせる方法もある。ただ、実際に歌を歌いステージで演じるアイドルに任せる事にした。

「この曲は、お二人の物です。大変だとは思いますが、自分達の手だけでやってみてください。答えは幾つもあるでしょう。しかし、お二人の持つ物は、お二人にしかわかりません。そして、それがブラバライカにとっては答えになるはずですよ」

この曲は、既に二人に託された物だ。その結果がどんなものであったとしても良い物であると信じている。

「わかりました。アーニヤちゃん、頑張らしましょう！」

「はい。美波と一緒なら」

二人は、元の位置に戻るともう一度歌ってみてイメージを掴もうとする。

（難しい事です）

二人の話を聞き。二人の歌声を聴いている。こうしてただ聞いている身としては、その変化を楽しんでさえいる。二人には大変だとは思うが、聴いている方からしてみればどれも良くて答えは出せない。

(会議でも悩むでしょうね)

彼女達の歌からどのようなステージや衣装を決めるか？ 今回の物はサンプルとして収録してある。結果が決まればいいが、決まらなければ会議でも揉めるだろう。

(ラブライカの問題はこちらですな)

今も一生懸命に曲に向き合う二人を見て、歌声を聴いて、今後の会議への癒しとしよう。